

敗戦日本国始末日記

平龍生

敗戦の、その日その時から、戦いではない新たな悲劇の幕が開けた。

無辜（むこう）の民は内地、外地によらず、その場に立ち合わせた者は無防備のままに、負けた国の負う「恐ろしげな局面」に、多くはおのが身一つで立ち向かわねばならなかった。

老若男女、すべてが対象者となった。

彼らは語るべき言葉を多くの場合持ち得なかった。それぞれに、その違いはあるが、戦争に負けた国の惨めさを、いやと言うほどに、彼らは思い知らされた。身と心に……。敵方の人間どもの眼は、もはや、獣性そのもので、あらゆる「暴虐の行為」が各地で猛威を揮い、敗戦国民の歩む一歩の道は、“生き地獄”の様相を呈して行ったのだ。

見るも無惨、聞くも無惨、語るも無惨の物語に結末はない。ただ延々と続いたのだ。

而（しか）して、彼らの多くは何も語らない。

いや、語り得ないのだ。

なぜなら、その殆んどの犠牲者たちは無力な犠牲者そのもので、語るべき口を開く機会さえも与えられることはなかったからだ。

やっと、私は彼らの語らざる“その泣哭の叫び”を、この度、わずかながらに、聞き出すことが叶った。

困難な状況でも、遺された書置きなどの類いを丹念に拾うことに心を傾けたお陰で、臙げながらに、あちらこちらからと、或いは、深き、地の底からと、その声を届けたいと願った者たちの“究極の魂の叫びの声”が、微かに、微かに、震えの声となつて届いて来るのを感じた。むべなるかな。

内地では、戦勝国を名乗った第二国人たちによって、略奪、詐取、強盗、強姦、殺人、土地の不法収奪などあらゆる犯罪が、弱体警察の力を疎んじ、無法化のもと暴虐を欲しいままにした。

また、それらの行為と密接した関係下、戦後の「闇市」支配が、彼らに莫大な裏の資金・資産をもたらした経緯も屈辱の事実ごととして「敗戦日本国始末日記」では重要案件の一つとして扱ってある。

強引極まる闇の成金錬金術のために、これまた、多くの者が犠牲となった。その不逞の徒どもの「闇市物語」の内実を追うだけで「犯罪総覧」なるものが完成する。

げに、怖ろしきは人の獣欲なり。

さらなる暴虐の行為として、連合軍の占領政策の下、婦女に対する性的暴行が限りもなく続いた。

戦争の地と停戦の地、彼らの頭にはそんな区別はない。「獣のような男たち」の蹂躪の様たるものや、なんともおぞましい。

まして、帰国の途での、満蒙開拓団などが蒙った悲劇などはここでは筆舌に尽くし難い。それでも、事実だけは伝え置くべきだろう。敢えてと言おう。決断の末、本稿に収録した。

内外地にあつて戦犯の名の下、抑留され、裁かれた元兵士俘虜たちの痛念の想い、その手記なども手元にあるので、こちらは「きけわだつみのこえ」の伝に則り、声なき声ではなく、「声ある者の声」として証言者の声そのものも、一部ではあるが整えることも叶った。

さらに、旧ソ連に抑留された、いわゆる“シベリア捕虜問題”にもペーシを割いている。およそ人権なきこの国の暴挙の数々も、敗戦国日本人が蒙った“大きな心の傷”の一つだろう。今もつて荒野の雪野を脳裏で追う限り、寒々としていて、我が心も安からぬ。

只々に、犠牲者の霊安かれと祈るばかりだ。

暗い話ばかりで息も詰まりそうだが、我ら日本人は、どのような艱難辛苦の場であろうと、希望を失わない誇り高い民族だ。

日本人はそれらの至難の場に打ち克つ“崇高なる精神性”“健気な資質”“至高の不屈なる魂”というものを備えているのは確かだ。

その日本人の或る種の“逞しさ”にも私は心を傾けた。

「敗戦の惨めさ」については、“知っている人は知っている。知らない人はまるでナンニモ知らない”の両極端の傾向が見られる。“

まるでナンニモ知らないこと”の無知さ加減に、可成りの重要なポイントが隠されていることに気付いて欲しい。

いや、多くの重大事の事柄は、GHQの言論弾圧の下、歪められ、かつ隠蔽されて来たがゆえに、何事も知らされなかったと言うのが、この場合は正確な答えかも知れない。

“平和ボケ症候”の兆候とて、敵方のその成果の一つではなからうか。敢えて、“敵”と称したが、再生日本に足枷、手枷を加えている者が、この日本で大手を揮っている事実が今も蔽としてあるのだ。

その敵が誰であるかはここでは論ずるべくもないだろう。

“蠅螂（とうろう）の斧”ならんが、“知らない人はまるでナンニモ知らない”の一派の人々に、今一度の覚醒を私は望む者だ。

その意味での戦後からの今一度の検証なのである。

「敗戦日本始末日記」なる題が付されているが、“始末のついていない始末記”の意味も持たせてある。

「始末に始末」を付けるのは、読者の一人ひとりであり、実は作者ではない。大きな視点での呼び掛けとなれば幸いである。

## 目次

### 第一章 日本の夜明け、その始末記

終戦の日は晴れだった

「敗戦の日」国土は三分割された

食うことは食われることなり

そして：牛がいなくなった

続牛泥棒顛末記

闇市事情始末記

正体見たり、闇市軍団

闇の賑わい露店市国情記

神戸戦争の実像と虚像

闇市戦争の始末記

闇市皮膚論とはなに？

## 第二章 無辜（むこう）なりしや戦勝国始末記

帝都の貞操を守る純潔部隊あり

性の戦場始末記

日本国を蹂躪した暴徒の兵

かくて、女たちの手記は遺された

凌辱日記が語り掛ける人生

犯され、生かされ、そして殺された

暴力連鎖の行くつくところ

血涙の日記が遺書となった

白旗バンザイ降伏始末記

戦争裁判始末記 ①

戦争裁判始末記 ②

### 第三章 闇市成金術の始末白書

闇なるがゆえに闇なのだ

千金争いはシヨバ争いなり

無法、かつぎ屋稼業の始末記

所変われば品変わる闇市史

今も昔もアメ屋横丁

日本人死す！密造酒禍とヒロポン禍

麻薬市場に群がった者たち

闇市の終わりが日本の夜明け

第四章 ソ連邦人の不参戦始末記

何処にぞ行かむ、人の道

満州開拓団の敗戦始末記

かくも戦いしか、白衣の天使たち

復讐とても、徒花ならんか

三十八度線を越えて

被虐の果ての犠牲者たち

シベリア収容所始末記

われら白樺派なりし

仲間たちとの再会

北暁子の春

男たちの旅路・その果ての始末記

※巻末資料一覧表

## 第一章 日本の夜明け、その始末日記

終戦の日は晴れだった

戦後七十数年―あれこれと論議を尽くしたところで、時の流れの総括・歴史的史実とやらが、おいそれとは理明となるわけでもない。

〈忘却〉とやらの時の流れも重ね過ぎた。

まずは、敗戦国であることが確定した昭和二十年八月十五日、その日その時に立ち戻り、「敗戦日本国の始末記」、その事実ごとの流れを、実証を元に追うことから始めてみたい。

何もかも、それこそが忘却の彼方、いや、幾多の苦難に遭遇した戦後世代を名乗る者たちも、もはや、生存する者たち幾何（いくばく）になりせば、これからの証言ごと、資料的価値なども含めて再録しておく要ありと考えた。当、「敗戦日本国始末」の記、わが備忘録としても、追々の記憶を、この際、呼び覚まし、特に、戦後世代生まれの方々を念頭に、語り掛けの思いを持ち、筆を進めたいと思っている。

私自身の身分を明かせば、「戦中派・焼跡派世代」の生き残りの一人、生き証人としての果たすべき役割についても責務を負う者なり。

敗戦、廃墟の街、食糧難…。

人災の極みで、みんながみんな、魂魄（こんぱく）ここに極まれの状態に追いやられていた。

もちろん、仕事もなく、住む家とてなく、まさに、「飢餓」ともいうべき食べ物のない時代、すべからく、人々は生きる術を失い、路頭に迷った。明日への道しるべとして、見定めようがなかった。「混沌の極」にあった。それでも、日本の国民は復興に向けて立ち上がった。

雄々しくと言いたいが、そんな格好のいいものではない。

一日、一日を重ねての戦後の復興、この道程、日本復興の歩みを辿ってみれば、今更ながらに、「負の遺産」が、いかに大なるものであったのかが、浮かび上がって来る。

当時の日常生活を振り返って見れば、「大事・小事」のすべてが、戦後のみの一方的な論理、「戦勝国」側の勝手な言い分などで押し通された。

この書では、小事を積み重ねて大事に至る過程を「現実にあった話」として出来る限り、丹念に追って行くので、読者のみなさまも、読み終えた時点で「大事」の何たるかを、各自なりに、よろしくご判断頂ければと思う。

戦後の「負の遺産」を負いしゆえの「敗戦の日」、終戦の日などと称する向きもあるが、負けた国であったことが、総ての戦後の出発点となったのだから、この稿の場合は、あくまで、「敗戦の日」と認識したところから論を発していることをご承知おき願う。

「いわれなき他国からの難癖の類い・諸蛮行の数々」など、日本国と関わりを持ったそれぞれの国と、わが国との関係の諸事を、つぶさに炙り出していくことになるが、どこの国がどこの国という特別の思い、偏見は持たぬよう努めるので、その観点からのご考察を読者の皆さまにはお願いしたい。

遠くなりにけり「敗戦の日」、まずは、その日、その時、人々は如何なる心境にてありし。

「敗戦の日」、人々は何を考え、何を語ったのか。この「国難の日」のこと、先人、先達たちはいかなる心中で、この日を迎えたのだろうか。

この日正午を期して、終戦を告げる紹勅、天皇陛下の玉音が、ラジオを通して、八洲（やしま）の国の津々浦々の全国民に伝えられた。

昭和二十年八月十五日、大東亜戦争が終結した。全国的に晴れだったと言われている。

作家山田風太郎の記した一連の「戦中・戦後・動乱・復興に関する日記」

高見順「敗戦日記」永井荷風の「終戦日記」などの一文を、抄録、抜粋のかたちを借りながら、また、他にも、「こんな一面もあったのか」というような面白いエピソードもあるので、「敗戦の日の寸景描写」も兼ねて、貴重な記録なども、稿の始めに、採録しておいた。

政治記者で、当時の鈴木内閣の國務相、情報総裁の任にあり、終戦への実現に努力した有力なメンバーの一人との評価のある下村海南（一八七五～一九五七）の一文。 （※作者注―全文旧仮名使い原文のまま）

『放送会館を引き上げるとき、二重橋前は大変な人ですよといふ。車を宮城前に走らせて見ると、いかにも馬場先から日比谷から三々伍々二重橋の広場に向けて群衆が絶へない。車を降りて広場までくると、立ちしままに黙祷をささげているのがあり、坐して砂利に頭を伏せているのがある。列を組みつつましく何か詞を捧げているのがあれば、調子を揃へて君が代をうたふもある。時折りに天皇陛下万歳と悲痛な声で合唱される。そこにもここにも嗚咽泣哭の声が広場に限りなく聞こえている。私は胸が一杯になって立ちつづけた』

「何となく街が無音の状態に見える。通行人が路上をフワフワと宙に浮くやうに歩き、道ばたが白日に白く乾ひているも、白昼夢を見ているやうな図である。電車がのろのろと走るツンボになったやうな気がする』

こちらは、美術評論家富永次郎（一九〇九～一九六九）の一文。

横須賀海兵団の水兵野口富士男は、八兵舎前広場に総員集合して放送を聴き兵舎に戻る途中、ほんとうに海軍で使うつもりであったのか大八車に槍の束が運ばれてゆくのを見た。

『午後の日課が取り止めになった兵舎の中には人影も稀で、話し声もなく、妙にシーンとしていた。そんな中で、私と同班の一人が、何かの拍子にふつと低ひ笑ひ声をもらした。すると、通路を隔てた向かふ側の居住区にいた下士官の一人が裸足のままに猛烈な勢ひで飛んで来て、

「貴様は日本が負けたのがおかしいか」

と言ふなり、ガアンと一発くらわせた。さういう光景を見届けてから、私はこみあげて来る嬉しさを抑えるために兵舎を出て、何といふこともなくその辺をぶらぶら歩いた』と記す。

『やはり戦争終結であつた。

十二時時報。君ガ代奏楽。詔書の御朗読。

―遂に負けたのだ。戦いに破れたのだ。

夏の太陽がカツカと燃えている。眼に痛い光線。烈日の下に敗戦を知らされた。

蝉がしきりと鳴いている。音はそれだけだ。静かだ。(中略)新聞売り場ではどこもえんえんたる行列だ。その行列自体は何か昂奮を示していたが、昂奮した言動を示す者は一人もない。黙々として新聞を買っている。兵隊も将校も黙々として新聞を買っている―気のせいか、軍人はしよげて見え、やはり気の毒だった。

あんなに反感をそそられた軍人なのに、今日はさすがにいたましく思えた。

鎌倉に出た。駅前に入団らしい水兵の群れがいる。よれよれの汚い軍服で、何だか捕虜のようで、正視し難かった。駅前の街の人々がまたかたまつて、その水兵の群れを見ている。今日という日の新入隊なので、皆もそうして見ているのだろうが、今までと違った人々の表情だった。

第一、今まで物珍しそうに遠巻きにして眺めているという事はなかった。そんなせいで、余計捕虜のように見えた。汚い。うらぶれたその姿が胸をついた』

作家高見順(一九〇七―一九六五)

『…午後二時過岡山の駅に安着す。焼け跡の町の水道にて顔を洗ひ汗を拭

ひ、休み休み三門の寓居に帰る。S君夫婦、今日正午ラジオの放送、日米戦争突然停止せし由を公表したりと言ふ。怡（あたか）もよし日暮染物屋の婆、鶏肉葡萄酒を持ち来る。休戦の祝宴を張り皆々酔ふて寝に就きぬ』

作家永井荷風（一八七九～一九五九）

『数十人の看護婦たちはーみんな土地の若い娘であったー何ごともなかったかのやうに、いつもの昼食の後と少しも変はらず、賑やかな笑ひ声を立てながら、忽ち病室の方へ散っていった。戦争は遂にーどんな教育にもかかはらず、娘たちの世界のなかまでは浸みこんでは行かなかったのである。事務局長をはじめ、疎開の医局員の多くは、沈鬱な表情をしていた。しかし、涙を流した者はひとりもいなかった』

東大内科医加藤周一（二九一九～二〇〇八）、評論家で医学博士。

疎開先の信州上田の結核療養所にて。

『正門にさしかかると驚くべき風景を見た。軍服の憲兵隊たちが、カーキ色の毛布に私物や官給品をこっちやにくるんで肩にかけ、トットと門を出てゆくではないか。大日本帝国の最高官衛（かんが）に服務していた憲兵の誇りはいまいずこにありや』などと記した同盟通信記者の一文もあり、日本国民の悲憤慷慨ぶりが窺える。

同じような体験を一兵士の観点からだ、次のようにもなる。

現役の兵隊の一人が記した少し間の抜けた終戦日記、「二等兵復員事情」とタイトルが付されている。  
(※作者ー一部文を補遺)

「昭和二十年八月十五日、終戦の日、所沢の飛行場に陸軍の最新鋭機が続々と到着したし、我が陸軍もこんな飛行機を持って居たかと、ビックリしました。集まってきた連中は、この基地から飛び立ち、房総沖の米国太平洋艦隊に特攻攻撃を仕掛けると息まき、部隊長の説得で十六日早朝にそれぞれ基地に引き揚げました。その後は、何もすることがなく、五、六人づ

つ筵（むしろ）の上で車座になり、今後の成り行きに付いて、語り合ふばかりでした。

見習ひ士官殿の見通しでは、我々は連合国軍に武装解除され、一定期間捕虜として労役に従事し、その後、釈放されるであらうと云ふ話で、それなら命だけは助かると安心しました。所が二十日の朝、シャベルと毛布と御米を入れた雑囊（ざつのう）を背負ひ、トラックが乗り込んで、第一回の復員兵が、帰って行きました。（中略）その裡に備蓄されていた各種の航空食糧、たばこは金鶏が二千本、軍靴二足、毛布が三枚、巻脚絆が二足、などが配給され、今まで煙管に詰めた金鶏の廻し吸ひをしていた連中が、半分ほども吸ふと吸いがら入れに放り込むと云ふ、豪勢なことになりました。（中略）何だ彼だと云って頂いた品物の合計重量は八十キロ余りで、これを体重六十キロの小生が担ぎ、二十六日に復員しました。（中略）兎も角も我が家に辿り着き、靴脱石に荷物を下ろすと、其の儘（まま）動けなくなりしました。

そこにおふくろが帰ってきました。

おふくろは廊下の硝子戸を急いで開き、荷物をずるずる引きずり、茶の間に運び込む否や、素早く包みを開き、中身を点検し始めました。わが子を省みる暇もなく、まず、タバコ、航空食、ビタミン食、活性鉄飴、代用チョコ、などを有り合せの空き缶に、誠に手際よく仕舞ひ込んで、靴下二足に詰め込んだお米は米櫃（こめびつ）に空けると、復員してきた倅をジロジロと眺めながらの第一声が「お前、虱を背負ってきたんじゃなひかい——でありますた』」

と、これは、笑えぬ笑い話のような話、もちろん、ここに並べられた品物類も、やがてのことには、闇市などには並べられることになるのだが…。

『三月九日の空襲で母を失い、四月二十五日の空襲で父を失った小学校六年生の春沢光夫は、上野駅で浮浪児となってコンクリートの上に新聞紙を敷いて寝ていた。「駅の中にすへつけてある拡声器から特別ニュースがあ

る」と聞いたのでその拡声器のそばにいつて聞ひた。いままでがやがやしていた上野駅がきやうに静かになって、だれもいないかのやうにしずまりかへって、皆、くびをさげて天皇陛下のおことばを聞ひています。

駅員はじめ、駅にいた人たちは皆泣いた。

ぼくは、「この戦争のために、お父さんやお母さんも死んだのです」と考へると、いくら子どもでもかなしくてなりません。ぼくも泣きました』

(※作者注―復員兵士、孤児少年の手記はwebサイトより)

終戦の日を、「外地で迎えた者」たちには、当然のことながら、緊迫感が伝わって来る。

『昭和二十年八月十五日、朝鮮京城の空は吸ひ込まれさうなほど真蒼に晴れ渡り、北には北藻山がくつきりと聳え、南の南山は静まり返っていた。雨勝ちであったその年の夏一番の暑い日であった。京城府内の要所々々には、前日から「十五日正午重大放送が、一億国民必聴」の掲示が大きく貼り出され、街中が何事かと重大な事態の予測に緊張して、落着かない様子であった。

そして、「玉音放送」。この日、この時を境にして、在満三百万の在外同胞は“異郷”に立たされたのである。終戦時京城には、軍隊を除き十七万の一般邦人が在住していた。

当時の朝鮮では最高学府であった京城帝国大学でも、八月十六日、朝鮮人職員がいち早く「京城大学自治委員会」を組織、翌十七日には大学正門に大極旗が掲げられ門標の「帝国」の二字は消された。研究室図書館なども彼らの手で封印され、許可なく出入りすることはできない状態となった』

(※註①「ある戦後の序章MRU引揚げ医療の記録」西日本図書館コンサルタント協会刊』

(☆註①～⑯までの表示は後記資料欄で内容紹介)

『八月十五日はよく晴れ渡っていた。(中略)農学校の生徒がどやどやと校

庭へ集合を始めた。およそ四、五百名はいただろうか。

体操台の上へ、頭の禿げた校長が登った。

私は、これから始められる何かを待って、その光景を見ていた。(中略) 私は見物をあきらめて、ぎらぎらと照り返る石段をゆっくりゆっくりと登って行った。

その時、突然背後の生徒の群れの中から、波のやうな騒音が聞こえた。私はふり返ってみた。その音は、すぐに泣き声にかわった。白い開襟シャツのイガ栗頭の群れの中から起こるその声は、妙に私の神経を刺激した。(中略) 何か起こったにちがひない。青い顔をした〇〇さんの口から戦争が終はったのだと知らされたのはその直後であった。(中略) 別の不安が私たちの間にすぐに湧き上がった。それは直接死に直面しているような恐怖感から来るものであった。

日本は負けた、すぐその後には何か起こるに違ひない。

その起こるものを極度に誇張して考へた私たちはいつでも逃げられるやうに用意をして十五日の夜を迎へた。(北朝鮮宣川在)

〔「流れる星は生きている」藤原てい〕』

それぞれの方の「敗戦所感」の受け取りようは、読者のみなさんの思いのほどにまかせるとして、人様々、人間模様のありようが、ここでは、その立場、立場から多面的に見て取れる。皆な新たなる宿命を負っていた。その後、外地に在る者の多くは痛ましい場に遭遇することにもなり、或る者は命を落とす羽目ともなる。負けることの過酷さが『生き地獄』そのものの現実となって、彼らを緊迫の場にと追いやることになるのであった…。

「敗戦の日」、国土は三分割に！

「さて、敗戦・終戦」とは？どのよう、定義された日なのか？

史実事項を浚っておこう。

昭和二十年八月十四日、ポツダム宣言の受託を連合国に、日本国が通告した。正式には、同九月二日に戦艦ミズリー号の船上で、連合国との間で降伏文書の調印が行われ、日本は占領軍の指揮下に入った。

降伏文書の調印に先立ち、アメリカ主導で組織された「連合国軍」は、同八月二十八日から、イギリス、オーストラリアや、ニュージーランドなどによる「イギリス連邦」との協力なども受け、日本への進駐を開始した。

事実記述は、どうしても文章が固くなるので、なるべく、興味深い話だけを抜き書きしてここでは記そう。戦争に勝った国は応分の分け前、報償をよこせというのは世界の通例、かくして、日本国にも、「分け前よこせ話」は、当然のことながら突きつけられた。

「日本占領案」、みんながみんな勝手なことを言い出した。

初めに、日本国分割案あり。

その素案とは？これがなかなか興味深い。

まず、ソ連が提案したのは、

『北海道・東北地方はソ連、

関東、中部、関西、沖縄地方はアメリカ、

四国・中国・九州地方はイギリス』

今は、みなさまもご存知の通り、日本は日本のまんま、この案のように、分割はされずにすんでいるので、幻の話となったが、ソ連（ロシア）などは今もって、北方四島（択捉島・国後島・色丹島・歯舞諸島）を占拠しているのだから、元通りと言うのは正確な言い方ではない。

ソ連はどさくさまぎれの「居直り強盗」分際、いちばん、許せぬ存在だが、抛って来るところのこの件りは、のちに、詳述するので、ここでは、この程度の言いザマに止どめおく。

また、別案では、大戦中に勝利を予期して、連合国軍は、東京都区部の統治を「米英中ソ」で、近畿地方は「米中」の共同統治にする案なども画

策していた。しかし、これらの案は不採用、ご和算になったその理由は明確ならず。あれやこれやと、無理無体のエゴ丸出しの各国の大国意識が災いしたのだろう。

結局、「日本国民の崇拜の的である天皇を通して統治するのが、いちばん、安穩に統治可能」の旨の当時の外相、重光葵の主張が受け入れられ、最終案は、日本政府を通じた「間接統治」に変更され今日に至る。

もちろん、占領統治下、日本の主権の一部は制限された。

余話を拾う。中国（支那）は、大戦後、アメリカから、蒋介石率いるところの国民政府に対して、東京に派兵するよう求められたが、共産党勢力・八路軍と交戦中だったゆえもあり、派兵する余裕がなく、この申し出を断っている。それらの事情ゆえに、「日本国は正式には中国を戦勝国とは未だに認めていない」「ソ連はポツダム宣言受託後に参戦、満州の大連、旅順などには派兵したが、日本本土には進駐していない」  
それでも、無理無体な話ながら、ソ連は戦勝国の仲間入りを果たしている。

もう一つの余談―戦勝国気分で、様々な要求を日本に突きつけてきた国のことも付け加えておきたい。言わずと知れた、あの「第三国」である。当時国家としての「国体存在」がなかった国を指す。「分け前よこせ」にまっとうから喰い付いて来たのは「朝鮮人」であった。

だが、実際には「国家」としては戦っていないから国際法上でも「領地を分割しろ」と求めるだけの資格は充たしていなかった。

註―付記になるが、第三国には「台湾省民」も含まれる。日本の統治下にあつたことで、内地に移住していた者や、敗戦の時期、船員（日本軍属）の身であつたために日本に寄港、滞在していたというケースなどもあり。

一つ、付け加えておく。朝鮮人Ⅱ第三国人に対してのマッカーサーの失言なんどもある。こともあろうに、マッカーサー自身がとんでもない発言

をしていたという話。

「第三国人を戦勝国と同等に遇せよ」と「朝鮮人種の立ち位置が何たるか」も知らずに、一見、人権家者ぶって、こんな通達なんでも出し、第三国人を増長させたふしもあるとか。

マッカーサーを司令官とするGHQ(日本占領の最高司令部)は、なぜ、そのような“盲蛇におじず”の通達を出したのか？

意気揚々、日本に降り立ったマッカーサーは、朝鮮半島出身の朝鮮人に向け、また、日本に居留する朝鮮人に向けても「今日は日本による朝鮮人解放の日だ」と、宣言したりもした。この時点では『第三国』発言はない。

また、「日本国民の頭脳は十二歳程度である」とも公言した。

時の大統領ルーズベルトについて触れておこう。

戦時中、日本人のことを、「ジャップは野蛮人」と言う発言を彼は平気で口にしていった。もつとも、日本国民も、「鬼畜米英」と、口にしていたので、その限りでは、どちらがどちらとも言えない。

この「鬼畜米英」と言う文句だが、後程、そのものズバリの「蛮行米英の悪行」も、記述されることになっているので、「その正体の一部はみたり…」という場面もあり。

当初に記した「敗戦の日」の各人の所感とは、その場限りの文言だが、もう、負けたと世間に知れたその日から、日本内地で、あるいは、外地の各所で、日本国民は窮地に立たされた。

外地での「危急の場」は、後程、全国各地域ごとに、章を立てて触れてゆくので、まずは、国民の大多数が、その日その時から、直面することになった「負けたが故の内地事情」を探ってゆくことにしよう。

食うことは喰われることなり

「食うことハジメ」の始まり、国家体制がどう揺らぐとも、こればかり

は、日々、真面目に立ち向かわないと人間生きてはいけない。

極く身近な「食うこと」の問題から、まずは、敗戦国日本人の〈右往左往〉ぶりを再現してみることにする。みんな生きること必死だった。

食う、そのことのために―戦後直後の荒廃した都会地など、人の集まるところに『闇市』という、その名の通りの「闇市」がはびこっていた。

まずは、文字通りの「闇の市」から、「闇の戦後史」とやらをひもといてみることにしよう。そこでは、人間そのものの裸の姿、興味尽きない様々な人間模様が、繰り広げられることになるのであった。

「闇市場」、何でもありの無秩序社会、いや、そこは、無法地帯そのものであった。

飢えずに、その日、その日を暮らして行くには、誰しもがその日の糧を求めての知恵を絞らねばならなかった。

都市機能の失われた人の住む街には、必然的に、「闇市」が生まれた。飢餓戦線の補給基地が、闇市であったのは事実であり、闇市なくしては、国民の生活が成り立たなかったのも、これまた事実である。

諸資料が闇に埋もれつつある現状、生き証人の余命のほども幾何（いくばく）となりせし時の流れとも併せ考え、今一度、この「闇市そのものの検証・裏の闇市史」なるものを整理しておく要ありと思う。

日本国の存在すら疑われたこの混乱の時代のこと、この機とばかりにどこからともなく不逞分子が沸いて出て、「闇市」で好き勝手放題、“自分が法律である”主義なんぞを持ち出し、彼らは徒党を組んで乱暴狼藉を働いた。

「金、金、金！」これしかない節操のなさ、「富を奪う」そのためには手段を選ばず、闇市ではあらゆる不法が罷り通っていた。

相手の弱みを突いての何でもわが物にする。卑しい火事場泥棒根性・奪い取った旧軍隊の武器を携えての脅迫行為・略奪行為・焼け跡地などに住み着き無法占拠・あげくの土地収奪・あるいは、日常的な詐欺窃盗、盗品

の転売などなど……もちろん、殺人・放火行為など当たり前の乱暴狼藉ぶり。ありとあらゆる犯罪が「闇世界―敗戦日本国」では、極く、当たり前のこととして毎日のように繰り返されていたのであった。

誰が優位に立ったのか。大手を振って第三国人（朝鮮人・台湾省人・大陸系支那人など……）たちが、「闇世界」ではいちばんの台頭ぶりを見せた。彼らの立ち位置が、敗戦前の状況とは逆転したがゆえのこれは現象でもあった。“日本が戦いに敗れた”その日を境に、当然のことながらその流れが変わったのだ。

もちろん、物のない時代のこと、「悪知恵の働く日本人、それに呼応した「暴力団や愚連隊などの日本人グループ」など、これらに与する諸勢力もあつたことも、事実ではあつた。

「闇市はピーク時は一万七千軒を数え、有効な手段を打てない国と政府に代わって、庶民の「衣・食」を潤す役割を果たしたのは事実。

戦後の混乱期、闇市をさまよい歩きながら、貧しい国民たちは、それでも、しぶとくは生き残った。しかし、実際は、力と金がある強い者が勝ち残る「弱肉強食の世界」なり。

当時、昭和二〇年八月三十一日の朝日新聞記事には次のような記述もあつた。

『生きのびることができなかった人びと「行路死亡人（ゆきだおれ）は、ひっそりと焼跡の瓦礫のかげに身を横たえたまま、もう二度と睨をあげることはなかった。生活を必死で支えるために仕事へと出掛ける通勤者たちの足元に、ふと目をとめると、スルメのように横たわっている者がいる。生きているのか死んでいるのか判らない』

申し添えておくが、その日、その日のメシを食うために暮らしを支えるために、庶民としてそれなりの悪知恵を働かせたし、市民を守る立場の警官お役人として当たり前の役得の闇の不正行為、ましてや、あらゆる利権の既得権を手に行っている政治家・実業家・資産家なんども、「うまい汁」を啜つ

た一味であった。

某宮様曰く。「金持ちは堂々と闇をやり、庶民はこそこそ闇をやっている」とのご託宣がこの混乱期の時代の一面を物語っている。

味方の中にも、エゴ丸出しの「闇屋」が、必要悪と言ってしまったら、それだけの話になるが、うじょうじよと巢食ってはいたのだ。「これでも同胞日本人か！」そんな手合いもいたのはこれまた事実である。

後程、この項目についても例証を挙げさせてもらうので、殊更立てて、第三人だけをターゲットにしているのではないことを、お判りいただきたい。

…そして、牛がいなくなった

さて、理屈ばかりでは、ご退屈の向きもおられるかと思うので、具体例・実証レポートでもって、「事の実相」を如実に語ってゆこう。

それでは、まず、こんな「モー」とも泣けぬ「哀しい物語」からお届けすることにします。

「日本中から牛がいなくなったって?!」なにゆえに?それが何とも空恐ろしい話になるのだが、この話に関連して、まずは、戦後の蛮行に掛けるは人後に落ちぬ朝鮮民族たちに登場してもらおう。

悪事に掛けては、気合い充分の連中だった。

ちよつと気を持たせて申し訳ないが、この話の前に、当時の諸事情も知っておいてもらわねばならぬので、補足事項云々の説明をしておこう。

当時の状況説明、彼らは第三人とも呼ばれていた。

戦後日本では「戦勝国」と「敗戦国」が上下の関係の下に生まれた。

「われわれも戦勝国だ」と真つ先に名乗り出たのが彼ら朝鮮人たち、何かにつけて、「戦勝国だ!戦勝国だ!」と敗戦国相手に注文をつけた。

その日から日本国は彼らに二等国と呼ばれた。

終戦直後、「朝鮮国も戦勝国だから応分の分け前に預かるのが当たり前だ！」と、日本占領軍最高司令官ダグラス・マッカーサーに、あれや、これやと要求したのが事の始まり。

ところで、その時、日本占領軍の最高司令官ダグラス・マッカーサーは、即刻に、鉄槌を降ろし、彼らに対して「断！」とやった。

ガツン！！その文言が「お前たちは戦争に加わったわけじゃないだろ。戦って勝った国が第一国、負けた国が第二国の関係だ。なんにもしていない連中は第三国と定義しておく。わかったか、お前たちい！」

まあ、こんな乱暴な口は利いてはいないが、おおよそのところ、こういう意味となれり。

第三国とは、正確には日本統治下にあった台湾省・朝鮮のことで、当時国家体制がなかった国を指す。実際には、国家として戦っているとは国際法上では認められていないので、戦勝国の資格において、諸要求をするには有り得ない話となるのだ。

もちろん、朝鮮半島が、その後の諸変遷を経て南北分断のあと、三十八度線を境に、正式に、「朝鮮民主主義人民共和国」、「大韓民国」の名の下、独立国家となったのは承知している。

さてと、「牛の話」が、ちと、脱線路線にと入ってしまったようだ。話を元に戻そう。

敗戦の混乱期を逃がさじと、たちまちに、第二国人たちが蹶起した？連合国進駐軍の日本揚陸の前に、つまり、正確に言えば、敗戦が告げられたその日その時から、彼らの進駐軍気取りの跳梁跋扈が始まった。

一部では、自分たちのことを、連合軍になぞらえて、「連合国民」と称す向きもあつたらしい。

そうそう、牛の話を提起したのだった。「その牛の話」だが、牛狩りにやつて来たのは、「朝鮮人暴徒の一群」であつた。

当時、日本国では農耕牛と言って、どこの田畑でも、農耕牛が使役と

して使われていた。『苦労さま。』苦労さま」と言うので、各農家ともその農耕牛をわが子のように可愛がり、大事に育てていたものだ。

さて、「牛狩り」の現場に足を踏み込んで見ると、「これは何たることや。実況レポートを一つ。」

その例話を示すと、さる農家にトラックで乗り付けた四、五人の若い男たち、トラックの荷台から飛び降りると棍棒片手に威勢よく地上に降り立った。目星をつけた牛舎にと向う。まだ、夕暮れ時、人目にもつくが気にはしない。馴れたふうに、何事も素早い。いや、乱暴だった。

不逞鮮人というのは直ぐ知れた。怒号に含まれる朝鮮訛りばかりは隠しようがない。これらの気配、農家の主たちには直ぐに知れる。

異変を悟り、牛舎に駆けつけた時はもう遅い。

もちろん、言い争いにはなるが、鼻の先では棍棒や鉄パイプがびゅんびゅんと風を切っていて、あげくに、殴りかかれ、足を払われ、突き飛ばされた。つまり、自分自身が命の危険に曝される。もう、その頃は、可愛い牛は無理やりに鼻輪を噛まされて、牛舎から引きずり出されている。

ほんの僅かな間の手慣れた強奪行為だ。

牛はトラックの荷台に押し上げられ、暴徒どもが荷台に乗り込むと同時に発車OK、この間、ものの数十分、たいていは、抵抗した農家の者は当たり構わずボコボコにやられて、骨折など当たり前の仕打ちに遭う。

かくて、「…牛は連れ去られた!」

なにゆえの「牛泥棒」なのか?この項に関してはわたしも一目撃者の一人となるので、追っかけ、この話には参加させてもらう。

まずは、「牛泥棒」編。この時の様子を記したwebサイトの文書を紐解いてみよう。

(※「関東の各地から牛がいなくなった」のタイトルが付されている先達北斗星氏のメール文②より)その②記述では、『当時は警察署が襲撃される事が珍しくなく、第三国人の襲来によって犯人を奪還された富坂警察署事

件（…作者注→後述）、ついで警官が殺された渋谷警察署事件（…作者後述）共産党が大群で警察署を包囲して外部と連絡を遮断「攻防戦」に出た平事件等、枚挙に暇有りませんでした』

『東京東部（すなはち大東京の中心地）北郊の荒川。古利根川↓中川、江戸川、利根川流域の牛は皆いなくなった。当時、あの辺は蓄力として農耕牛を使っていたが、深夜、不良朝鮮人が侵入して来て盗み出し、河原にひいて行って屠殺した。牛はモウと言って鳴いたので皆気付いたが、銃砲刀剣で武装しているので追うわけにはいかなかった。』

永年愛育し、慈しんで来た牛が悲しそうに泣きながらズルズル引き出され殺されるのを傍観するのは無念で耐え難かったが、手向かえば殺されるのでどうにも出来なかった。

こうして利根川流域一帯の牛は、多くが不良朝鮮人に盗まれ、殺され、闇市で売られた。この辺へも、新聞紙に包んだ肉塊を売りに来たもの。上流で賭殺した牛を、そのまま下流へ売りに来たのだろう

かくて、関東から、牛はいなくなった。

家畜相手ならまだしも、人間に対しても、関東、関西以西の大都市を中心に、日本中に灰神楽が立つような勢いで数多犯罪を重ねた。川崎、浜松、大阪、神戸などが酷かった』

#### 続牛泥棒始末日記

まずは実録レポート、「ケダモノの話」からと相なったが、これから始まる話の数々、表から消えてしまっている話も含め、かつ、問題点含みだ。何より、余りにも知られていない。

その分、少しでも、この際、表に出したいというのが当方の願いなり。

「妄言多謝！」なんぞという今の時代には余り使われない「死語」も、

この際、事始めに用いておく必要もありなどとも思う。

もちろん、わたしの話題の振り方、一朝鮮国相手だけではない。

アメリカを主力とした連合各国の連中にも、そして、ソビエト連邦、中華民国、台湾省などなど、戦前、戦中の時代、かつ、終戦後以降の日本にも関わった「戦勝国と称する者たち、あるいはそれに倣った者ども」の悪行非道の数々を白日に曝すのが、この書の主たる目的、容赦なく、時効などとは言わせぬ『事実語り』で迫る所存なり。

わたしの経歴を名乗るなら、れっきとした『戦中闇市派』に属する。

もはや、完全に「この文句も死語同然」になったような気もするので、この件りから、説明させてもらおう。

死語の似合う年代者、『戦中闇市派』の謂い、そもそもは、戦災・空襲のさなかに死んだ薄幸の少女像を描いた名作「火垂の墓」の作者野坂昭如が最初に言い出したこれは言葉とか。「戦争体験とは何か？」と、問われて「腹が減ることだ」と答えた御仁、これからの話も、多分に、その流れになって行くことは間違いないと思うが……。正確には、第二次大戦時に小学校（当時は国民学校）に入学した者、在学していた者たちを指し昭和三十九年から昭和十年までに生まれた者がこれに該当する。

そうだ。わが体験の一つには、「牛泥棒」の余談話がある。

「驚きの少年日記」も記すはずであった。

私は少年時、神戸・六甲山麓の村落の地の或る街に住んでいた。

その地は周囲を山々に囲まれており農地の田んぼも点在した。どこか、「牛泥棒」が発生したという前述の地利状況とも似ている土地で、農耕牛を飼っている農家が多くあったのも「牛泥棒」どもにとつては格好の地だと言えた。山に入り、焚き木を拾うのが少年の日課となっていたのだが、この山中では、牛の骸骨が捨てられているのをいつも目にした。ぎよつとなつて足が竦んだ。

山道に沿って雑木林があり、山の入り口となるあたり、その下の谷合い

の地が、「牛の墓場」の様相を呈していた。ここは屠殺場らしく、ばらばらに解体された骨格だけの残骸があちらこちらに散乱していた。

やがて、探索心を持った成果があつて、私は「牛の墓場」の意味するものに気付いた。

話の端緒は「暴れ牛」が、この田舎街には、時折りに発生することがあり、家が農家の同級生の一人から「暴れ牛になったのはうちの飼牛で命からがら逃げて助かったんや」という話を小耳に挟んだがゆえだった。

「牛の墓場」の件と話が繋がった。

暴徒一味に襲われて、一旦は、トラックの上に乗せられ連れ去られたのだが、ひよんな拍子に逃げ伸びて、その挙句に、道迷いの暴れ牛になったというのが、事の成り行きであった。

自分の家の飼牛が襲われた時の話だが、空に向けて拳銃を放つのが彼らは好きなようで、ばんばんと面白半分に拳銃を撃ったという。

旧軍隊の拳銃などを、いつも、不逞鮮人・一連の不良者共は腰にぶら下げて歩いていたというので、これでは強盗以外の何者でもない。

鉄棒、棍棒、自転車のチェーン、それに手斧なんぞも彼らは用意していて、牛舎などの遮蔽物なども、ばつさりとやって退けたらしい。

初めから終わりまで怒声が響いた。

すでに、この地域では何件かの「牛泥棒の話」が伝わっており、勢いに恐れをなし家人は手向かわなかったので、家人に怪我はなかったという話だったが、他の農家では、鉄棒で脛を払われて骨折した者もありと私は聞かされている。ここらあたりも、牛の狩場になっていたのだ。

北斗星氏と期を一にしていたかどうかは知れぬが、こちらは、関西の地で同時体験していたという話が成り立つ。

その後、この情報を提供した同級生の少年からは、別件の話も聞かされた。「牛の墓場」に相通じる話であった。

この時期、「闇屋道」なるものが存在した。

昭和十年に開通したとされる、当時としては珍しい舗装ありの再度山下ライブウエーが、六甲山麓を縫うようにして一本、三宮・元町の闇市などに通じていた。

曲がりくねった上下坂道の名だたる難所道であった。通称有馬街道で通っているが、旧名は“とと屋道”とも呼ばれていた。“とと”とは地元の言葉では「魚」のことで、温泉名所有馬温泉の上客用に、籠便（人力）で、魚問屋が直接に海の幸を届けたとされる由縁ある街道でもあった。

解体された「牛塊」が消費地に届けられるには、屠殺場の位置にもよるがほぼ四、五十分程度、「ととや道」は格好の地の利を得ていた。

まさしく、流通経路「闇屋道」なり。

六甲山の麓を走っている道筋だから、山また山に囲まれていて、つまりは「牛の墓場―解体場」の利便さも、この地形は兼ね備えていたということだった。

おぞましい話が加わるが「血を滴らせたトラックがよくこの道を走っていた」ともいう。

話の出所は、やはり、他の同級生少年で、何度か目撃した末の話となる。この時期、戦災で家を焼かれ者たちが、旧“ととや道”沿いの川の淵や、山裾野にバラック小屋を仕掛けて住んでいたりしたが、目撃者の少年もそのうちの一人だった。

その分、往来道ともなるので、目撃の機会が多かったということになる。直接には私は見えてはいないので傍証固めの話でしかないが、信憑性たつぷりの話、“血染めのトラック”とは、これまた穏やかならぬ。

もう一つ、少年にとつて“恐ろしい日常”があった。下校路に待ち構えている朝鮮人学校の悪ガキどもに待ち伏せされ袋叩きの刑に遭うことが間々あった。かくいう私なども、通学路を外れた遠回り道を選んだ。

“下校の法”を日常の習いとしていた。

ひたすらに、逃げるが勝であった。

実際の話、児童が殴られている犯行現場を教師が通り過ぎたこともあったが、みんな知らぬ顔、被害が我が身に及ばないよう、足早にその場を去ったものだ。ともかく、朝鮮人一派が怖かった。

何を仕出かすか、この時期、彼らはとてつもない暴力集団であったのだ。

運動場外での校内マラソン大会なども、離れ離れに走っている参加者児童が、待ち伏せ連中の小石の雨に襲われて、額から血を出すという事件が何件も続出、その末に、以降、マラソン大会は中止の憂き目に遭った。

こんなのは小さな日常の些細な事に過ぎぬが、前述の「関東から牛がいなくなった」の記事を掲げた人物は怒りの文句も追記している。

こちらは、大人の世界の話、被害者少年の稚気な怒りようとは怒りのポルテージのほどが違う。『目の前に金の成る木があるものなら、どんな手段を用いても手に入れる。これが“朝鮮進駐軍の綱領なり”』とある。

(※駐資料②より)(※作者注―朝鮮進駐軍の表記については、『当時の朝鮮人が暴力事件を起こし、それを進駐軍にならって例えたというような事実はあったかもしれないが、それすら出典付きで記述できていない』云々と、Wikipedia:削除依頼通達文の一部には記されている事実あり―為念事項として記す)

一少年の体験話だが、この時期の同時進行中の他の極悪同類事件に比べると、いささかに、緊張感に欠けるようなので、【この時代、この時期に発生していた事件】、神戸地域で実際に発生していた不逞鮮人主体の暴動事件のそのいくつかを挙げておく。少年が住んでいた山間の地から、一步、市街地に出ればの話だが、身近な距離なり。

神戸・生田警察署には、終戦の年の暮れ、十二月二四日午後九時頃、五〇名を超える朝鮮人の暴徒が、拳銃、日本刀、匕首などを突き付けて侵入し暴威を揮った。

その侵入理由は、岡山市内で七人組拳銃強盗があり、その強盗犯を追って岡山県警の捜査官が神戸市内まで取調べのため、やって来たことにある。

その捜査に生田署員が協力していたので、捜査全体を妨害することがその目的であった。

岡山県警の捜査官は脱出させることに成功したが、暴徒によって生田署の警察電話は遮断され、警察は外部との連絡が絶たれ、一時危機状況に陥った。事件を聞き付けた連合軍部隊が到着、武力により鎮圧した。

翌年一月九日には三宮ガード下で賭博団（国籍不明）の手入れを行い、一斉検挙したが、三〇四〇人の不逞鮮人たちが犯人奪還目的で生田署内に侵入したが、これまた連合軍の武力により鎮圧された。（兵庫県警察史）

同月二月には、神戸生田署の巡查部長が戦勝国民を声高に叫ぶ暴徒たちに身柄を拉致され、殴る蹴るの暴行を受けて死亡。

続いて、同年四月には須磨署の巡查部長が彼らの手によつてこともなげに射殺された。（兵庫県警察史資料）。※作者注―戦勝国民とは朝鮮人一派いずこもかしこも、警察襲撃事件をはじめ物騒な事件が続発していた。日本全国に目を転ずると、事件の内容も多岐に亘っている。

ざっと表題を列記するだけでも、次のような項目が並び立つ。当時の国内状況の緊迫度を認識しておく必要から、念のために記す。

昭和二〇年十二月二十九日 直江津駅リンチ

殺人事件（後述）／昭和二十一年一月三日 富阪警察署襲撃事件（後述）

／昭和二十一年一月二四日 七條警察署襲撃、同年六月九日警察官殺人事件

／昭和二十二年五月一三日 長崎警察署襲撃事件（巡查一名殉職）／昭和二

一年八月 中京私設警察事件／昭和二十二年八月五日 富山駅前派出所襲撃事件などなど、これとて、極く一部であり、追記すれば切りがない。

さらに、神戸市の現況に話を戻せば、昭和二五年十一月二十日には「在日勢力の生活保護要求」の原点となったとして知られている『長田区役所襲撃事件』が勃発している。

事件の概要は、「市民税免除」と「生活保護の徹底」を求めて、区役所に不逞鮮人部隊約二百人が押し寄せたというもので、区長が軟禁状態に遭い、

神戸市警が出動して救出、その際、三十人を逮捕した。だが、第二次襲撃が画策されて、四日後には、再度約三百人が、区長との面会を求めて来襲した。この時、朝鮮人たちは区役所内に乱入して、窓ガラスなどを破壊してやりたい放題、警察官にも立ち向かって、暴れまわった。

不退去罪の現行犯逮捕劇の末、二十六人が逮捕された。

さらに、事態はエスカレート、三日後の二十七日には不逞鮮人一味が、西神戸朝鮮人学校に集結、その数約千数百人、老いも若きも集まりの総動員体制で氣勢を上げた。

解散を命じられたが意に解せず、「犬め、殺してやる！」「貴様ら、人民裁判に掛けてやる！」などと、警察官を罵倒し、挙句に市中行進を図ろうとしたので警察側は制止したが、騒ぎは収まらなかった。

集結地を出たデモ隊一行は罵詈雑言を周りに者に浴びせながら、市中行進に及んだので、遂に、神戸市電湊川大橋停留所付近で違反者を検束する羽目となったが、その残党一味は、怒りの矛先を、再々度、長田区役所に向け、また、近くの長田税務所にも一味は向かった。区役所も税務署も共に暴漢に襲われて、損壊の憂き目に遭うことになった。

(兵庫警察史参照)

これらの事件史をここに掲げたのは、これからの章で述べる「闇市」の項と、彼らの勢力が不即不離の力の関係にあるからである。

敗戦始末記には、「闇市譚」は欠かせない暗黒史の物語の一つであり、これらの「闇市史」には、深く、第三人たちが絡んでいたのは周知の事実なのであった。

敗戦国の国民ゆえの負い目、弱者の身ゆえに、ここではへえせ戦勝国人の正体・その本性が、如実に示されて来るのであった。

## 闇市事情始末日記

さて、「闇市の実況レポート」に入ろう。

これからの「実記採録」は、なるべく、日本全国に話は広げたいので、各資料集めにも労力を割いたが、資料として採録出来る「書籍物」はそれほどには多くなかった。何しろ、戦後の混乱期、かつ、年月も経っていることで、当然のことながら、証言者からの直接取材などは適うはずもなく、一証言者としての私の老年齢なども、この度は、改めて考えさせられた。

必然的に、大都市中心に記載された「闇市都市伝説」に注力して話は進めてゆくことになるのでご承知置き願いたい。

『③※註東京闇市興亡史 猪野健治編 東京焼跡ヤミ市を記録する会』④  
※註大阪〇焼跡闇市 大阪・焼跡闇市を記録する会』の両書がいま手元にある。共に、優れた「闇市成り立ち論」、或いは「闇市を支配した者たちは？」の力関係なるものの炙り出し、また、「闇市体験者の証言」などなど、その大元から細部の状況把握まで、きっちりと捉えられているので、両書の力も大いに借りて、これからの闇市譚は進めていくことになる。

『昭和二〇年八月一五五正午、ラジオから流れる玉音放送は、永い戦時をくぐり抜けて来た人々の耳にはどう響いたのであろうか。スピーカーから雑音の混じって聞こえる天皇の声を初めて耳にして、顔をこわばらせていたさまざまな人びと。ある人は、戦争は終わったのだろうか、と半信半疑のうちに思いながらも、そんなことあるものかと心のうちで打消し、ある人は、いよいよ“鬼畜米英”がやって来る、本土決戦に、さあ鉢巻を締めなおすのだと、声を噛み殺して心のうちで叫んでいた。昭和二〇年の晴れ渡ったこの夏の日、焼けつくような暑熱のなか、奇妙な静寂が日本列島を包みこんだ。軍靴の響きが人びとのまわりから常に離れることがなかった、この日まで永い年月の終焉のとき。静まりかえった焼跡にかすれた号泣と噛み殺した嗚咽が流れていた。戦時下の生活の疲れ切った人びとの耳には、戦争は終わったのだ“完全に敗れたのだ”という声が響き合う。焼跡

に佇む人びとの胸に去来したものは何であったか。

昭和二〇年三月一三日から敗戦までの二十数回の空襲によって、被災地域は大阪市全市の約三割、数字で示せば、一、六四四万坪、焼失戸数は三一万戸という数字にのぼる。雨のように降ってきた焼夷弾によって、燃え上がる街の中を逃げまどった人々は（八月一五日）この日、ほっと安堵の思いを抱いた。しかし、人びとが受けた傷は深い。安堵の思いを抱いた一方で、言い知れぬ憎しみとくやしき。いや応なく引き裂かれていった親子、夫と妻、そして永遠に帰らぬ人になってしまった者たちを想い、呆然と、索漠とした廃墟の中に立たねばならなかった。

生きていく術は？と考える暇もなく食わねばならない日々は続く。そこに焼跡に始まる物語はあるのだ  
（※註―資料④冒頭の文）』

右の「大阪〇焼跡闇市を記録する会」を著わしたメンバーは、みんなが戦後生まれの世代、いわゆる“戦後っ子”のようで、初版は昭和五十年とあるから、やっと、戦後の復興目覚しく、豊かさが身をもって感じられ始めた敗戦三十年後の時代頃の刊行物と言える。

副題も―かつて若かった父や母たちの青春―とあり、私などの世代は食うのがやつとで、とてもものこと、この種の本の刊行など思いもよらなかった。この発想だけでもありがたい。

今、やつと、「後々語りが出来る程度の我が始末記」、記憶のほども、その分、稚なく頼りなくもなっているが、遅れ馳せながら、「わが空白部分」を、これから出来る限り、私も「正実」に埋めてゆくことにする。

神戸の焼跡事情だが、大阪市の空襲について記したので、翻って、「神戸空襲」についても、資料の一部として触れておく。

昭和二十年一月三日から終戦までの約八ヶ月間に二二八回の空襲があり、被害面積は神戸周辺都市部の二十一パーセントに及び、焼失家屋十五万戸、延べ六十五万人もの人々が家屋への被害を蒙った。これは人口および面積から換算した被害率としては、当時五大都市の中では最悪の数字であった。

海と、その背面に沿って走っている街並みと、背後に迫る六甲の山並み、焼夷弾の雨も海側から落として、山側にと逃げた避難民を狙い撃ちにした。敵機はこの地の利を利した。

海からの地は「闇市形成上」としては物資の集積地の役目を果たし、細長く交通便利な街の造りは、人々の往来を容易にした。

皮肉なことに「日本一の闇市」が誕生するだけの地理的条件なども、神戸の街は兼ね備えていたことになるのだった。

いずれにしても、神戸市内の各地が一面の焼野原の物騒な地となっており、それに、朝鮮半島からの船の直行便もありで、外の地から更なる物騒な連中も、敗戦を契機に一稼ぎせんものどわんさと押し掛けて来て、まことに物騒極まる地にと神戸の街は化していた。

私の居住していた地だが、山側の地の利もあって罹災せず、その分、戦中、戦後から、住む家を空襲で焼かれた避難者の移住が続き、この田舎街は妙な賑わいを見せるようにもなっていた

焼け跡の無惨さに比べれば、人間が住んでいるということ、少しは活気などもあったということである。もちろん、人間の数が増えてゆく分だけ、食べ物が増え、食糧不足が解消されてくるのは当たり前で、戦争が終わった途端に、新たな「食べ物戦争」が、この地でも始まっていた。

また、三田、有馬、三木方面、あるいは、丹波、丹後、但馬の奥深い山地にも通じるローカル線だったので、食べ物を求めての買出し、遠出の買出し部隊が、わたしの住む街の駅などでも、賑わいを見せていた。

「闇市」とは、大東亜戦争の戦後、米軍占領下の日本の混乱を見越して、いわゆる不良外人、引揚者、罹災者、愚連隊らが、焼け跡などを不法占拠して自在に開いた市場のこと。露地、路地に店を構えたり、バラックなどの建物などに居つき、闇の商売をおこなった。

かくして、戦後、全国の焼け跡などに、自然発生的に、自由市場のかたちを取りながら、闇市は蔓延して行った。

物資不足に加え、物流供給体制そのものが崩壊していた。

主食の米をはじめ、衣料、生活用具などの生活必需品は、戦争が終結する前からの物資不足に加えて、戦後の各企業の操業停止なども重なり、払底を極めていたのだ。さらに、この終戦の年は明治十三年以来の大凶作ときていたから、米櫃（こめびつ）の底も尽きたという事情も重なった。

戦争中の昭和十八年以降は、それでも配給制があり、馬鈴薯、甘藷、雑穀、大豆粕、など、また、主食の米も絶対量は不足していたが配給されていた。量としては、大人一人、米は終戦以降は、二合一勺（一合で御飯茶碗約二杯分）であった。もともと、その主食配給制度も守りきれず、遅配続きの事態をも招いていたので、配給だけでは食えなかった。

このままでは、一千万人の餓死者が出ると、政府も発表するに至り、非常宣言が為された。

“自給自足”の体制？それかあらぬか、街角、路地、空き地、焼け跡と、ところ構わずの家庭菜園も、瞬く間に、庶民の知恵であちらこちらに見られるようになっていた。

わたしの母も物々交換の品を持っては、農家を訪ね歩いた一人だが、こちらでもいやと言うほどに、苦労させられている

農家の者は大方が横柄に振舞った。“こちらは内なる敵”で、やっと、品を持って行っても、「そんなもんなんぼでもあるさかい。いらん」と、つれない対応、甘藷数本を投げ与えられるとか、煮ても固い、ごり芋を渡されるといった酷い扱いも度々に受けていた。

こちらは、日本人同士のせめぎ合い、笑えぬ体（てい）の笑い話もあり。贅沢品が農家に溢れていて、「田舎もんが普段の日から晴れ着を着ているでえ」なんぞと言う類いの悪口話も一や二つはあった。それでも、同級生の農家に行き当たったときには、甘藷の数、少しばかり増やしてくれたとか。今にして思うこともあるが、これとても美談なるか。

次は、余談となるが余談に非ず。

田舎に持ち込まれたそれらの多くの生活物資、放出した者に思い出のあ  
る品々、手に入れた者たちはみんながみんな眺めていたのではない。

恰好の流通ルート、買取り屋の「闇屋」が現ナマ商法で買い取りにやつ  
て来た。さらに、金が金を生む仕組み、これらの品も「闇市」に持ち込ま  
れたのだった。

#### 正体見たり、闇市暴徒軍団

およそ、三万人もの武装集団・暴徒となつて、朝鮮人暴徒の群れは、ま  
たたく間に、日本全国を蹂躪し尽くした。

まったくの軍隊気取り、それも治外法権の特権でもあるような戦勝国ぶ  
りを示し、野狼軍団は各地で吼えた。

三国人総本部（全日本朝鮮人聯盟）は、のちに、時日を経て、これが在  
日本大韓民国民団（略称「民団」）と、在日本朝鮮人総聯合会に分かれ、各々  
それぞれが民族闘争などがあつた末、現在の通称、「民団」と「朝鮮総連」  
となる。〔※各派入り乱れ他の名称もあり〕

当時の日本では、戦地に男たちが狩り出された経緯もあり、極端に、男  
手が不足していた。言うなれば、老人、女・子供の弱者集団そのものの状  
態にあつたのだ。『朝鮮暴徒軍』の連中は「鬼のいぬ間に……強盗・強姦、  
恐喝……なんでもありの暴虐行為を働いた。

もう一つ、特筆しておかねばならぬのは、終戦直後から、日本本土に居  
た者の他に、大挙して不逞の輩が港のある釜山、仁川などから、日本本土  
に上陸して来たことで、その数、七十万人も言われ、一説には、百万人  
説もあり。仕事を求めてどつとやって来たのだともされているが、いずれ  
にしる、これらの者は密入国者なので、確たる数字を確定するのは困難で  
あり、仕事を求めての動機も怪しい。

「日本に行けばひと稼ぎ出来るぞ。もう、日本はわれわれのものだからな。

それに、女だっっていくらだっけて手に入らぬ。われわれは戦勝国だ。あいつらは捕虜、やりたい放題よ」

みんな大いに意気が上がり、大海の波に沈みそうなボロの漁船なども調達して、連日のようにやって来ては、日本上陸を果たした。

さて、「不逞鮮人軍」だが、やがて、その一部の者たちは暴力集団、いわゆる「ヤクザ集団」と変貌して行く。そして、いまもなお、日本の闇社会を支配する有力勢力の一つとして存在感を示しているのは周知の通りなり。

治安が整っていないことを利しての悪行―金品強奪、強姦、銀行襲撃、殺人、放火、無銭飲食、詐欺・詐取行為、そして官庁に無理難題を押し付け、また、警察襲撃などなど、彼らは、あらん限りの無法の限りを尽くす。

武装解除された日本軍の武器保管庫にも押し入り、武器と軍服を略奪して、武装した。繰り返し記述になるが、腰には、拳銃を吊るし、白い包帯を巻きつけた鉄パイプの凶器を振り回しての乱暴狼藉ぶり。

特に、特攻隊の者たちの服装がかっこよかったので、つなぎの軍服に、首に巻いた白いマフラー、この服装が彼らの軍服になっていた。もちろん、みんな元軍施設のあった武器保管庫などから奪って来た代物であった。

特異な航空隊の軍服姿が朝鮮人青年たちの心をも虜にした。

真新しいカーキ色の航空服を身にまとい、真っ白の絹のパラシュート用マフラーを肩に掛けて風に吹かれると、最高の気分になれた。

それに、新品の航空靴を履くと、こちらは歩くと、ぎしぎし鳴って、大地のすべてを踏みしめている気になれた。このファッションに身を固めると、たちまちに、天にも昇った心地になること請け合い。

この制服姿に魅入られて建青に入った者たちも多くいた。(※作者注―通称“健青”と称されていたの説も存在する)

往時、新生祖国の社会主義国家樹立という夢や理念で、いわゆる“朝連”に加入した者も多かったとされるが、建青（正式には「在日本朝鮮同盟」「健青連盟の称）の物欲に訴える本能を刺激するやり方が功を奏し、この

組織に馳せ参じた若者もいたのではないかと思う。

これらの民族連合は、その後の経緯だけを説明しておく、様々な個人的離反や「団体」の分裂・派閥抗争などによる変貌も見せるが、主勢は「朝鮮総連」とされ、その後、長い年月を経て、様々な諸団体へと変貌して行く。

念のため、「民団」についても記述しておく。

正式には「日本に居住する在日韓国系日本人のための人格なき団体、在日本大韓国民国居留団」系の者となり、当然のことながら、戦後史の「闇の歴史」には度々顔を出す。各自の思想的なこともあり、右か左か、まだ、民族自体の生き方が、「過渡期」「混沌の状態」にもあった時代での話でもあり、とやかくの話は、ここでは持ち出すつもりはない。

この建青だが、進駐軍から食糧を含む特配物資を優先的に払い下げられていた。

占領軍イーストキャンプは新開地周辺から三宮近辺にまで広がった九五〇〇〇坪の地にあり、進駐当時は五五〇〇〇人が常在していたので、特配物質（主に残飯）と言っても馬鹿にはならない数量だった。

この特配物資類は闇市では、仕入れ価格の数倍という高値で売れたので、一攫千金に憧れた第三国青年たちを大いに魅了もした。

建青の強みは思想面だけではなく、「現世利益」と言うべき食欲と金銭欲の追求が可能になったことにもあったようで、闇市を中心とする商業活動が呼び込み文句であったということなのでもあろう。「金と女」がつきまとうところには、悪い奴が蔓延るのは世の常で、その結果、「敗戦国民日本」では、つまるところ、悪い奴らだけが幅を利かすことになった。

もちろん、先述したように、おなじような「ならず者」「不心得者」「成金者」は日本人の中にも多くいたが、しかし、いずれにしろ、物流市場を支配し、シヨバも自分らのものにして巨利を貪っていた『第三国人』と手を結ばない限り、不心得日本人とて、うまい汁には有り付けなかったのは

これ事実なり。

もちろん、金のあるところには、利権抗争もありで、血なまぐさい抗争ごとが、やがて、この後には物語には登場することになる。

#### 闇の賑わい、露店市風情記

「湊川新開地の話」を元に戻そう。

実際に、わたしとは縁のある湊川新開地、この繁華街の戦前の様子なども再現しておきたいと思うので、しばしのお付き合いを願う。

「湊川新開地」は、日本有数の歓楽街であった。戦前は「西の浅草」として名を為し、大いに栄えていた。わたしの知る限りでのことを言えば、俗っぽさでは有数？そんな印象もある歓楽街の並び、何回か、少年であったわたしも、この地には足を運んでもいる。

近くには、東洋一の高さと謳われた九十メートルの神戸タワー（通称湊川タワー）、水産館、海洋館、水族館広場が常設されており、公園の広場では、時々、見世物小屋が掛かり、危ない演し物も大衆には供された。

何でもありの湊川新開地に足を踏み入れれば、映画館附設の湊川温泉、また、映画館では、松竹映画・松竹演劇場、寄席小屋など多数があり、「ええとこええとこ聚楽館（しゅうらくかん）」と呼びなされた、今でいうゲーセンを思わせる施設もありの娯楽場、聚楽館などもあり、大正時代から昭和十年代にかけては、新開地は大衆娯楽のメッカなども持て囃された。

湊川新開地は、湊川公園から南に下り、約三キロほどもある繁華街で、海っぺりには、川崎重工があり、工員たちで賑わった街でもあった。軍需工場であったから、その分、この湊川新開地あたりも、空襲対象にもなった。ちよい前までは、米軍のグラマン戦闘機が低空に飛び、機銃掃射を繰り返しているのが、少年の住む山の地の高台からでも望見出来た。

すでにして、大方は焼け野原、コンクリート建築物の一部を残した聚楽

館を除けば無事な建物はほとんど残っていなかった。

神戸の闇市は、この湊川新開地のみならず、阪急電車三宮駅周辺、元町高架下、それらの駅の並びと、そのあたり一帯、阪神電車駅のあたりと、人の賑わう地だけ上げても、「戦後名代の闇市」がひしめいていた。

名付けて、「じゃんじゃん市場」、何でもあつて、じゃんじゃん売れるから付けられたと言うのが通説。

三宮高架下から神戸駅までの約二キロ、これは大阪の井池（どぶいけ）、梅田、鶴橋などにも負けない日本一の大きさ、長さだった。

その後、ここを先駆けに闇市は各所にはびこり、あいついで、神戸市内だけでも十四、五箇所闇市が誕生した。

じゃんじゃん市場は、地方からも、「何でもある街」というので、人が押しかけて来るほどの人気ぶりだった。

この闇市、もちろん、日本全国に蔓延したのは当然のことで、東京、大阪をはじめ、その数ざっと三千とも四千とも言われる数のあやしげな店々が軒を並べ、また、露天で商売を張った。

闇市の本場の本場、三宮、元町周辺には、この地を通過する用件で、私は二、三度足を踏み入れてはいるが、何しろ少年時のこと、本当の意味での闇市体験ではないのだが、元町の阪神電車の高架下トンネルの脇を母親に手を引かれて何度か歩いた。雨露が凌げるので不法占拠した連中が、常時、ここには巢食っていた。高架下もその周辺の空き地も、露天を張る絶好の場なので雑多な店が犇めいていた。ともかく人の数が多い。

少し、わが体験記、闇市レポートをしよう。

「モノウリの声もさることながら、人と人、肩がぶつかり合うので、怒声が絶えない。狭い！痛い！怖い！みんな雲突く男ばかりの群れに思えた。べったりと地べた座り込んでの店開き、粗末なバラック小屋、何軒か軒を連ねたふうの仮小屋、それらの店々は何重にも幾筋にも入り組んでいて、

ともかく、足の踏み場もない。人いきれに、食い物の匂い。どれもみんな食ったことはないのだが、大人気なのは“残飯シチュー”で、これは、進駐軍の残飯を拾って来て、何でもかんでもぶっ込んで煮たもの。豚肉、コンビーフ、肉付きの鳥から、ジャガイモ、ニンジン、セロリの根、チーズ、缶詰のトウモロコシ、グリーンピースなどで、肉や野菜のかけらなんぞに混じって煙草の空き箱、吸殻、コンドームと言った異物まで混入していたそうだ」

こちらは“健青”直調達の直販売なので、日々これ、丸儲けのボロ儲け、たちまち、彼らには資金力もついた。

当時の成人の必須カロリーは二四〇〇〇のカロリーにもかかわらず、配給の食糧ではその半分もまかなえず、この「闇煮シチュー」は蛋白源の源、貴重な栄養価ありで人気があった。

もつ煮なんていう三国人ならではの“ぐつぐつ煮”の食べものもあったらしい。持ち金のない連中はただらうろしているだけ。戦闘帽をかぶり、リュックを負った復員帰りの男、どこか敗残兵に似ていた。どんぶり一杯の雑炊、ふかし芋、芋ぜんざい、本物のぜんざいもあり、焼き鳥、にぎり飯、よもぎマンジュウ、落花生、この闇市には、問題の“血の肉、牛肉ステーキ屋”なんかもあったようだがそんな店には寄れるはずもなし。

もちろん、人気のごっちゃ煮、一杯十円で安価でもあったそうだが、わたしはそれさえ口にしたことはない。これは伝聞の一つなり。

闇市事情については高見順の「敗戦日記」の一節（要約）を、ここに寄せる。昭和二十年十一月九日の日付けあり。

『新橋で降りて、かねて噂の高い露店の「闇市場」をのぞいて見た。もとは明治製菓と工業会館裏の、強制疎開の広場にあつたのだが、（あつた？自然にできてきたのである）二、三日前から、反対側のもとの「処女林」、その横のすし屋横丁の跡に移った。駅のホームから見下ろすと、人がうようによひしめいていて、一種の奇観を呈している。敗戦日本の新風景、―昔は

なかった風景である。駅を出ると、その街路に面したところに、靴直しがずらりと並んでいる。それが一線を劃して、その背後の広場が、「闇市場」になっている。すでに顔役ができて、(顔役は復員兵士とのこと)場代を取り、値段が法外に高いと、店開きを禁じたりするか。自分を数多従えているとのことだから、自分を使って場所の整理をしたらよさそうだと思うが、雑然と混然と、闇屋がたむろしている。「三つで五円」闇屋の声に、のぞいて見ると、うどん粉?をオムレツ型に焼いたものを売っている。ふくらんだ中身には何が入っているのか。隣りでは、ふかしイモ、これも一袋五円、紙袋をちゃんと用意しているが、風呂敷いっぱいぐらしかイモは持つて来ていない。女の子二人が恥ずかしそうに、何か売っている。いずれも食い物だ。「三把十円」と言っているのをのぞくと、小魚を藁にはさんで乾したものだ。十円はいかにも高いので、売れない。

風呂敷一つ下げて、商売に来ているのである。「店開き」とさつき書いたが、店の感じではない。浅草の食い物屋は、ちゃんと屋台を出しているが、ここはただ風呂敷、カバンなど広げて売っているだけである。そのうち「店」になるだろうが。(後略)た

大阪闇市事情についての証言もあり。こちらは闇市商人でも、搾り取られる側、第二国人相手の商取引のつれづれが綴られている。

『にわか栄光のとき』

三島群島本町 早崎正一 (五〇歳)

(中略) 昭和二三年の初頭、神戸・三宮の国際マーケット(闇市)をうろついていた私は、ひとりの日本人に目を停めた。男は三国人の店へ何かを運んでいるところだった。店の奥に入って眺めていると、禁制のメリヤス製品を卸している。運び屋である。(中略)

私は敗戦時。陸軍のポツダム少尉であった。復学の道もひらけていたが、なにを今さらという馬鹿らしさが先だって、芋づるや米を売ったりの生活を選んだ。が、もう一つ派手さが無い。活力のハケ場が欲しかった。

国際マーケットでの商売はまことに魅力的にみえた。だから、私は振り切つて去ろうとする日本人をどこまでも追い、ついに帰りの電車のまでピツタリついて乗り込むことで、根負けさせた。その人は、大阪・福島 of 聖天通でメリヤス家内工場を営んでいた。一日にたった一ダースだけだが、メリヤス肌着をまわしてもらう話がついた。

これが最初。そのツテで界限に三軒の仕入れ先を得た。私は納入先をもつぱら、元町、三宮の三国人経営の店に決めた。

ここは一種の安全保護区だったからだ。(※作者注―国際マーケットは神戸市が主導で一か所に闇市を集結、管理の徹底を図った半ば公認の市場) あるとき、三国人の店先で私は経済視察官に呼び止められた。

連行されかかったとき、店の三国人が出てきて一喝した。「うちの店のお得意さんなんや。そんな人をひっぱってもらっちゃ困る―その一言で調書も取られずにすんだ。三国人は「万一警察にひっぱられても、すぐに連絡してくれ」と力のほどを示していた。そういう街である』

この証言者の伝によると、面白いように売れて金が転がり込んだが、闇商売というは、神経をすりへらすものであったという。

『まずタチの悪い業者がいた。納品すると、明日払うという。たしかに払つてくれるが、そのときには次の注文がでてくる。それで最後には一回分はみでてくるのだが、そのときにいたって「お前うちでもうけたのやろ、細かいこというな」と、なかば脅迫的にケリをつけようとする。

そういうくやしきもあり、こすからしい手合いとの、疑心暗鬼のかけひきが神経を消耗させた。

さらには税金。三国人の影響力で、警察の取調べ、物資の没収は免れるが、いったんつかまるととりたてはきびかった。

署員の前で品物を広げ、それを正味ヤミ値の金額で算出して、そこから税金を徴収される。一時期、二四万円もかかってくる。税金の下調べと称して、闇市を回り一〇円、二〇円の余得を公然と得ていく税官

吏もみていただけに、なんとも腹ただしかった。(※資料④より)』

注釈をつけると、警官、税官吏などの“取締り”なども、ほとんどは可弱い立場の日本人が対象であって、いちばん、悪どく稼ぎ回った第三人、または暴力的集団などには、この例にもあるようにお目こぼし措置で、弱いものが弱い立場の者をいじめる構図が“無法地帯”の名の下、罷り通っていたのだった。

更に、註④資料より。当時の窮状、弱い者の立場を示す一寄稿証言文。

『終戦三十年後の回顧録。』

戦後の空襲警報 一部所載

尼崎市野村ミエ (八〇歳)

働かなくては、稼がなくてはと、私はお菓子屋を始めました。ボタモチや飴などを売るので。仕入れるのは闇市からでした。朝の四時ぐらいから起きて出かけたものです。闇市へ急ぐ途上で“朝ドロボウ”にやられたこともあります。早朝で人影は少なく、一人歩きの私などは絶好のカモだったのでしょう。三宮の闇市にいったときは、ピストル強盗に出会い、持っていたお金を全部とられてしまいました。生きた心地がなかったものです。週二、三回、闇市に仕入れに行きましたが、品物を「買う」というより「交換する」ということが多かったですね。

何を持って行ったかという、亡くなった主人の形見です。舶来のコートや背広がかなりあったので、それを元手にして飴やモチを仕入れました。だから、今では主人の形見らしい形見は残っていません。残念ですが、そうしなければ娘と私は食べていけなかったのです。物々交換だけでなく、売りにも行きました。羽根蒲団や振り袖を売りに出しました。

お金を手にしても、帰り道、スリに会って小銭しか残っていないこともあり、ありません。

警察が闇市の手入れにくることを“空襲警報”と呼んでいました。「空襲警報や！空襲警報や！」という声が起こると、みんなその場を放り出して

逃げたものです。

品物を受け取って金を払わず逃げ出す人、逆に金を払っても品物をもらわず逃げ出す人。みんな先を争って逃げました。

生活の糧は配給制によってまかなわれる建前でしたが、一家庭にたくあん一切れとか、麩をバケツ一杯といった配給では体がもちません。魚の配給があっても、丸ごと一匹ではありません。いつも頭と尾の部分だけです。醤油は二、三日すると俗にいう「しらとり」という白かびがはえましたし、石けんは赤土のようで泡立ちが悪く、白い布を洗ったら黄ばんでしまうくらいです。品質にかまっているよりも、とにかく品物を手に入れることが大事だったのです』

弱肉強食―それが闇市取締り現場の実態だった。

大多数の敗戦日本国民は、泣く泣く、お上得意の員数合わせ、取締り実数稼ぎに付き合わせられて、その実、悲鳴を上げていたのだった。

#### 神戸戦争の実像と虚像

血なまぐさい話ありの件にと移るが、その実像については、ほとんど知られていない。

闇の世界の話は「闇世界を仕切った当人」にしか、語れぬことなので、山口組元組長田岡一雄（一九一三〜一九八二）の自伝『田岡一雄自伝 電撃編 徳間文庫刊』よりの一文を借りて、ここよりは「事の次第」を語る。

当時は、博徒という言い方をしていたが、ばくち打ち、それに、テキヤと言う露店商などの“ショバ”を張る組織も含まれており、必ずしも事の組み分けが出来ていたわけではない。この組の正体で、ヤクザ映画などによると、“任侠道・仁義”とかの美辞麗句が並び、特別扱いもされているようだ、今の世では「組織暴力団」と区別され表されているので、持ち上げでの採り上げ方をしているのではないことはお断りしておく。

『^その日のうちに神戸は修羅場と変貌したV敗戦の報せに茫然自失する国民とは対照的に、(中略) 第三国人たちは欣喜雀躍とし、報復の火蓋を切ったのである。その日の午後七時。徒党を組んだ三国人は国鉄深川駅構内の貨車を襲って配給物資を強奪。これを皮切りに市内随所で襲撃略奪事件を起こし、婦女子を暴行し、わがもの顔に跳梁し始めた。終戦当時、国内に二百万人以上の三国人がいたが、とくに兵庫に多く、昭和一八年に一万五千人、四十八都道府県の七パーセントを占め、大阪、東京につぐ三位という数であったV』

『彼らは闇市を掌握して巨大な利益をあげ、徒党を組んでは瓦礫と焦土と化した神戸の街をのし歩いた。通りすがりの通行人に目つきが気に食わないといって難くせをつけては半殺しにし、無銭飲食をし、白昼の路上で見境もなく婦女子を暴行する。善良な市民は恐怖のドン底に叩き込まれた。彼ら不良外国人は旧日本軍の飛行服を好んで身につけていた。袖に腕章をつけ、半長靴をはき、純白の絹のマフラーを首にまきつけ、肩で風を切つて町をのし歩いた。腰には拳銃をさげて白い包帯をまきつけた鉄パイプの凶器を引っさげ、略奪、暴行を欲しいままにした。警官が駆けつけても手も足も出ない。「俺たちは戦勝国民、敗戦国の日本人が何をいうか」警官は小突き回され、腰に下げたサーベルはへし曲げられ、街は暴漢の跳梁に無警察状態だ。(中略) 終戦直後の神戸は、まさに酸鼻をきわめる地獄絵図だった』

『昭和二十年八月末に、わたしは所用の帰途、女の悲鳴をきいた。人通りのすくない東山病院の裏手である。真夏の太陽がキナクさい焼け跡に照りつけていた。一瞬、ギクリとして立ちどまり、悲鳴のあがる方角に走った。

途中で四、五歳の女の子が泣きながら夢中で駆け寄ってきた。

「どないしたんや」

「おかあちゃんが、おかあちゃんが」

少女はわたしにしがみつく。この世のものとは思えぬ悲鳴がきこえつづけていた。

「ここにいるんやで。ええな」

私は少女をその場において一目散に走った。

少女の母親は木立の中で、数人の男たちによって犯されていた。飛行服の男たちだった。彼らは不敵な薄ら笑いで女の手足をおさえつけ、一人がその上に乗っている。女はひたすら絶叫していた。↑汚ねえ…↓(※作者注↑そのやり方が汚いの意) うめくと、わたしは遮二無二に彼らに突進していった。

獲物を捜す余裕はない。あるのは彼らへの憎悪だけだ。彼らがはつと身構えたときはわたしは一人の男を蹴りあげ、女の上に乗っていた男の襟がみをつかんで引きずりおろし、男の目の中に五本の指を突きさしていた。

(中略)「ぎゃーっ」男らは悲鳴をあげて、男の顔面はみるみる血だるまになっていった。残る男らは恐怖に顔面を醜く歪ませ、拳銃も鉄パイプもその場に置きざりにしたまま夢中で逃げだしていた。女はぼろぎれのように仰向けになったまま放心していた。

「しつかりするんや。わかるか」

抱き起こしてみても、うつろに瞳孔をひらいたまま、突然、けたたましい笑いをあげる。山の手の良家の人妻であろう、美貌であった。引きちぎれたモンペと、哄笑が無惨であった。

(↑許せん、これはぜったいに許せんのだ)

彼女の哄笑と、遠くからじつとこちらを凝視している少女の姿を見たとき、わたしの血ははげしく燃えたぎっていた。

このままでいいのか。いいはずはない。彼らの報復をおそれてだれもやらんというならば、わたし一人でも連中のまえに立ちふさがってみせよう。わたしには許せないのだ。やつらの悪逆非道さが』

武勇譚になり過ぎてしまいそうだからそこそこしておくが、「日本人

としての義憤の行為」としてみるならば、当時の第三人たちの蛮行の有様を知る上では、今やもはや、貴重な具体資料の価値までありそうだ。

敗戦直後からの、これらの婦女暴行話は、わたしの周囲にも、噂の一つや二つはあり。実際に、わたしの知人の兄からは、次のような「事実証言話」を私は伝授されている。

田岡一雄自伝と同じ内容の、あるいは、もっと過酷な事件史の一つであるのは間違いないと思うので、事実話としてここに採録した。

わたしのその知人の兄は当時二十歳で、国鉄（JR）神戸駅の保線区に勤めており、この真に迫る話の現場を目撃し得る立場にあった。

場所は神戸駅構内、彼は保線区の地下詰所の一室の窓から、地下空間にある、昼間でも薄暗い機材置き場を眺めていた。

以下、赤裸々な告白の件り。

これらの事件は日常茶飯事、この日に限った話というのではなかった。

「…それが、ぎゃーぎゃー、わーわー、えらい騒ぎやから、みんな、そっちに目が向いてしまうので。朝の早（は）よから、夜中までや。まっ昼間でもお構いなしや。若い女とみたら、片っ端から連れ込んでや。何人もの朝鮮人が取り囲んで、着ているもの剥ぎ取ってみんなで強姦や。そらあ、抵抗はしよるけどな。そんなん、関係あらへん。わしら詰所の窓から見てるんやけど、なんや。見ているもんも窓から顔出して見物しててどっちもどっちやけど、どもならん、やられる女の子は、泣くのも忘れて、もう、可哀相やし、見とられへんから、何度も、わしら警察に通報はしとったけど、誰もこん。そのうち、誰も通報せんようになってもうた。無法地帯や。ここだけではないで。街のあちこちでや。焼け野原の片隅や、おんぼろの掘っ立て小屋、トンネルの下、なんぼでも、そないな場所あるさかいにな。あいつら、やりたい放題や。それにな。中には戦争未亡人なんかもいて、生活できへんから、立ちんぼして、ちよいの間稼ぎしとる女もいたさかいに、そんなんはやられた挙句に、殺されてもうたんもおると

ちやうか。そないな話も、わし、聞いたことがあるで。そないな世の中や…」

犯行時期は、敗戦直後の話ではなく、敗戦から二年間ほどが、経過した時期での事件のことと思われる。

当時の神戸駅と言えば東海道線の主要駅、メインターミナル駅の趣きを備えていた。戦後の疲弊した時期とは言え、乗降客でも随一の地、この主要駅でさえこの有様だから、他の同様施設は、もって知るべしの状況に置かれていたのではないか。被害者たちは口を閉ざしたままに何も語らずに人生を了え、そしてまた、報道機関も“触らぬ神に祟りなし”の無関心さをこの時代は装っていたふしもあり。

婦女暴行話については、多くの話は聞かされているので、その例を挙げることは出来るが、何しろ、少年の時に聞き知った話、仄聞ということになるのでここには記さない。時、所、状況について詳述は出来ぬので、事実語りを旨とする本稿では、採り上げていない。『心の傷』ゆえに、被害者が世間を慮って自死して果てたという悲劇もここにはあつた。

無法地帯が罷り通った時代の、闇に閉ざされたままの、死人に口なしのこれらは物語なりし。無念なりしか。

#### 闇市戦争の始末記

この後、湊川新開地ではシヨバをめぐる抗争事が続く。全国の闇市での争いごとの縮図の一つ、同様事件は闇市あるところでは、どこにでも勃発していた。田岡一雄も命を狙われるようにもなり、巷間伝わる場所の“新開地決戦”の舞台が切つて落とされることとなった。

イカサマ賭博でも、三人人たちは荒稼ぎをしていた。

強引に誘い込み、脅迫をして金品を巻き上げる手口、取締まりの警官が来ても開帳し続け、警官が咎めようものなら、たちまちのうちに、殴る蹴

るの暴行を加えるので、警察も手出しが出来なくなった。

前述したが、昭和二十一年二月、神戸生田署の巡查部長が、三国人らに拉致されて暴行を受け、また、同年四月には須磨署巡查部長が、彼らの手により射殺された。その上、本署襲撃をもくろむ三国人一派の動きもあり、県警の長自らが、“ヤクザ勢力”に働き掛けて、三国人勢力殲滅の策を練った。田岡一派も力を貸すことになった。以下は、Y組傘下の組長が残した「かくれた真実」の文、ここに上げておく。

『Y組組員勇躍団結し兵庫署の警備と署員の人命を保護するため、兵庫警察署（※作者注―実際は新開地・湊川温泉施設内に警察署はあった）に昼夜をわかつたてこもるとともに、同署の受け持ち区域の神戸新開地にY組自警団を結成、「花月劇場」をその事務所とした。兵庫署内部の警備について、彼ら戦勝国民に襲撃された場合、全署員は重要書類を持ってただちに裏口より避難し、あとはY組組員がこの迎撃にあたり同署の屋上から数本のドラム缶に重油を詰め、これを落下させるとともにさらに手榴弾二箱、約四十個を投下し、彼らを大量に殺傷させ、相手がひるむすきにY組抜刀隊による決死隊が日本刀や拳銃を持ってなぐり込むという、戦闘計画が警察幹部との間でなされたのである（山口組三代目 田岡一雄自伝よりの記）』

結局、全員部署につき待機したが、この動きを察したのか、新開地に関する限りは三国人グループの襲撃はなかったが、三宮、元町、姫路、丹波篠山の地でも抗争ごとに顔を出し、彼ら暴力団組員らは相応に顔売った。もう一つこの間の裏事情に通じる生き証言話を加えておく。

証言者は露友組合組織を束ねる関係者の一人。神農会幹部。

（※作者注―資料④より）

『闇市の根本

伊丹市 重野 治（仮名六七歳）

『日本には徳川三〇〇年以上の昔から〇〇会という、いまでいうテキ屋が

あつて、昼店、夜店など屋外出店商売人の権利をもつておつた。世間は闇商人をこれと同じように思つたわけで、また〇〇会の方でも外でやる商売は自分らに所属するもんやと出てきた。そこで闇市場を統合するには、〇〇会とは別の露天商の組合を作って、生活の糧を得るために闇市で商売する人間が〇〇会と闇市場から場銭を二重取りされんようにせないかん。そこで露天商の友の会ということで露友会という看板をあげ始めた。(中略) この間、行政側とも何度かの話し合いを行い、行政側の責任者が顔を合わせた上で、手打ち式の形式で、両者の関係が保たれることになった。

証言者によると、『こうやって大阪では先に俠客が立ち上がったから第三国人が立ち入るすぎがなかった』と言うことになる。

事実、この経緯はともかくも、昭和二年八月よりの闇市閉鎖令により、大阪での闇市への取り締まりは苛酷なものともなり、現に、神戸へ神戸へとその勢力は逃れて、関西屈指の「大闇マーケット」を、神戸地域は形成していくことになるのであつた。

重野治証言の続きを記す。

『…ところが梅田の闇市にもいろいろ組があつて、阪神裏から曾根崎署へ至る一帯はF組というのがおさえていた。そのF組が、警察の前で栗やミカンやらシナ栗を売っている。警察の方では目の前で闇をやられたんでは立場がない、それに大阪梅田の闇市を、中央郵便局―桜橋―梅新―阪神―中央郵便局の線で結ぶ枡形の中に入れ込もうとした。大阪駅前の闇市もこの中へ合併させ、F組にも話しして中へ入ってもらふことにした。

経済統制とか摘発がきつうなると、中華は中華で中華青年隊とか、朝鮮は朝鮮なんやら会とかいうて勝手にこしらえる。警察は、誰であれ、そこで居住している以上、違反している場合取り締まる。そういうところから二二年の中ごろ曾根崎署襲撃事件が起こつた。「警察襲撃や！」というてきよつたから、神戸下駄はいて吾妻コート着たなりやつたが五、六人連れて警察に行つたらバーンとピストル撃ちこんどるし、Y署長はテーブルの

下に頭つつこんでもうて「オーイ頼むわ」いうので、署の玄関に出ていつてわしがあずかるから襲撃やめてくれいうて襲撃を止めてもらうた。

当時警察は、中華、朝鮮両国の事情が分からないからよく頼みに来た。阪神裏の八番街では中華、朝鮮人の盗電が多くて関電扇町営業所の所長がメーターを調べに行ったらメーターなしで盗電している。そこで電線切ったら所長木刀でどつかれて足折ってしまいよった。「おやじなんとか頼むわ」いうて家（うち）に来たので、そこでわしが出向いてじゅんじゅん説いて、日本に住んでいる以上は日本のものを使っているのだから、電気を使えば払うのが建前じゃないか、君らが戦勝国いうんやったらより以上に胸開いてくれなければいかんのとちがうかというて、はじめて月賦で払わした』

かくして「日本国を救けた日本ヤクザ団体」なども、その大義正分のほどはともかく、さらに勢威を拡大して行くことになるのであった。

もっともその正体はいかにも怪しく、新開地などは「愚連隊見本市」の観を呈していて、任侠道を口にする連中は影が薄かったともいう。

みんながみんな、一億総闇市の観を呈しており、売るもの買うものすべてが闇世界の始末、心の持ちようも怪しく成り果てていた。

### 闇市皮膚論とはなに？

ちなみに、終戦の年の暮れ十二月には、早くも、神戸あたりでは、三宮映画劇場、三宮映画館が再開、昭和二十一年にはキネマクラブ、相生座、日活シネマ、阪急会館、元町映画館などが再興した。新開地、三宮、元町と、神戸の元繁華街は復興目覚ましいものがあつたのだが、闇市様々の人の賑わいがあつてのこと、また、GHQの方針で、「民生安定」のため、娯楽を提供する施策が進められていたゆえのことでもあつた。

これも占領地政策・融和策の一環とされている。

その後も、“闇市戦争”の舞台はいちばんの賑わいの地、三宮、元町に移るが、一連の“神戸戦争”だけは日常的に発生した。“拳銃貸屋”などという物騒な商売を張っていたりする者もいたりで、実際に、ヒットマンも登場、銃器合戦も含めての血を血で洗う抗争の日々が繰り返された。

物資不足の折から、特に、当時の中井神戸市長自らが「市民の食糧が困る。闇市のおかげで食えている」などとも高言していた闇市肯定派の一人、実際に、沖繩にまで出掛けて食糧を調達していたぐらいで、闇市取締りの責務を負う警察とは一線を画していた。

その点、先述したが闇市規制の厳しかった大阪、京都あたりから商売の規制の緩い神戸にと、三国人などが流れ込むなんぞという珍現象も生じたのであった。

それだけに、各派の陣取り合戦も激しく、神戸・三宮では朝鮮人と台湾省民、露天商組合の三つ巴の争いも日常化していた。

『闇市皮膚論』と言う、もともともらしい、闇市擁護論がある。闇市を論じる場合、よく引き合いに出されるヘリクツなのだが、要するに、人間は皮膚から呼吸している。その呼吸装置が機能しなくては、人間本体は生きていけないのではないかーなんぞと言う付け足し論の一つで、「ひとまずは皮膚から呼吸はしましょう」との呼び掛けなるがゆえに、闇市にはごもつともな存在理由ありとなるのだが…。

当時の神戸市長などはこの急先鋒論者で、闇市が無くなれば、神戸の戦後復興が遅れると、真面目に考えた一人、それで、闇市業者たちを、うまく操ったつもりでいたのだが、「暴力装置付きの相手」では分が悪い話、大筋のところでは、間違いなく大負けとなった。

それでも、色々と行政側は手を打った。

三宮近辺の闇市は、シヨバ争いをめぐって、治安上重大な問題を抱えており、解決の要に迫られていた。日夜、闇市界限では、拳銃の音が鳴り響くことが止まず、死者も出ていた。

結果、市当局と警察は本腰を挙げざるを得ず、その対策に乗り出した。

一口に闇市撤去といっても、三宮駅から神戸駅までの高架下と、その周辺の道路上の闇市のすべてに対処することは不可能であった。

路地の裏の裏、長く続く高架下、それに、出はずれた地などでも既得商権が生じていた。

そのため行政当局は闇市占拠派の各リーダーに呼びかけて、穏便に各自の持ち場から移転することを斡旋した。同時に、闇市を半ば公認し、「自由市場」の体裁を保ちつつ、ともかくも、治安上からの撤去を求めた。

大体が「自由市場」なんぞというこの触れ込みからして怪しかった。全国でいちばん規制の緩い地域「闇市神戸」の誕生は、実は、こんな行政側の体面だけは保とうとする施策などもあつて生まれたものでもあった。

ここで、「闇市皮膚論」への反論とも言うべき、駐留軍当局なんぞの見解も記しておこう。

こちらは、大阪米軍第九軍政部（食糧および価格統制将校ビンガム大尉）から出された大阪闇市撲滅令で、大阪府警察部長名で声明文が発表された。

（朝日新聞所載昭和二十一年七月二六日版より）

『一、闇市場の商人の中には気の毒な引揚民、罹災者、戦災者、復員者などの失業者も相当あるが、この種の失業者なるが故に法令違反の闇行為をもつて生業とすることを容認するわけにはいかぬ。今後失業者が大量に放出された暁、これが皆闇商人に転身されては国家の債権は不可能となるのみならず、治安は收拾できぬ混乱に陥ること必至である。気の毒な半失業的闇商人は大闇市の親分ボス等より見れば刺身のツマ程度のものに過ぎぬ。』

（後略）

『一、配給制度が整備されていないから、闇市場も必要な存在であるのか如き錯覚に陥るものも少なくないが、大局的に見て闇市場がなければ餓死するわけのものでもない。かえつて闇市場があるが故に物価を不当引き上げ…、（中略）闇市場は主として闇商人仲間の生活圏であり、最も典型的悪

質なインフレ悪循環の経済現象である（後略）』

と、『闇市皮膚論』善玉論の矛盾点を喝破してあるが、これとて当然の理であつたのやも知れない。そんなこんな…両論、立ち位置が違つてこゝとだけは、よく解る話だ。

闇市話と、第三国人との関わり合い方、ここで、当時から社会問題になつていた「第三国人による土地収奪」事案問題について、この章の最後に、忘れぬように書き止めおく。

未だに、解決せざる事案として、「敗戦日本国」が負い続けているこの問題、法整備を補うために、やつと昭和二十五年に成立した「不動産侵奪罪」成立後も、まるで事は運ばぬままに過ぎているのが現状なりしとか。

この法律は「人の土地に勝手に建物を建ててはならぬ」旨の意を含んだ法律とされる。

大阪・梅田の一等地の私有土地を、不法占拠されていた当地主が、訴訟を起こしたところ、借地権、又貸し権などなど、全部で百二十余りの権利が設定されており、裁判でも埒（らち）が明かず、個別の立ち退き交渉も頓挫して、難渋を極めたと言う実例などもある。

『（※作者注、闇市中）実力を欲しいままにしていた集団に、土地を不法占拠したまま店をはる、暴力的な商人の一群があつた。かれらは、戦前の繁華街、梅田・難波・心斎橋をはじめ、市内各地の焼跡に一夜づくりのバラックを構え、人の私有地であつてもその管理人や地主の承認なしに家を建てていった。そして店をはり、地主が建物のとり除きや立退きを要求すると逆に法外な立退料や賠償金をふっかけたり、実力沙汰で暴行強迫したのである。また、取り引きをめぐっても、恐かつ・暴行による強盗まがいの不法が絶えなかつた。まさに、恐怖と隣あわせの無法地帯であり、云々…（中略）』と、当時の大阪闇市の状況について『資料④の書』では述べられている。

この章のまとめ、全体の総括もしておかないと、伝聞だけの話と思われる節もあるかも知れないので、権威ある一文をここで披露させてもらう。

(※土地収奪問題にも言及あり)

公安庁、直々、長官の当時の考察文あり。

公正なる視点からの論考で、この章は纏めておこう。

『終戦間もない頃の朝鮮人の犯罪状況について【法務研究 坪井豊吉】

本期における大きな傾向としては個人的感情にもとずく報復的詐欺、脅迫、暴行などの一般的犯罪のほか、いわゆる親日派民族反逆者への監禁、暴行、あるいは…(中略)各地の保安隊、警備隊(朝連の自衛組織)などの警察類似行為、主食の集団要求や買出し、彼ら同士の派閥抗争などがみられた…:またそれらの中の主たる事件は、各地における集団窃強盗、官公署への横暴な態度と不当な要求、建築物の不法占拠、汽車、電車、バスなどの不法乗車、生産管理、人民裁判などであった…:彼らの不法行為は、敗戦による日本当局の無気力と消極的な処置に乗じてやたらと増長され、戦後の混乱をいっそう助長するところとなった…:敗戦の混乱におびえる日本の一般社会人心は極度に不安な環境におちるところとなり、一時は全く無警察状態が各方面に現出された。

彼らの不法行為が、一般日本人はもちろん、在留外国人の間までも、彼らの性格が事大主義で、遵法精神が薄く、感情的で、極端な凶暴性をもっているとの深い印象を植え付けたことだけは、まぎれもない事実のようである。この時代は、特にその初期は右翼と称される民団、健青などによっても数々の不法行為が敢行されていた…:』この一文、どう読み取るか。

日本国は二度と負けてはならぬ。「敗戦国日本」の出発点にこのようなことがあったのは間違いない事実なりせば、今一度、この件り、皆さまの記憶のひだに刻みおく要ありと、わたしは思う一人なりし。

## 第二章 無辜（むこう）なりしや、戦勝国始末記

### 帝都の貞操を守る純潔部隊あり

昭和二十年八月三十日、連合軍最高司令官ダグラス・マッカーサーは、日本国厚木飛行場に降り立った。颯爽たる勇姿、トレードマークとなったマドロスパイプに黒いサングラス、後々、熱烈ファンまで生まれるほどのかっこよさで、例によって、何年か前に“韓流ブーム”に執り憑かれた、あの年齢層もどきの、当時の日本の女たちが、この時も「素敵い」なんぞと言いつし騒いだ。

これからの話、日本婦人の貞操を守るために、お国のために全身全霊を捧げることになったあどけない乙女たちの『挺身物語』を、綴ってゆくことになる。

進駐軍の上陸前、八月二十一日の近衛内閣の閣議決定により、占領軍向けの娯楽・性的慰安を図るための施設を作る案がまとまった。

日本駐留軍は、アメリカを主力として構成されていた。イギリス連邦占領軍は、山口県、広島県、島根県、鳥取県、岡山県と四国の四県に駐留であつたので、その他の地区は、アメリカ軍が駐留していたことになる。

「日本娘の純潔が一億円で守れるなんて安いもんだ」と、時の大蔵省主税局長池田勇人が言つてのけた。ご存知、のちに「貧乏人は麦を食え」とも、のたまいながら「所得倍増計画」を口にした元総理大臣様である。

「婦女子の安全をはかるには、防波堤となるものが必要だ。なんとか力を貸してもらいたい。当局も、できるだけ援助と便宜をあたえるつもりだ」

警視庁保安課の課長の呼び出しで集まった東京料飲業組合の面々が一室

で顔を合わせた。

事の次第はこうなる

RAA（特殊慰安施設協会）が、早々に発足する手筈が整えられた。内務省警保局長と各庁・府県長官宛てに「進駐軍特殊慰安施設について」と表題が記された秘密扱い無電の準備指令が発せられた。

閣議決定に基づくもので、国策的重要文書であることには間違いなかった。その要綱は次のようなものであった。

①外国駐屯軍に対する営業行為は、一定の地域を限定して、従来の取締まり標準にかかわらず、これを許可するものとする。

②前項の区域は、警察署長においてこれを設定し、日本人の施設利用は、これを禁ずるものとする。

③警察署長は、性の営業については、積極的に指導をおこない、施設の急速充実を図るものとす。性的慰安施設、飲食施設、娯楽施設。④営業に必要な婦女子は、芸妓・公私娼妓・女給・酌婦・常習的密売淫売犯等を優先的にこれに充当するものとす。

何でも、このような特殊な仕事に就く者たちのことを“牛太郎”と言った。ここは、官製の牛太郎対警察関係者のお立会いの場で、牛太郎たちは、何やら、お叱りを受けるとばかり思っていたのに、とんだ“濡れ場”を用意せよとの命を受けたのであった。

ちなみに、余談ながら、牛太郎の語源だが、吉原遊郭では、客引き男のこと、妓夫（ぎふ）が訛って、いつか、牛太郎となった次第なり。

もう一つ、隠語のサービス、金のある奴は“金太郎”、その反対のさえない奴は“無太郎”とかいうのだそうだ。どうでもいいか。

八月二十日、早々に業者が一堂に顔を合わせた。実行策を鳩首相談した。

もつともらしい良心派もどきの顔をする奴もいるもので、「飲食接待にはテンプラがいいか、スキヤキがいいか」なんぞが議題に上がった。そこで、吉原を仕切っていた男が、「食い気よりも色気だ。女だ。女の一本ヤリでい

け」と、さすがの、ドン・ズバリ提言をした。

「いっぱつ決まり！」だったそうで、戦災で半壊状態、商売も上がったりだった妓楼、淫売屋、あやしげな料飲店などはこれで息を吹き返した。何でも一説によると、これらの儲け、当時「百億市場」とも言われたとか。かくて確たる保証付き売春施設が誕生したのだが、どうやって女を集めるか？が火急の課題となった。これには官憲も協力を惜しまず、「いんちき勧誘文」にもケチはつけなかった。

『新日本女性に告ぐ！戦後処理の国家的緊急施設の一端として、駐屯軍慰安の大事業に参加する新日本女性の率先協力を求む！ダンサー及び女事務員募集。年齢十八歳以上、二十五歳まで。宿舎・被服・食糧全部支給』

こんな大看板が協会本部前に、まず、立てられた。八月二十三日のことだったという。

また、新聞に出された広告文案には、  
『急告！特別女子従業員募集、衣食住及高給支給 前借ニ応ズ地方ヨリノ応募者ニハ旅費ヲ支給ス 東京都京橋区銀座七の一 特殊慰安施設協会』とある。

神戸にもイーストキャンプが控えていたので、旧遊郭地の一線に立つて来た牛太郎たちがここでも集められ、やはり、奮戦方を求められた。業者は「強制しない」ということを前提条件として、目標一千人の女たちの頭数を揃えるべく、急遽、新聞広告などで募集を開始した。こちらではもつと露骨な募集条件も付された。「美人であること」などとも謳われていた。経験不問で、衣服、食事、宿舎、身の回り品支給で、月収三〇〇〇円保証とあり、巡査の初任給が四二〇円の時代、とてつもなく、この時代としては魅力的であった。

『慰安施設も成功した。米兵は着剣したままのブツソウな姿で列を作った。白人兵、黒人兵、将校たちを問わず女に飢えていた。おとなしく並んで順番を待つ米兵を見て警察も胸をなでおろした。慰安施設の従業員（慰

安婦)たちも初めはこわがっていたが笑いをとりもどした。(中略)ともあれ一般婦女への乱暴は避けられた。悲しい犠牲者たちの秘められた功績であった。(『兵庫風雪二〇年』岩佐純 兵庫新聞社刊)』などの、やや好意的な見方の記述文も残されてはいるのだが、さて…。

駐留軍施設を抱えた主な都市でも同様の措置が取られて、婦女の貞操を守る策”が実施されたのであった。

慰安施設が設立された背景だが、第一次世界大戦のヨーロッパの戦場で、米軍兵によるレイプの被害者が一四〇〇〇人(被害者は主にドイツ女性)また、ノルマンディに上陸した米軍兵がフランス女性を多数レイプ、また、六月二十三日、沖縄では牛島司令官の剖腹による自決により軍の抵抗を最終した日本軍の敗北により、勝利を確定した米軍兵による強姦行為なども沖縄の地では多発していたことなどもあり、駐留軍当局も、事前の策を考慮したという経緯もあった。

#### 性の戦場始末記

RAAの営業所は品川区大井の「小町園」を第一号に、京浜地区に「楽々」「花月」「見晴らし」「やなぎ」、都下の「福生営業所」など、ダンスホールの娯楽所なども含めて、都内だけで二十五ヶ所が設けられた。

この噂を聞いただけで上陸したアメリカ兵は殺気立った。何しろ、硫黄島陥落の際の日本兵相手の戦いの際の“殺し文句”が、「やつらをのしちまえ！東京はすぐそこだ！きれいな娘たちが征服されるのを待ちかねているぞ！日本の娘たちはみんなお前たちのものだ！さあ、突っ込め！」こんな悪いジョークが飛び交った戦場から、命からがら辿り着いた連中が日本本土に上陸したのだ。

日本政府とGHQが準備万端に諸施設を整えて、ご接待にあい努めることになるのだが、さて、どんな「闇の戦後史」で埋められ、「闇の始末記」

へと事態は展開したのか？

男というケダモノはみんながみんな、今度は“女との戦争”におのが身を賭けて来た。

震災で家を焼かれ、食べる物もなく飢餓状態、着るものとてもんぺ姿のみすぼらしさ。「衣食住保証の殺し文句」も利いて、どつと、「生娘たち」が選考室に押し寄せた。仕事の内容が米軍相手の売春と聞かされて、みんな腰が引けたが、「生きて行くこと」が最優先事項。大方は、採用されてしまふ身となった。「慰安婦って何をするんですか？」

そんな、おぼこい質問が出るのも無理からぬ話。

そこは名うての牛太郎諸氏が、巧みに、勧誘にこれ努めたらしい。

もちろん、仰天してお帰りになった淑女もいた。帰るに帰られぬ事情の娘も多くいた。化粧らしい化粧をしている者はなく、焼跡の道を十人に一人はハダシでやって来た。もちろん、ろくろくろ食っていないので、足元がふらついていた。

レポート風に記しているが、彼女たちの境遇に思いを致せば、本当のところは筆が鈍ろうというもの。敗戦国の惨めさがここにある。

それでも、これらのことは書かねばならぬ。

被害者でもあった娘たちは、ここで記されている事実ことはほとんどは黙して語らず。

この文は、(註―③)に所載された“生贄にされた七万人の娘たち”―真壁昊)の一文を借りてのもので貴重な資料の一つなり。

『開店初日、東京・大森に設営された小町園には早くもジープ群が群れた。川崎・鶴見地区に進駐した先遣部隊の連中は、もう、けだものの群れ、障子のふすまは蹴破り、土足のままで入り込み、見る間に、居間に控えている女たちを襲った。殺気立っていた。正しく、性の戦場で、血まみれになる女が続出した。くもを突くような大男ども、大半が素人娘、処女の女たちも多かったから、血の修羅場と化したという経緯もあった』

『女たちは、彼らの横暴さと初めて見る巨軀に恐怖した。大半が素人娘で、処女も少なからずいた。「男の処理」の技術など知るべくもない。狩り集められ、性教育の期間もなしに送り込まれたのである。ただ、恥ずかしさと恐ろしさに身を縮めるばかりであった』

『京浜国道の幅広い道はアメリカの兵隊で、黒山の波が襲ってくるようでした。(中略)入れ替わりに、つぎの兵隊がくる。急いで使用室に駆け込む。さらに送り込まれる男を、つぎからつぎへと抱いては送り、送っては抱き、相手に対する好意の感情などわく余裕もなく時間が過ぎていく…。午後になり店を閉め、おそい昼食をとったときは、からだじゅうが痛くて…。お腹がひどく疼く。あとで聞くと、二十二人も相手をしていました(現在主婦のS子の証言)』四十人も相手にすると、局部がジンジンやけつくようになり、うずいて、足腰は痺れ、息も絶えるばかりでした。終わりの頃になると、仰向けに寝たまままで…。次から次へと新規の兵隊を迎えるのですが、疲れ切って足腰を上げる力もない…。』

もっと、悲劇が待ち受けていた。

客扱いのノウハウを教えていた一女性曰く。娘に付されたナンバーは「セブン」であった。

『いろいろな説明を聞くあいだ、この娘はじつとからだをこわばらせ顔を伏せていた。処女なら無理もない。“すぐ慣れるだろう”と思ったという』この、怖さに震えていたセブン娘の続編話。

『翌日の午前八時半開店となるや、津波のような喚声を上げて、米兵がどっと押し寄せてきた。廊下は、血走った眼の野獣たちで狂乱の場と化していく。(中略)「おばさん堪忍して…。あたし怖くて、恐しくて…」と泣きじゃくっているの、夕方まで休ませた』

と、その間の事情を、教育係だった一女性は述べ立てた。

『しばし、休ませたあと、一黒人男が相手になることになった。間もなく力づくで犯したらしく、この男は大興奮をして「ナンバーセブン、グッド」

と叫びながら部屋を出て行った。騒ぎを覚えた、その教育係の女性が、その部屋に入ると、中には、乱れたフトンと赤く血ぬられたシーツが見えるだけ、娘の姿はない：』

店中が大騒ぎになりその娘の姿を探したがどこにも見当たらず。夜が明けけるのを待つ。

大森署へ問い合わせると京浜電車へ飛び込み自殺をした女がいることが判明、行方が知れなくなっていた当の娘だった。空襲で一人ぼっちになった十九歳の娘で愛らしい色白の顔立ち、丸の内の商社でタイピストをしていたのだという。家族関係は分からぬが、一人で生きていかねばならぬ身、その懸命ぶりがこのような悲劇を招こうとは：。タイピストと言えばその頃の花形職業であった。

人生に夢を描いていたであろうにと思うと、心が痛い。

このR A Aは「国家売春」施設の一つとして生まれ、一九四六年三月に店じまいとなるのだが、これはG H Qの「公娼制度禁止に関する件で、公娼地域をそのまま私娼地域として営業させ、貸座敷業は接待所、娼妓を接待婦と呼びかえる」というタテマエだけの通達書であった。要するに、「生計の目的を持って、個人が自発的売淫行為に従事することは禁じえない」なんぞという「覚書」も発して、抜け道も作ってあった。

進駐軍当事者の「覚書」の文言が、なかなかに揮っているので、紹介しておこう。

「日本の公娼存続はデモクラシーの理想に違背するから、日本政府は直ちに従来公娼を許容した一切の法律および命令を廃棄して、その諸法律下に売春を業務に契約した一切を放棄せしめよ」

デモクラシー国家の面目躍如なり一文なりしか。ごもつともとしか言いようがない。

## 日本国を蹂躪した暴徒の兵

街に出てみれば、同じく、アメリカ兵たちも、ところ構わず、強姦劇を繰り返した。米軍が日本に進駐した際、最初の十日間、神奈川県下では、一三三六件の強姦事件が発生した。

この地は、米軍上陸地帯とも近かったので、事件は多発したのであった。占領直後の性的暴力や強姦の件数は、公的な数字は確認されていないが、米軍兵により、日本女性が強姦された件数は、最低でも一ヶ月間だけでも、三五〇〇人にはなるといふ被害数字も出されている。

また、警視庁の『事故報告書』によると、二十年十一月中に発生した米兵の犯罪は、婦女暴行、強姦、おどし、たかりなど五四四件、犯人についての新聞報道では「雲をつくような大男…」とか、「六尺豊かな怪漢がピストルをつきつけて…」と、犯人像をぼかしたが、彼らが何者かは誰にも分かった。警視庁管内だけでも、いくつもの具体事例が報告されている。

昭和二十年八月三十日、横須賀に上陸した海兵隊員が、上陸二時間後には、本町のドブ板通りに姿を現わし、母親（三六歳）と、その娘（一七歳）の母娘が姦淫された。

翌三十一日、夕刻、新宿でも婦女陵辱事件が発生した。M女学校四年の女学生二人が、新宿の人込みの中で、六、七人の米兵に拉致され、そのままに多摩川の川べりまで連れて行かれた末に、多数の米兵に輪姦された。

いずれにしろ、性暴力に関する諸数字は、信用できないものが多いが、『マッカーサーの日本』（一九七〇刊―新潮社）によると、米軍の嘘を暴くために、占領下に解散させられた日本の旧特高（特別高等警察）の記録によると、「進駐軍ノ不法行為」が記録されており、一九四五年八月二十日（九月十日の十二日間分）だけでも強姦事件九件、ワイセツ事件六件、警官に対する事件七十七件が報告されている。

その後、「特高廃止令」により、書類は焼却されることになったが、「特

高」の元締めである「内務省警保局」の秘密報告書は償却されず、この不名誉な米軍記録は没収されて、米国に持ち帰られたままに行方不明となっていたが、一九七三年に日本に返却され、国立公文書館に所蔵されて、今日に至る。

#### 強姦事件

突然米兵二名進入シ来リ、一名見張り、一名ハ二階四畳半ニテ〇〇ヲ強姦セリ。手口ハ予メ検索ト称シ、家内ニ侵入シ、一度外ニ出テ再ビ入り、女一人ト確認シテ前記犯行セリ 一名にて女中が留守中、

八月三十日午後一時三十分頃横須賀市〇〇方。米兵一名裏口ヨリ侵入シ、留守中ノ右同人妻当三十六年、長女当十七年ニ対シ、拳銃ヲ擬シ威嚇ノ上、〇〇ハ二階ニテ、それぞれ〇〇ハ勝手口小室ニ於テ、夫々強姦セリ

(※前述項目と重複)

(以下略) 同九月一日、房総半島ニ米軍上陸。ココデモ事件発生。ハ〇〇方ニ侵入セル米兵三人ニ留守中ノ妻(二八)(中略)奥座敷ニ連行、脅迫ノ上、三人ニテ輪姦セリX九月一日午後六時頃トラックに乗りタル米兵二名(中略)V市内〇〇ニ来タリ女中一名(二四)連レ去リ(中略)野毛山公園内米兵宿舎ニ於テ米兵二十七名ニ輪姦サレ仮死状態ニ陥リタルモ(中略)三日米兵ニヨリ自宅迄送り届ケタリ』

これらの被害届は一部でしかないの説もある。事実であろう。

被害届を出す者は限られていたし、そのような事実はなかったという「前提の元での被害届」が大部を占めた。

当時、貴重品であった女性用腕時計を奪われた事件が多くあり、彼ら、略奪犯人たちが、犯行時に女性用の腕時計だけを奪って去ったとは思えない事例がここには多く存した。

この種の告発本として知られる「黒い春へ米軍・パンパン・女たちの戦

後―五島勉▽倒語社刊」には、もつと、生々しい被害者からの「聞き取り書」なるものが収録されており、その一文も、ここに、記しておく。

『T（十一歳・武蔵野市小学校五年生R子(同)A子(同)の三人は、十月(中略)武蔵野の林のなかを仲よく手をつないで歩いていた△キャンプ・トコロザワの近くで夢中でスケッチをしているとまずR子がおそわれ、次々に米軍の餌食になってしまったのだ。彼女達のスカートは切られ、何が起こったのか全然わからなかった。R子とA子は気絶し、T子はまた泣き叫ぶと、アメリカ兵は彼女の頭を蹴り、ジープで走り去った▽』(要旨、以下同)

一九四六年四月、東京・大森で恐ろしい事件が発生した。

△N病院（＝中村病院。その後、廃業し、跡はビルと道路になった▽は三台のトラックに分乗した米兵によって、およそ一時間近くも病院中を荒らされた。彼等の総数は二百人とも三百人とかいう説もある。婦人患者のうち重症者をのぞく四十数人と看護婦・雑役婦などが陵辱された▽

「彼等は大病室に乱入し、妊婦・産婦・病気の婦人たちのふとんを剥ぎとり、その上にのりかかった」

「二日前に生まれたばかりの赤ちゃんフミ子ちゃんは、一人の兵隊にユカに落とされて死んだ」「M子などは続けさまに七人の兵隊に犯され、気絶した」そして、「裸でころがっているあいだを通って、侵入してきたときと同様、彼等は表玄関と裏口から引き揚げていった』

かくて、女たちの手記は遺された

手元にある古いひだ本『※資料⑤「日本の貞操」外国兵に犯された女性たちの手記 水野浩編 蒼樹社刊』は紙の質も悪く、ものない時代に作られたいわゆる仙花紙で、これは屑紙を再生したもの、本でさえ出版することが難しい戦後期、昭和二十八年四月の発刊日付となっている。しかも、

この時期、手記は四篇採録されているが、GHQのプレスコード(新聞検

閱規定)などがまだ厳格だった頃なので、この種の「米兵の性に関する著作物」は大幅制限にあっていたはずなのに、その目をすり抜けての発刊、やっと、生き残った一冊なのかという感慨をわたしは持っている。

貴重な資料本の一つだろう。この書については、後述記載するが、同様事例を、その前にいくつか紹介しておく。昭和六十一年に「五島勉編著 倒語社刊」の復刊版あり。四例のうち、二例のみ記載する。

## 事例 その一

(註原文ママ つゝつの表記一部抜粋)

杉田朋江(仮名)昭和六年生まれ。東京都練馬区に生まれる)の実記原文の手記より。

『……どろぼう？』

はつと私達はお父さまの顔を見た。ぎゅつと眉をよせて、お父さまは腰を浮かせた。と、そのとき、庭木戸が、ばりばりと一気に押し破られた。

アメリカ兵！

私は夢中で立ち上がった。ソレつきり、体がすくんで、動けない。きゅつと頭の皮がつれて縮んだようだ。手は自然に胸をおさえるやうにかがんで、握りしめた両のこぶしが口もとでぶるぶるとふるえる。

二人の兵隊は腰のあたり右手にナイフをかまへていた。(中略)』

『米兵は初めに金を父親に要求したのだが、目的はオンナであつて、その後、父親は後ろ手に縛り上げられ、細引きの紐で、父親の体は柱にぐるぐる巻きにされた』

『私はもう、生きたこころもなかつた。取りとめもない、言葉にはならないものが、何でもすがりつきたいような、あえぎを洩らしたようだった。ぶるぶるふるえながら、私は半ば失神しかけていたのだろう。また誰かの声が出た。それも誰かの声かわからなかつた。真空のなかになげだされた』

ようで、そして何もみえず耳がジンジン鳴りつづけた。私はまるで石のように固くなつてうつむいていたのだろう。私のあごに、ひやつと何かさわったかと思うと、ぐいとあおむけにされた…。

兵隊の顔が、眼の前一ぱいにひろがった。酒の匂いが鼻をついた。その兵隊が私をいきなり、ぐいと抱きしめた。私は力一杯もがきながら声をかぎり叫んだが、いまは何を叫んだのかはおぼえてもいない。

私は相手の胸に腕をつつぱつて、体を必死にそらせ、兵隊の顔をさげようとした。お母さまが何か叫びながら兵隊にすがりついていた。(※継る)片手で、兵隊の腕にとすがつて、片手で押んだり、自分をさしたりしているのが、まるで影絵のようにちらついた。

兵隊は手を少しゆるめて、何か、大きな声でもう一人の兵隊と一言、二言、いいあつた。そして、私を抱いていた手をはなした。私は、意気地なく、そこにへたへたと、坐りこんでしまった。(中略)きゅつと、帯びのこすれる音がした。どたどたと足音が乱れた。きつとお母さまだつたのだろう。えぐるような泣き声がちりぢりに散ってきこへた。

……あゝ、お母さまが私の身代わりになられたのだ…と、その一事だけが妙にあざやかに頭をかすめた。

私は、その音をきくまいと、よけい顔をかくした両手で耳をふさいだ。起き上がらうとして床に吸ひつかれているやうでどうにもならない。リノリノームの上にもじかに顔を押しつけてつぶした。お父さまらしい声。ひどい鋭い声が、口早によんでいるのがぼんやりときこえた。

耳がつぶれるほど、おさへていても、気配で兵隊が、いれかわるのがわかった。私は金しぼりの状態で泣いた。だんだん意識がかすんできて、全身が総毛だち、どのくらいたつたか、判らない。

私はどんと、横につつころばされた。そして、あうのかされるなりぐつとのしかかつてきた兵隊―。(※作者注―仰のく)

私は死にもぐるいに、相手を蹴った。めちやめちやに手をふりわした。

お父さまが身をもたえながら、叫びながら足で床を蹴っている姿がちらつと映つたのをおぼえている。

のしかかった兵隊が、横倒しになりかかった。お母さまが私を助けようとしているのだと思ふなり私は激しくもがいた。しかし、お母さまは、あつと思ふまにもう一人の兵隊に、引きはなされてしまった。お母さまが何か叫んだ。私も無茶苦茶に声にならない声で叫んだ。

しつかりおさへつけれた私は、声をかぎりに叫びながら、さしよせて来た顔に爪をたてた。兵隊は私の手を噛んだ。悲鳴をあげて振りきつた兵隊は、力任せに、私のこみかみを殴りつけた。ぐらくらと目まいがした。(中略)

『突如、ひきさくような悲鳴が、私の耳をつらぬいた。悲鳴は汽笛のように、一息に長くつづいて、ぷつと切れた。』

……妹！べつの力に私は、体ごとつきあげられるように感じた。体を切りさく痛みと共に、私は、私とすべてに絶望して、がつくりと力をなくしていた。けれども、妹！私は、残っている力を振りしぼつて、兵隊をつきつけた。兵隊は夢中で私にしがみついた。汚い！私は口のまえにつきだされた兵隊服の肩をかんだ。兵隊はふり切ろうとしない。厚い木綿が、齒にこすれて、ぎりぎり音をたてた。齒の根がみりみりぬけそうだった。

ただ、胸のなかに煮へくりかえる熱いもの、人間のいだきうる最大の憎悪―それが、胸を灼きつくす。いつそ、このまま、体ごと、燃へつきてしまえ。そして、このけだものを焼ころしてしまひたい？』

この後々のことも記さねばならない。

妹の大事に關してのこと、そして、警察の対応がどうであったかという問題も含めてのことである。無惨な話なので、一部のみ記す。

『〇子

私のなかにもう怖ろしさはなくなっていた。氣違いのやうに私は起上がった。しかし、遅かった。もう、何もかも終はつていた。

妹は素はだかにされ体をあおむけにして左右に開いた手や胸を軽く曲げて、じつと動かなかつた。私は夢中でとなりの座敷に這ひよつて抱きあげた。おつとりと、表情のない顔で、眼は閉じていた。胸はもう動かない。

(中略) 私は動かない妹の体を抱きとめてサンルームを振り返つた。

ズボンをもうはきおえた兵隊達は、さつきまでお父さまと私がすわつていた籐椅子に腰かけて、三分の一ビンに残っていたビールを半分ずつわけ、ゆうゆうと乾しているとところなのだ。足許についた血をぬぐつたのだろう。妹の寝巻きが丸めてあつた』

次に、沖縄で発生した同様事件にも触れておく。

沖縄諸島は戦後も米軍の統治下に置かれた。

余談の域になるが、沖縄でも、渡嘉敷島、座間味島、宮古島などに、「米兵による性の暴力」を防ぐべく、慰安所が開設されていた。

日本に復帰したのが、昭和四十七年五月十五日、この間も、それからの沖縄の戦後も、常に駐留する米軍海兵隊員による婦女暴行のニュースは後を絶たない。三か月に及んだ地上戦で二十万人を超す犠牲者を出した「沖縄戦線」、そのうち、九万人余は沖縄の住民たちであつた。

余談の域になるが、沖縄でも、渡嘉敷島、座間味島、宮古島などに、「米軍の性の暴力」を防ぐべく、慰安所が開設されていた。

長浜きくさんは、米軍の上陸地点となつた沖縄本島中部読谷村に住んでいたが、米軍上陸前に北部に逃れた。飢えと病いに悩まされた挙句に祖母を亡くした。戦闘終了後、その当時十五歳であつた長浜さんは、避難地の山原から降りたが、米軍戦士による性的暴行事件の続発を目の当たりにし、ショックを受けた。これらの目撃事件は殆ど表には出ていない。

「沖縄・米兵による女性への性犯罪―基地・軍隊を許さない行動をする女たちの会刊 代表高里鈴代」※「沖縄 誰も書かれなかつた戦後史 下巻 佐野真一著」に収録された記述文より。

『一九四五年四月から〇四年八月まで沖縄で起きたおびただしい数性犯罪

が記録されており、この島がいまも米軍の占領下にあり、性に飢えた米兵たちの放縦なはけ口になっていることをあらためて思い知らされる。(中略)なかでも悲惨なのは、昭和三十年九月、石川市(現・うるま市)で起きた当時六歳の幼稚園児が誘拐され、強姦された永山由美子ちゃん事件である。この事件で逮捕された嘉手納高射砲隊に所属する白人の軍曹は、米軍軍法会議死刑の判決を受けた。だが、その後、四十五年の重労働に減刑された。草むらに放置された由美子ちゃんの顔面はくずれ、両手は生えた草むらをしっかり握っていたという。(中略)さらに目をそむけたくなるのは、一九五九年九月、旧真和志村(現沖繩市)で起きた生後九カ月の乳児を母親の顔見知りの米兵が強姦した事件である。この何ともやりきれない事件は、米軍の捜査はあったものの、結局、迷宮入りで終わっている』

『平成七年に発生した小六の少女が三人の海兵隊員にレイプされた沖繩本島での事件では、この時、来日した被告の家族らが「反米意識の強い沖繩での裁判は自白を強要される恐れがある。こんなところに息子をおいておくわけにはいかない。沖繩以外での裁判を望む』と、厚顔無恥な要求までしている。(中略・一部編纂)少女は事件発生の当日の午後八時過ぎ、自宅とは歩いて三分とはかからない文房具店で百五十円のノートを買ひ、店を出たところを、三人の米兵たちに襲われた。少女は彼らがかねて用意しておいたレンタカーの車内に力づくで押し込まれ、これも犯行のために用意しておいた粘着テープで両目と口を塞がれた。そして、拉致現場から約一、五キロ離れたサトウキビ畑に連れ込まれて強姦された。(中略)裁判は平成七年十一月に那覇地裁で始まった。事件の詳細が明らかになるにつれ、傍聴席からはあまりのむごさにすすり泣きの声が漏れ、通訳が言葉をつまらせて涙する場面もあった。検察側は全員に懲役十年の求刑をした。那覇地裁は翌年三月、那覇地裁は三人のうち二人の被告に懲役七年、一人の被告に懲役六年六か月の判決を言い渡した。この裁判の過程で被告側の両親に代わって検事が読み上げた。「法律が許すなら殺してやりたい」「極刑に処

してほしい」という供述書の痛切な訴えに比べ、あまりにも軽すぎる判決だった。

(※註作者 米軍によりストップが掛かったの証言あり)

もはや、戦後とも言えない時期、平成十三年二月下旬、十四歳の少女が米軍軍曹に車に連れ込まれ暴行凌辱を受けた。この事件に関して、佐野真一が取材した際の前記の高里鈴代の記述文があるので借用記載する。

『私は事件直後の記者会見でも、十三年前の事件と安易に比較すべきではないと言ったんです。あの時の少女はいま、二十五歳です。彼女の立場に立てば、今回の事件と比較される度、とてもたまらない気持ちになるでしょう。それに対してもう一方の当事者である犯人の海兵隊員は三人の犯人もども、もう沖縄にいません。自由になって、そのうちの一人は、今度はアメリカでまたレイプ事件を起こしているのです(註一部作者補遺)』

沖縄での一連の事件のまとめとして、「沖縄 誰も書かれなくなかった戦後史」の著者、佐野真一の一文を、ここに遺す。

『沖縄の「戦後」はまだ終わっていない。終わっていないどころか、基地の中に島があると言われるように、沖縄はいつ暴発してもおかしくない米軍という爆弾を島中に抱えた占領下のままである』

その言説を元に、いくつかの主な事例を記載する。

(沖縄から「日本の主権」を問う 協力沖縄タイムス社編集 編集沖縄問題編集委員会 一九九五年に、リム出版新社にて刊) (※一部のみ記載)

〔復帰前〕\*昭和二十二年八月六日 伊江島の川平波止場で米軍が戦時中の爆弾を輸送船に詰め込み作業中、爆発、連絡船が巻き込まれ、下船中の乗客らが吹き飛ばされ、百六人が死亡、七十六人が負傷。\*昭和二十四年石川市の宮森小学校に米軍戦闘機が墜落。児童ら十七人人が死亡。百人がけがをする惨事。\*昭和三十年十月二十六日 ゴザ市のセンター街の外人クラブで女性従業員が絞殺された。二日後に二十四歳の米兵を逮捕。翌年懲役三年の判決。\*十二月二十六日、金武町のキャンプ・ハンセンで弾拾

い中の農夫を米軍兵曹が射殺。「イノシシと間違えて撃った」と供述。\*九月十九日、ゴザ市で米兵運転の車が児童4人をひいて逃走。10歳と6歳の女子小学生が死亡、2人が重傷。\*七月三日、美里村のキビ畑で二十二歳の飲食店従業員の絞殺体が見つかる。十九歳の海軍兵が犯行を自供。翌年九月、軍事裁判で懲役十八年の判決。\*昭和四十一年五月二十八日、裏添村屋富祖の部隊内で出勤途中の二十二歳の軍雇用員女性が米兵に襲われた。軍法会議は無罪を言い渡す。\*昭和四十六年四月二十三日、宜野湾市大山で二十三歳の飲食店従業員が米兵に石で殴り殺される。証拠不十分で無罪。

【復帰後】\*昭和五十年四月十九日金武村で女子中学生二人が二十二歳の米兵に暴行された事件が社会問題となり身柄は起訴後に日本側に。「酒を飲み覚えていない」と起訴事実を否認。同年九月、米兵に懲役六年の判決。

\*昭和五十三年十一月五日、金武村の民家近くに信号弾が落下。米軍は「兵隊のいたずら」と発表。昭和六十三年十一月十九日、北谷村北前の住宅地で催涙弾らしきものが爆発。付近住民がのどに激痛。また同年十二月二十四日クリスマスイブで賑わう沖縄市内のディスコに催涙弾が投げ入れられ、客200人が将棋倒しになり一人が意識不明。\*平成元年十二月、伊江島射撃場で原野火災が発生し、六万六千㎡を焼失。\*平成六年七月十八日、十九歳の米兵が宜野湾市内の民家で女性に乱暴を働く。

★凌辱手記が語り掛ける人生

【特別収集版】

事例その二

(作者註 原文旧仮名使い)

小野年子 (仮名)

(※昭和四年東京都向島生れ。高等女学校卒。戦災で両親を失う)

(京都の叔母宅に引き取られてトシコはひとまずの棲家を得ていた)

\*前記、「日本の貞操 水野浩著」よりの本記転載。

或る日、夕食の最中におまわりが家にやって来て、「進駐軍物資不法所持の疑いでMPからの出頭命令が来ている」と告げられた。

彼女の人生が決定的な「暗転」へと向う契機が訪れた日であった。

トシコの決意からこの遺書形式の最初の文章は始まる。

全文四百字の原稿用紙二百五十枚ほどの分量のある「遺書日記帖」、ここでは抄録形態を採るが、なるべく、多くの「実記」をここでは紹介していききたいと思います。「遺書」とあるのは、彼女が不治の病いを得て病床にあった時期に、この手記は記されたものであるからだ。

それだけの切実な内容と、かつ、魂の叫びも伝わって来る「心の物語」でもあるので、「実記」の部分になるべくページを割く。それが、いちばんの作者への餞けではと思う。日記帖をつけていたのに、「あの日のこと」だけは欠落になったままになっていたのだが、改めて、後刻、彼女は重い心の扉を開き、その記すことが躊躇われる一文を綴った。(※その本文より)『そして手帳には一行ー一字、書かれていないあのこと。……いいえ、どうして私に書きとめる気持ちのゆとりなどがあつたらう？ただ、いたたまれない想ひに責められて、いきなり、こちらにきてしまったのだった。(※生地の東京に戻る)でも、ゆとりがあつたにしても、何も書きはしなかつたらう。一日でも早く忘れたひあの日のことをー。でも、一字の心覚へなしでも、私はあの日のどんな小さなことも、四年たった今でも、何一つ忘れることができないでいる。そしてそのことをはつきりさせるときがきている。私はその日を、私の恥辱をこへて想いーひかえず。ー』

MPからという出頭命令があつた時、トシコはひとまずは素直に従つた。闇市でナイロンの靴下などを買ったことがあつたので、身に覚えがなかつたわけではなかつたが、誰でもその程度のこととはしており、特に、呼び出

しまで受けるというのは異例であったが、同行していた三人のMPがジープで待ち受けていたので、疑念を抱きながらもトシコは同行することを承知した。MPとは犯罪を取り締まる側のはずで、警察機構の役目も負うのだから、彼らが犯罪者とは思いつかぬ話だ。

呼び出しに来たおまわりはジープには乗ることなく姿を消した。MP本部にでも連れて行かれるのかと、トシコは一人心細く思った。

ジープは横道に入り、畠道と林と山裾野の道を走りに走って暗闇の田舎道に着いた。「うまうまと連れ出されたのだ」と、トシコは気付いき、飛び降りようとしたが、直ぐに、MPの一人に腕を掴まれて逃げられないようにされた。そして、ジープは雑木林の中に入り急停車した。ヘッドライトが消された。月明かりで、あたりは薄暗かった。

『私の横に坐ったG・I（※ジーアイ、主にアメリカ陸軍兵士の俗称）は腕をつかんだその手をぐんとつひたので、私ははずみをくらって、ジープから横ざまにころげ落ちた。その私を先に降りた二人が抱きとるやうにして、私はジープからおろされた。もうちつとも疑ふ余地がない。私はふり切って逃げやうとした。と、もう一人が眼の前に立ちふさがっていた。

二人はすぐ私の両側から、腕を捕らえ、セーターの両脇をつかんで、妙なかけ声をあはせて、すぱっと抜きとるやうにぬがした。あつと驚く暇もなく、スカートのホックをはずし、スリツプを抜きとつた。

私は悲鳴をあげ、「助けて」と叫んだ。とたんに、私は冷水をあびせられたやうにぞうつとした。三人が、声をあわせて、笑ったからだだった。

一人のG・Iは笑いながら何かいつた。多分（原文ママ）

「もつとわめけ、もつとわめけ」

とでも、いつたのだらう。私は笑ひ声に、私かどんなに泣き叫んでも、誰にも聞こへない場所にまで連れ出されているのを悟らされた。その場所も、あのジープの走らせ方では、さらひだしつけている絶好の場所に違いなかったのだ。

（※作者注―さらひだし＝攫（さら）い出すの意）

女の肌につけたものを心得切っている三人連れは、私が一人でぬぐよりも手早く、引きはぎ終はると、自分達の獲物を鑑賞するでもするかのやうに、下着を遠くにほうりやっつてから、私から少し離れた。離れたといつても、五、六歩の所を、三方からかこまれて、どこに逃げやうもない月の光に照らしだされた私の素肌に、楽しい笑ひ声が起こった。その眼にたえられずに、私はその場にうずくまりつつぷした。

がくんと私はあうのかされた。

歯を喰いしばつた私の眼から、とめどもなく口惜し涙が流れた。

どんなに必死に力をふりしぼつてみても、三人に押さへつけられては、だう、あがいても、逃れやうがなかつた。もはや、私は私のさうした態度が、G・I達をいっそう嬉しがらせているに過ぎなひのがわかると、体中の力が、がつくりと抜けた。

いくら戦争に負けたからとはいへ、日本の巡査までもが、若い娘のいるうちを教へるばかりか、強姦の手引きをまでするなんて！道でつかまつたのだつたら、まだ、諦めやうもあらうに！私はそのことを憶ひかえすたびに、いいしれぬ興奮の発作にかられる。いま私の身体が汚されていやうと、この心根だけはほんとに純潔なのだ。私はそう主張したい。誰が何といほうとあの日本の巡査は、同じ国の娘を売り渡したのだ。その売り渡された娘の、死に様と「遺言」をいまこそきかしてやりたい。それも、私のうちに、お父さんも、叔父さもいなくなつて、馬鹿にされてのことなんだろうが。――それなら、両親を焼夷弾で焼き殺したのは誰なんだ。きっと父も母も、この私のいかりを墓の下でよるこんでいるだらう。このいかりはいく千萬の私たちのやうな不幸な人間の心からの叫びなのだから――』

彼らは、毎度、毎度、このやうな仕打ちを日本の女たちに向けているに違ひなかつた。蛮行を働く常習犯ども、G・Iたちは、彼女を弄んだ後、なおもプレイの続きを楽しんだ。何の悪びれたふうもない。

『泣いても泣いても、泣ききれないそのくやしき情けなさ。しかも私の涙をみてG・Iは喜んでいふのだ。』

「イトハン ショジョ サヨナラ ネ！」

「イタイノ ゴメンサイ」

やがて、G・Iたちはいくらか、気がしずまったふうで、私を起こして坐らせ、私の背にスリッパやセーターをかけて、自分達もズボンをはいた。そして、シガレットをだして、口にくわへて、火をつけた。

「ユー、スモーク」

とG・Iはラッキーマスの箱をつきだした。腕組みして、うなだれていた私はふりむきもしなかった。すると、ほかのG・Iは箱から、一本ぬきだして、片手の拇指と人差指で唇を上下にこじあけて、はさんで、ライターに火をつけた。私は、黙つてそのシガレットを払い落とす。むっとして、そのG・Iは、火をつけたライターを、いきなり私のからだ(傍点)につきつけた。毛糸を焦がすやうな匂いと、一しよにちりちりつと焼ける。だが、私はひりひりする痛みを耐えた。私は身じろぎもしなかった。痛がればG・Iを喜ばすからだ。面白がつて、私の顔をのぞきこんだG・I達は、果たして私の無表情な顔付つきに、ひどく興ざめた顔になった。いらだつた一人は、シガレットを強く吸つて、ぱつと先を勢ひよく燃えあがらせて、これでどうだといはぬばかりに、脇腹におしつけた。私は思はず、身体をそらさうとしたが、無理におさへた。じりじりつとタバコの火の焼つくのを、私は唇をかみしめて、こらへた。ただ、あふれ出る口惜し涙だけは、どうとめやうもなかった。

その涙のながさは、現在の私の涙のながさと少しもかわらない。眞夜中近くまで、けだもにおもちやにされつづけた人間が、そして死ぬまで肉体をすりへらされた私がここにおさへきれない決意をもつて書くこの手記に、どうしてその涙がにじみださずにいやう。私は青春のはじめに巡査とG・Iのけだもののやうな姿に接した。しかしいま死を前に、私は憎むことを

知った。私はもうあきらめない。私はかれらの一切を憎まねばならぬ。そのことを知っている!』

『眞夜中をすぎてG・I達は私を残して、ジープで走り去った。私は腰のふらふらするのをこらえて、服だけを拾ひ集めて、身につけたが、とても帰ることなどおぼつかない。いまさらのやうに、ひりひり痛むあちこちのきず、やけどあとに、私は涙を新たにしながら夜をあかした。方角がよくわからない上に、体がとても痛むので、林に日が上ってから休んでいたが、ふと白いものが落葉のかけにみえた。

つまみ上げてみると、小さな女物のハンケチだった。

私はこのとき、血が逆流するのを感じた。こういふことがくりかへされていいものか。……ハンケチを力いっぱいつかんだ私の手は、小きざみにふるへていた。私は身体の痛みも忘れて、つと、たちあがると、ジープの走り去った方を身動きもせずねめつけていた』

ちなみに、事例一、二の事件は、警察にと届けられたが、一切、事件としては扱われていない。いかにも、日常茶飯事のこと、ましてや、巡査またはMPを装った者たち?事例二のケースなどは、そういう行動を取った者が、本物か偽者かは不明だが、もし、本物の巡査、MPなら、当時は「無法警察」の世相だったとは言え、いかようにも罪は重い。

被害者の女性たちの人生は、その後、どうなったのか!生きて行くことに厳しい世の中ながら、女一人で生きて行くには、あらゆる障害が待ち受けていた。今時、信じられない話だが、新聞の“人生相談欄”には、大真面目に「処女でなくとも結婚できます…」なんぞという相談記事が出されたりした。“貞操観念”という文句もまだ生きていた時代だった。

犯され、生かされ、そして殺された

中篇小説にだって仕立て上げられそうな分量と、その行間に滲む痛切の

思い、また、思いのたけを込めた文章はとても優れたものだ。

もちろん、死の病いを前にしてのことで、「遺書」として記されているが、この作者の「敗者≡弱者」の側に立たされた者の「無念の思い」をわたしどもが汲み取ることこそが、「敗戦国の始末―日本人の遺書」としての意味が、この場合は付与され得るのではと思うので、やや、長文の引用となるが、心して読み進めて貰いたい。(※作者注一部行間の縮めなどで編集)

身を寄せていた京都の叔母宅から、傷心を抱いて、彼女は東京に戻ってくる。もはや、頼る者としてない状況に追い込まれる。

『「初めて見るパンパンといふものをそばでみる、何だか怖し』』東京に戻った時の不安な想いが重なり、街並みにも、時の流れにも、世にあらぬものを彼女は見た気がした。

仮り居した京都の叔母宅では、自分の身の上は何が起きたか？周りに説明出来るわけもなく、また、みんなの気配りのほどが、かえって、彼女には重荷になった。

闇の女、パンパン、進駐軍のG・I相手に「黒い春を売る女」たちのことだが、把握できるだけでも、全国で一万八千人はいたとされるが、その実数のほどは定かではない。

占領期、関東では「夜の女」、関西では「闇の女」と称したそうだが、わたしの年齢層なら、「パンパン」と言い慣らしていた。

仕事を探して、街中をさまよっている時に、トシコは、一斉の“パンパン狩り”に遭い、無理やりに、パンパンと疑われて性病検査をされてしまう。その結果、最初の暴行で淋病をうつされているのが分かった。病院治療のさなかに見たパンパンたちの実態、やはり、怖いものでも見るような眼で眺めていたのだが、退院後、ダンスホールぐらいいしか、職はなくそこに居付く。「食費共、夜具貸す」の文句に釣られた。戦争孤児の身、ともかくも、住むところを確保し、食べることを考えるのが先であった。ダンスの客は憎むべき人種であるはずのG・Iたち、踊っていればいいとタカを

括っていたばかりに、ここで、また、クリスマスの夜、酔ったG・Iの一人に、ダンスホールの隅っ処（こ）に追いやられてしまう。

回りを見ると、そんな連中ばかり。

ここはそういう場所でもあったのだ。

借り物の高価な衣装を「破られてもいいのか！」と、そのG・Iに心得たふうの台詞で脅かされた末に、犯すのを許した。ダンス衣装の弁償など及びもつかないこと、そんな金銭的な理由で、またも、G・Iごときに弄ばれた自分の情けなさに二度目の涙を流した。

『くたくたに疲れて踊るのが、クリスマスこの方馬鹿らしくなった。きれいに生きていかうとしたところで、忝心なしに墮落させられてしまうのに、そして、世間だつて誰もそうはみてくれないし：（中略）ここからわたしの転落ははじまった。みなさんが、私を責めるでしやう。私はたしかに意志のくじけた女でした。それがわたしの身をほろぼすことになったのは、この通りの事実です。しかし私は、私一人ではない、私たちのいく人かは、こうして自分をみすてたのです。私たちはどういはいはれようと、しかたないにしても、どうかこのやうなG・Iの暴力にも目をつむらなひで下さい』

弱い者同士で助け合うー日常生活をお互いに助け合う仲間の情にも纏る女に彼女はなっていた。身過ぎ世過ぎの世の渡り、忌み嫌っていた闇の女、それも、「立ちんぼ」と言われるストリート・ガールの一人に身を落とす。『私に、街でのたち方の注意をこまごまとしてくれたのが、エミちゃんとカズコの二人だった。カズコに連れられて、オフィスに泊り込んだり、しもたやの軒下をことわりもなしに拝借してショートを稼ぐことを教えたのもカズコだ。けれども、それから、半年たたぬうちに、カズコは敗血症で死んだ。たった一度、暴行されて赤ん坊を生み落とし、家をでてから、まだ、一年目だったという。つきあったからだの傷がもとだ。少しおくれて、エミちゃんも、G・Iの気紛れな変態遊びで、チツを怪我させられて、フトンぶつとんをぶつとん濡らして、あつけなく死んでしまった。この二つの死は、

私をかく然とさせた。しかし、私にはどうするすべもなかったとき、それは私を一層、絶望的にするだけだった。自分の明日の姿がそこにあると思ふと、私は捨て身になった。パンパンのからだは二年も持たないことも事実がしめしてくれていた。私はこの二人の友をおもって、その頃からだんだんG・Iをにくみだしたことをいひたい。けれどもそれはとてもその場まかせの感情にすぎなかったと思ふ』

G・Iどもが、オフィスにいるタイピスト女に手を出すのは当たり前のこと、また、愛人（オンリー）にした自分専用の女を他の男に金銭を取って遊ばせるなどの悪どいことも彼らは平気でやった。

G・I連中は純情な日本人の女の心までも弄んでいた。次々と遊び相手の女を調達しては取替えるのも彼らの常套手段であった。

同じような設定のもと、或る過酷な状況にトシコは遭遇する――軒家を構えて愛人を囲う―実入りいいG・Iたちがやる手なのだが、そのG・Iの愛人の女の一人にトシコも選ばれた。

この場に登場するロジャースというG・Iは、軍曹（サージャント）の位とされるから下士官では最高クラス、その分、金回りがよい男であった。

娘の親が認めぬので、呼び入れて住まわせているという「G・Iの愛人の家」に、自分が取り替わる機会を得て、或る日、トシコはそのチャンスに胸躍らせてやって来る。

『いくらも待たせずに、玄関が開いた。その物音にふとそちらをみると、ロジャースがでてきた後につづいて、今日は甲斐甲斐しくエプロン姿の彼女が見送りに出てきた。けれども、自動車の中の私に気付くと、あつと小さな聲を立てすつと玄関に入ってドアを閉めた。私はその可れんきを、やはり忘れることができないのだ』

『『新しいホステスがくるんだっていったら、彼女はわからないんだ。だから、英和辞書でホステスのところを指してみせたら、ああつて、それからやっとながっかりしていたよ』

私はそのときふきだした。何ヶ月も一緒に暮らして、「出て行け」っていはれても、何をいはれたかわからなひで、おろおろして、字引をみせられてさつと顔を青くするなんて、考へるだけであんまり間のびしててーと、自分の「幸運」に目がくらんでいた私は、それが彼女にとって、何を意味するかまるで考へてもみなかった。しかし復しゆうはめぐってきた』

『ところで随分と長ひ長ひ一週間だった。(中略)たうたう約束の日がきた。私は約束の五時半より三十分も前から、駅でロジャースを待った。(中略)時間きつちりにロジャースは車を走らせてきた。彼は私にエメラルドの指輪をプレゼントした。後方のシートはキーキや果物や缶詰で一杯だった。

彼は自動車を隣りの家の前に止めた。手廻しよく、この前、ガールフレンドに、うちあけ(※打ち明け)たら、鍵をこのうちに預けるやうにと話しておいたのだ。(中略)私達は開け放しの門を通過してドアの鍵を開けた。一瞬後の「悲惨を夢想だにせず。――玄関を入ると眞つ暗で何も見へない。

ロジャースはがたんと何かに蹴つつまづきながら、「この邊にスイッチが」と手さぐりをしていたが、やがて、ぱつと明るくなった。

私はきやつと飛びのいた。目の前に、誰かが立ちふさがっていた。私は夢中でロジャースにしがみついて、こわごわとふりかえった。

途端に、私は体中の血が、じいんと凍るかと思はれた。

それはぶらさがった彼女だった。

玄関の鴨居にだらりとぶらさがっているのは、遠くへ引越した筈のロジャースのガールフレンドであったのだ。玄関にはさつきロジャースがつまづいて大きな音をたてた踏台がころがっていた。彼女はさうしてロジャースに復しゆうしたのでしやう』

### 暴力連鎖の行き着くところ

何でもありのパンパンになった日常の中で、いつの間にか彼女は「飼

慣らされたパンパン女”にと身を変えてしまう。何でもご主人様の言う事をきく愛人役を、そつなくこなすことで、ひとまずは、彼女は安定した暮らしを手に入れていた。

『五月半ば過ぎだった。(中略)その日もハンテングをやるうすぐ話がきまった。「ハンテング」と言ふのはこの悪仲間のフチャョーで「女狩り」短くしただけのことだった。この「女狩り」を、その当時、私は手助けさせられていた。そうなるには何もかもおしまひだった。さあ、つつみかくさず、その話をしやう』

『この邊はずっと駅から離れているけれど、東京から近いところから、今でも、縁故や、買出し時代の知り合いを辿って、大人数の世帯など、相変わらず、野菜の買出しにきていた。私達のつけ目はそれだった。ロジャーズの運転するジープに私達二人の乗ったのはおとりなのだ。ジープは駅から適当に離れたあたりをぐるぐる走り廻った。(中略)ちやうどおあつらえ向きに、駅の方へ歩いて行く女の子を後ろから追ひこした。リュックを背負って、買物かごをさげたその顔ースピードを落としてすれ違いざまに、はっとこちらを向いた顔は、実に素敵だった。ジープは急ブレーキをかけた。私は前のシートから、半身を乗り出すやうにして、「駅までいらっしやるのなら、お乗りになりませんか？」

と、猫なで声で、呼びかけた。

かうして私はおそろしいことをまた仕出かすことになったのだ。彼女は一寸躊ったが、女が二人乗っているの、安心して、それに駅まで、小一時間は歩かなければならぬので、「すみません」と、小さく札をいって、リュックと買物かごを入れてから、ローズ(※作者注ーロジャーズ)の脇に小さくなって坐った。(中略)』

その後、ジープはG・Iどもの悪の根城にと着く。何が起きるのか？十代半ばと思われる少女は少し不安そうな顔付きになった。

『待ちかねていた、ヘイズとミラーは、獲物のすばらしに、声を上げて喜

んだ。こわさに口もきけない女の子をロジャースと三人がかりでうちに抱へこんだ。私はそれを当然のやうに眺めていた。もし私がかつて強姦された当時の苦しみを少しでもおもひかえしたなら、こんな手助けはできるはずがなかったのだ。それなのに私はそのうえ直接、手傳ひさえしてしまつた。そして、服を脱がせる段になって、はじめて、女の子は悲鳴をあげてあばれだしたが、すぐ用意したハンケチを口に押しこんだ上から、タオルでしばつて、私達二人も髪をつかんで、床に押しつけて、下をはぎ、上をはいで、いつものやうにベッドにしばりつけた。

このやうに私はやったのだ。

両腕を鉄ワクに通した紐で縛るのは簡単だった。脚はそれこそ死に物狂いで縮めて、五人がかりで手こずつたが、脚の間に紐を通して紐の端をワクに縛り、ぎりぎりひっぱつて、たうたう開かせた。腰の下にぎうぎうクツションを押し込まれて、頭下がりになつた素裸の肉付きかげんは、女でもふるいつきたくなるほどすてきだった。まして、男達ときたら、まるで眼の色が変わつて、まるで親のかたきうちのやうな顔……。不思議とかうしたクジ運に強いロジャースが五と四の目が出て一番になった。

ロジャースは踊り上がつて喜んだ。

首を少し動かせるほかは、ぎつしりと縛られて身動きもできない女の子の、堅くつぶつた眼から、涙がとめどもなくあふれるのが、如何にも初々しかった。

さすがの私も私のあさましさを、首をふつて忘れやうとした。私はそれほど盲目のけだものになつていたのだ。だからこそ私はこのやうな一切合切を告白する（中略）』

『…そして最後にヘイズがすむと、ロジャースは縛つていた紐を全部とひて、口を塞いでいたハンケチをはずした。抗ふ気力もやく、手脚を揃えられて、長々と横たわつた体を、私は改まった気持ちでしみじみと眺めた。こんな場合でさえも、美しさといふものは、何かしら、威厳のやうなもの

がにじみでて、人の心を打つ。それが、女神をガールフレンドに持ちでもしたかのやうな気持ちに男をさせるのだろう。ロジャースはコーコツとした顔つきでいく度さうしても力なくずり下がる手足を、自分の体によりそはせるやうにして、深々とキッスをした。両手をそろへて口を開けさせて、舌を吸ふのが、頬がぺこんとなるのでよくわかった。頬がもとにもどった。ああまた、と私はみていた。そのときだ。突然彼はどの奥から、何ともいいやうのない奇妙な声をだして、体を僅かにそらし、それからどつとベツドからころげ落ちた。

きちんと胸をそろえて、口のまわり中血だらけになった少女は、その口から、小さな肉きれを吐き出した。と思ふうちにつずけて、それよりも少し小さな肉きれを沢山の血と一緒に吐き出した。

男の舌をかみ切り、また自分も舌をかみ切ったのだ。

棒立ちになったまま、私達は言葉もなく、もう胸も動かなくなった白い体を何ともいいやうのないおそれにうたれて眺めていた。

私はわつとその場へ泣きふした？なぜだったかわからない。ロジャースの屍をみむきもせず、いつまでも泣いていた私を、G・Iたちはもてあましたにちがいない。しかし、ながひあいだ、誰も一言も発しなかった』

#### 血涙の日記が遺書になった

『ロジャースに死なれたのをきつかけに、私の運―というより、私といふ「パン。パン」女の一時的な気紛れと、「安楽？」は、それも仕合せと呼びたいやうな明け暮れは、―まっすぐに下り坂に向うことになった。ロジャースとのバカ遊びの頃が、とにかく、私のパン。パン生活のなかでは絶頂（注―作者傍点）だった。そして、二度と帰ってはこないそんな時期だった。（中略）ロジャースの死にざまから受けた後味といい、とてもまともな半生がのぞまれるとは思へなかつたが、それが手袋でも裏返すやうに私に、

それほど早くめぐってくるとはやはりその頃、夢にも思はなかった。

だが、私という女がいつもG・Iを心のそこでは憎悪しながら、しかも、「パンパン生活」の習慣のなかで、日本の娘の暴行されるその手助けにまでおちこんだとき、私の運命は当然きめられていたのだ。いまになっておもへば、くるべきものが当然やってきたにすぎないことを、この後悔などといふ生やさしい言葉でいひあらわせぬくやしきのなかで私は卒直に受け取っている。それより私は強姦され自殺した、あのきよらかな少女にわびたい。その決然とした「死」が、いまだどんなに私を上げますことか！そんな少女の死こそが、私にみにくさをさらださせてくれる。彼女よ、私を許して……』

手記では反省の文句は書き記せるが、トシコの生きるための格闘は生易しいものではなかった。生活の手立てを失い、かつ、性病にも取り憑かれていて、他の女たちがそうであったように、「薬代」を稼ぐためのG・I漁り、荒れた日々にとまっていった。

G・I連中の遊び気分も半端ではなく、或る日、トシコは騙されてのことだが、いわゆる“ワンワンショー”と言われる大型犬相手の相手役にされる“実演ショー”にまで引つ張り出されてしまう。半ば、暴力的に強制された末のことだったが、見物客から見物料を徴収する者がいて、実入りの金にはなった。“薬代”を稼ぐために、こんな役を引き受けた。そのうち、その飼い犬を盗み出し、もっと歩合のいい“別の金儲けの口”に加担する役目を負う。

盗み出した犬を裏道へと導き出す途中、引き主の股間に顔を近づけて性臭相を示す犬に、たちまちに、彼女は自己嫌悪に陥った。結局のところ、彼女は犬を連れ出す道すがら、いたたまれなくなつて犬の首を両手で締め殺す。殺す行為―誰を殺したのか。自分自身でもあり、GIたちでもあり、敗戦国そのものの自堕落ぶりへの怒りでもあったのだろうか。

心の均衡を失い、パンパン仲間同士のリンチにも平気で手を貸す。自分

自身も商売できぬようにと、局部をライターで焼かれるリンチも受け、すんでのところ殺され掛けた。

日本人と結婚の機会も得るが、「このパンパンめ！」と当たり前のように罵られて、三ヶ月も持たずに離婚する羽目となる。

『…こんなことを、してみたかったのが間違ひのもとだった…』と、その短い結婚生活について、手記では述懐している。

なおさらに、荒んだ日々の中に、トシコは身を置いてゆく。孤独と絶望と、生活不安、そして、たしかな病魔の登音も耳にしていた。

その後の「七年ほどの間の出来事」は、ここでは伝える紙数がないが、手記式遺書を書き記す決心をした理由を知る手立てになるかとも思うので、「最終稿・件りの一文」を記す。

『私は、診察ぬきで注射するいきつけのドクターを疑った。もつとも、きかない、きかないといふのは私だけでなかったけれど。私は大きな病院で、しっかり診てもらうことにした。長いことかかかって、ドクターは診察をおえた。私もほっとした思ひで——ほんたうに人間並みに診察してくれたことがよくわかるので——うれしい気持ちになって、「どこが悪いんでしやうか」とおとなしくたずねた。そんなちよつとした親切が、ひどく身にしみてうれしかった。人は笑ふかもしれないが——。

「さあねえ」ドクターはせつせとカードに書きこみながら、考へ考へいつた。私は不安だった。「まあ、一口にいえば、全部ダメだね。そろそろ、年貢のおさめ時がきたってところかなあ」あっさりいつてのけるドクター。まだ、三十少し過ぎたばかりのドクターの無雑作な言葉の中に、「この女も！かわいいそうに」って響きを私は感じた。私はうけた衝撃をやつとおさへて、おっかけるやうにたずねた。

「全部って？何ですの？」

「腹膜、子宮、卵管、直腸」

ドクターは、紙に字を書いてみせながら私の顔をみた。そのときまでド

クターはうつむいていて、そのときはじめて、まともに私の方をみたのをおぼえている。

「ほかに知っている名前、何かあるかね。とにかく全部だよ」

（作者注―※その後、入院して治療）

『だがさうした日は、いくらもつづかなかった。私の下半身は、脚の方にかけて、ぎりぎりしつきさすような痛みが走り出した。その痛みのために、私は歩くとき、まっすぐ体をおこすことができなくなった』〔※作者注―再度の来診〕私はいよいよ本当の年貢おさめかなと思ひながら病院へ行った。（中略）私はそこで、バイ毒でなくて、つぶつぶや痛みのもとは、皆ガンのせいだといはれた。（中略）それでもいまは「ガン」の治療法も進んでいるから、入院して、しつかり治せば大丈夫なんだからと励まされて、私は、よし、ここまで頑張ってきたのだから、もう一度元気に生き返ってやろうという気になった。それほど私は死にきれない女だった。が、いまはちがう。私がこうしてお話できるのも、死を身近なものときとっているからにほかなりませんし、この私の死の意味を、そんなものがあるとしたら私ははつきりさせたいとおもっているんです……』

『※作者注―何度かの入退院のあと、二十七年の一月にやっと入院した（中略）：入院は、まるで修学旅行のやうに楽しかった。（中略）何もしないですむといふことだけでもすばらしいのに、ほかの人と変りなく、私にも親切な付添ひがいてくれる。私は、子宮も、チツも、プシイも、アスホールも、きれいさっぱり取ってもらって、さっぱりした。私は京都をでていらい、何年目かでしみじみと人間らしい気持ちになれた。けれどそんな私を待ちうけているのは死の門でしかないといふ。そんなあきらめきれないひ恐ろしさが私をせめつける。しかし萬一、命が助かることがなひとはいへない。私はできることなら退院をのぼしたい位だったけれど、やっぱりマネーが足りなくなって、退院日を頼んで縮めてもらったくらいだから、とても、そんなまねはできない（中略）』

『きりとられたプシイの下に、赤いオデキができた。それから、口の端にも、中にも、同じやうなオデキができて、いつも湿っていた。

私は病院に行った。診断はバイ毒の二期だった。(※作者注―ガンと梅毒に罹患の状態)

このまえ退院したばかりなのにと、私はむっとして、このまえの入院のときはわからなかったのかと問ひつめた。ドクターはあっさり無雑作に、わかっさていたけど、君にはとても払ひ切れるまいと思つて、わざと君に話さないで、一応の手はうつてみたのだが、やっぱり駄目だったんだなあ、といつてのけた。

もう、私には入院費を稼ぎためる元気はない。それに、口元にオデキができては、「私はV・D・(性病)です」といふ看板をさげているやうなものだ。ドクターは「ガン」は二年の寿命などいふことはない、と折紙をつけた。けれども、割合（ま）かすこと（う）まくな（い）彼は、そ（う）い（ひ）ながら、まんざら、それが嘘でないことを私に悟らせた。

もう、どう泣かうと、騒がうと、あと一年ない命だ。いまさら、気休めの入院をしやうとも思わない。

とはいうものの、やはりならうことなら、それまで、余り苦しまないで日を送りたいものだし…これがせめてもの私のおもひ。私がかうして「お仲間」のあわれみにすがつて生きる身になった。これが私の話できる一切です。私…年でいえばまだ二十三といふことになる私だけでも、私はやはり、「長生き」しすぎてしまったやうだ。

幾山河越え去りくれど いずこにも

しかばねさらすべき場所もあらなく』

辞世の句までも遺している―短い一生の、不幸な日々の心情の様が滲み出ていて、何とも憐れだ。死ぬ覚悟なんて出来るはずもなく、何より、一

人身の心細さが伝わって来る。

あくまで、推察するしかないのだが、「日本の貞操」のこの本が出版された時、「仮名小野年子」は、自分の記した日記帳が世に出るということは想起していなかったのではなからうか。出版年月日から本人の手には渡っていない可能性が大であり、そうだとしたら、空しい想いを抱きながら、ただ、彼女は病床の日々に“わが生存の証・始末の記”として、血の滲む一文を綴ったということが言える。

「死に臨んで訴える」とサブタイトルが付された冒頭の“はじめに”の一文を追ってみよう。死を覚悟した上での感情の揺れ、それゆえの激した文も何ヶ所かに見受けられる。その一部でも、ここに記すことにして、小野年子の「痛墳の想い」の締め括りとしたい。

『さいわひ私の手元には六冊の手帳がある。この手帳を書き写しながら、私は私の二十三才の生涯の破滅のみちすじを辿っていかう。そのすべてを少しもかくすことなく、ここに書きしるそう。私の訴へはきつとほそく、みだれがちになるだろう。しかも地獄のやうな「パン・パン」生活に麻痺してしまった私の感覚は、きつとズレているにちがひないのです。いいえ、ズレているといふより、恐ろしひ心と、身体の浪費にむしばまれていることは、私の病気によっても証明されていましやう。

けれども、私はそれらの障害をこの焦慮の羽搏きによってとびこへることができるはずです。それにいまになっても、おもひかえすごとに灼けつくやうな痛みをともなつて私をつきやる「最初の責苦」の記憶は、私の復しゆう心をいよいよ燃えたたせずにはいけません。こういうしだいです。

すべての終了する瞬間の、私といふ人間のこれはいまわのあがきでもあるのでしよう。燃へつきやうとする炎の一ゆらぎに、私はいま私のおもひのありつたけを托すのです』

(※作者注―被害に遭った時、彼女は十六歳頃、そして七年が経過)

『私はおさへられない自分にたいするあわれみと怒りがこみあげてくるの

をどうしやうもない。私といふ汚された女の血を吐く苦しみを、幸福な日本の女性たちにせめて少しでも告げ知らせたい。

私の洗いざらひの告白には、そして憎しみがこめられるでしやう。

だが、私は復しゆうを心に秘めた屍なのだから、それは当然でしやう。わかってくれる人だって、きつとあるに違ひない。たとへどういはれるとしても、私自身これ以上、だまって死んでいけるだろうか？』

これらの戦慄すべき「G・Iどもの暴挙の記録」は、一部を伝えているに過ぎない。手記の公表を思い立った編者水野浩がその動機のほどを記している。それによると、

『私が、この現實を正しく知らせるために、彼女たちの生活の手記の公表のほかないとの考えを抱くようになったのは、一昨年（廿五年）、まだ朝鮮事変が始まる前のことだった。当時は、このような性質のものが、公表され得る可能性はほとんど考えられなかった。二、三の知人に洩らしたところ、口を揃えて、「やめた方がいい」と、忠告された。ある一人は、別にそのような考えは微塵もなく、ただ、兵隊と女が連れだって歩く姿を、街の風物詩として、ほんの一駒として、一、二行触れた一文を公けにしたため、占領軍目的違反の罪に問われて、投獄されたことを物語った。さすがに、有罪の判決までは下りなくて、重労働を辛うじて免れたとのことであった』とある。この一節の事由についての論拠を示す。

『GHQの言論統制は一九四五年十月八日に、「自由の指令」なるものを発令、思想・言論統制法規の廃止を命令すると、翌日から朝日新聞、毎日新聞、読売報知、日本産業経済、東京新聞の在紙五社に対して、事前検閲を開始した。GHQは「言論及び新聞ノ自由ニ関スル覚書やプレスコード、ラジオコード等を発して民間検閲支隊などにより地方紙も含めた新聞、などあらゆる出版物、学術論文、放送、手紙、電信電話、映画などへの検閲を行った』というのがその事由の根拠になったことであった。

占領期当時、ジープに同乗し、通訳警官として市内パトロールを行っていた、通称MPライダー原田弘は、当時の新聞検閲について、その間の事情を示す話を述べている。

『米兵が強盗を働いても新聞記事にはならなかった。かりに記事になったとしても「犯人は背が高く、色が黒かった」としか書かれない。犯人は米兵であったと書くと、プレスコードにひっかかってしまうのだから、死者の出るような交通事故が起き、新聞記者が現場に駆けつけても、それが米軍関係の事故と分かると、取材をあきらめてさっさと帰ってしまうことが多い。』（中略）米兵の不祥事、犯罪が起こるたびに警視庁は「こういう場合はどうしたらいいか」と、いちいちPMO（憲兵司令部）に問い合わせてきた。米兵の強姦を制止するため、ピストル使用してもいいかと聞いてきたこともある。するとPMO側は、（強姦を制止するためにピストルを使用するのはかまわない。ただし、現在、日本は占領下である。またアメリカは世論の国であるから、その点を充分に考慮して使用されたし）などと返答していた。それは使うなというのも同然だ。講和以前の日本警察は、事実上、進駐軍将兵には手出しができなかったのである。』

六大都市の“闇の女の数だが、推定二万四、八〇〇人”といわれた。（昭和二年一〇四日付毎日新聞資料）。その境遇を分析した結果、両親のいない者六四％、戦災者、引揚者、海外引揚者の子女、住まいのない者三、六〇〇名、貧しさのためにこうなった者四、四〇〇名となっている。ここでは、当時の実態としての数字だけをあげておく。

#### 白旗バンザイ降伏始末記

戦勝国であった進駐軍、本来は治安維持に努めるのがその責務であったのに、彼らは何をやったのか？「敗戦国の日本人」は、どんな扱いを受けどのような事件に巻き込まれたのか？いまさらながらに、「深い戦後の闇」

があつたことを思わざるを得ない。

サイパン島での邦人たちの受難記の一つを、ここに掲げておこう。(※当時、国策の一環としての南洋の島々に興産事業で多くの日本人が移入して、砂糖きびや、ゴム栽培、また、鉱産物資源産出・加工などの仕事に従事していた)非現実の現実そのものの話がここにはある。米軍は日本人に対し、戦争が終わり、サイパン島が米軍の手に落ちことを告げ、隠れている日本人に対して投降を勧めた。

実記としては昭和二十年七月七日サイパン島は全員玉砕を遂げて、指揮官も自決しており、もはや日本軍には抵抗能力はなく事実上の「敗戦」が確定していた時点での話となる。

玉砕後も、なお、一群の兵士たちはちりぢりばらばらになつた状態で応戦に努めていたのだが、この場面を目撃した彼ら兵士には、もはや、応戦能力は無く草むらに隠れて、呆然と同胞たちの酷い惨劇の様を見つめていた。『米軍の投降呼びかけの文句は、「投降すれば、立派な衣服や、美味しい食料も十分に与えます。もはや大死することはない。今や死んでも花実は咲きません。みなさんの投降を待っています」(中略) 投降呼びかけの放送とはうらはらな、人道上許し難い残酷な行為を شدした。(中略) :そこへ、三方から追い込まれた数百の住民が逃げ込み、捕らわれの身となつた。幼い子供と老人が一組とされ、滑走路(※作者注―旧日本軍飛行場)の奥へ追いやられた。婦女子は全員、素っ裸にされた。そして、無理やりトラックに積み込まれた順にトラックは走り出した。婦女子全員が、トラックの上から「殺して!」「殺して!」と絶叫している。その声がマツピ山にこだまし、次つぎにトラックは走り出し、彼女たちの声は遠ざかっていった。なんたることをするのだ。(中略) この悲劇を見守っているしかなかった。この婦女子はその後一人として生還しなかった。婦女子が連れ去られたあと、今度は滑走路の方から、子供や老人の悲鳴があがった。ガソリンがまかれ、火がつけられた。その悲鳴、「米軍は虐待しません。命が大事です。

早く出できなさい」の投降勧告の意味はなんだったのか。常夏の天空をこがさんばかりに燃える焰と黒煙。幼い子供たちが泣き叫び、絶叫する。断末魔がある。残酷な行為は凄絶をきわめた。火から逃れようとする子供や老人を、周囲にいる敵兵はゲラゲラ笑いながら、また火の中へ突き返す。かと思えば、死に物狂いで飛び出してくる子供を、再び足で蹴り飛ばしたり、銃で突き飛ばしては火の海へと投げ込んでいる。二人の兵隊が滑走路のすぐ横の草むらに、置き去りにされて泣いている赤ん坊を見つけ出し、両足を持って、真つ二つに引き裂いて火の中へ投げ込んだ。「ギャッ」という悲鳴。人間がまるで蛙のように股さきに殺されてゆく。彼らはそれを大声で笑った。無気味に笑う彼らの得意げな顔が、鬼の形相に見えた』(※⑥資料「我ら降伏せず」田中徳祐―復刊ドットコム刊)

この書における田中徳祐氏の発言にも注目する必要がある。「はじめに欄」に記された文には、次のような指摘が為されていた。

『私は、昭和二十二年、帰国するとすぐ、この実戦記を書いた。散華した戦友とその遺族、民間人のためにも、残さなければならぬ、と夢中書いた。「今日の日本」という雑誌にその一部を発表した。だが、GHQの検閲を受け、ズタズタに切りさかれて、ただの戦争報告にすぎなくなつた。あげくの果て、「以後の発表まかりならぬ」というきつい命令までうけ、原稿は書斎に眠ったままとなつた。遺族の要望もあつて、七年ほど前に発表の機会にめぐりあつた。だが「あまりにショッキングすぎる」といわれて再び陽の目をみるこゝろがでなかつた。玉砕というあまりにもショッキングな事実を、いまさら、ということもあつたらうし、本当の戦争の怖ろしき、悲しき、残酷さを知らなかつたからかも知れない。しかし、私はただ事実を、体験を、こつそり持ち帰つた作戦図をもとに、書いたにすぎない。(後略)』

この復刊書には昭和五十八年七月七日の奥付が付されている。内容が酷すぎると最初に某出版社から拒否された日時は不明である。

この筆者は、その後、昭和二十二年から五年間に亘り、公職追放の処置も受けた。

何よりも、この「民間人虐殺」の事実については、彼等が非戦闘員であることを念頭におかねばならない。本来は「連合国軍側の戦争犯罪」として告発されるべき性質のものだが、もはや忘れられ、闇の彼方へと没した現実しか今はない。そう告げる事事態とて空しい。

あくまで「戦後の蛮行録」の体裁でわたしの稿は進めているが、捕虜の扱いについても、残虐行為が多く記録されているので、あくまで「捕虜」として、或いは、もはや、交戦能力を失った戦闘員としての立場にある者に加えられた蛮虐行為についても、この章の始末記の締めとしての意味も含めて触れておく。

史上初、ニューヨークからパリまでへの大西洋横断、単独飛行に成功した飛行家にして、かつ、戦時下には空軍の顧問も務め、戦地を巡ったことのある、チャールズ・リンドバーグが残した著。「第2次世界大戦日記上、下巻 新潮社刊※註資料⑦」に記された一文より。

『…丘の斜面を降りて行くと、峠に差し掛かる。そこには一人の日本軍将校と十人か十二人の日本軍兵士たちの死体が、切り刻まれた人体だけが見せる身の毛のよだつ姿勢で四肢を伸ばしたまま、横たわっていた。彼らは峠の防衛線で倒れ、死体は埋めずに放っておかれたのである。戦争は数週間前に行われたので、熱帯地の暑気と蟻とがそれぞれの働きをしていた。頭蓋骨を覆う僅かな肉片だけが残っている。ある場所では一個の遺体に二つの首が並んでいるかと思えば、他の場所では遺体には首はなかった。なにかには四肢がバラバラになり、身体のかげらしか残っておらぬ死体もあった。そして同行の将校が言ったように、「歩兵はお得意の商売にとりかかったようだ」、つまり、戦利品として金歯を悉（ことごと）くもぎとつというのである。（中略）』

『…将校の話によれば、穴の中の遺体を「ブルドーザーにかける」前に、

何人かの海兵隊員が遺体の間に分け入り、ポケットを探ったり、金歯探しに棒で口をこじ開けたりした。金歯を仕舞い込む小袋を持っている海兵隊員たちさえいた。「兵が耳や鼻を切り取るのは、面白半分仲間に見せびらかせるためか、乾燥させて帰還するときに持ち帰るためですよ。日本兵の生首を持っている海兵隊員まで見つけましてね。頭蓋骨にこびりつく肉片を蟻に食わせようとしたのですが、悪臭が強くなり過ぎたので、首を取り上げねばなりませんでした」行く先々で聞かされる似たり寄つたりの話だ。

(中略) 「ま、なかには奴らの歯をもぎとる兵もいますよ。しかし、大抵はまず奴らを殺してそれをやっていますよ」と、将校の一人が言い訳がましく言った』

次に、英軍の捕虜への処遇問題の一例を示す。『英国軍はひどいことをします』と或る告発本ではその実態が報告されている。

前記のチャールズ・リンドバーグも、その著書の中で「われわれ兵士達は、日本人捕虜や降伏しようとする兵士達を射殺することなんてなんとも思わない。彼らはジャップに対して、動物以下の関心しか示さない」と、自国兵士たちの“日本人観”を述べている。

次の証言を残した人文科学者の会田雄次（元京都大学教授一九一六—一九九七没）は、ビルマ戦線に従軍後、二年間ほどの捕虜生活を体験した一人、この人物の独自のインテリジェンス、英軍観などにも注目したい。

『私たちはイワラジ収容所のずっと河下の方に一時いました。その中州に戦犯部隊とかいう鉄道部隊の人が、何百人か入っていました。泰緬国境でイギリス人捕虜を虐待して多数を殺したという疑いです。その人たちが本当にやったのかどうか知りません。イギリス人たちはあの人たちは裁判を待っているだと言いました。狂暴で逃走、反乱の危険があるというので、そういうところに収容したのだそうです。でもその必要はありませんでした。私たちは食糧が少なく飢えに苦しみました。ああ、あなたもそうでしたか。あの人たちも苦しみました。あそこには毛ガニがたくさんいます。

うまい奴です。それをとって食べたのです。あなたもあのカニがアミーバ赤痢の巣だということを知っていますね。あの中州は潮がさしてくると全部水に没し、一尺ぐらいの深さになります。みんな背囊を頭に乗せて潮がひくまで何時間もしゃがんでいるのです。そんなところですから、もちろん薪の材料もありません。みんな生のままたべました。

英軍はカニには病原菌がいるから生食してはいけないという命令を出していました。兵隊たちは食べても危険なことは承知していたでしょう。でも、食べないではいられなかったのです。そしてみんな赤痢にやられ、血便を出し、血へどを吐いて死にました。水を呑みに行つて力つき、水の中へうつぶして死ぬ。あの例の死に方です。監視のイギリス兵はみんなが死に絶えるまで、岸から双眼鏡で毎日観測していました。全部、死んだのを見とどけて「日本兵は衛生観念不足で、自制心も乏しく、英軍のたび重なる警告にもかかわらず、生ガニを捕食し、疫病にかかって全滅した。まことに遺憾である」と上司に報告した。とにかく英軍は、なぐったり蹴つたりはあまりしないし、殺すにも滅多切りというような、いわゆる「ヒューマンイズム」とか合理主義に貫かれた態度で、私たちに臨んだらうか。そうではない。それどころか、小児病的な復讐欲でなされた行為さえ私たちに加えられた。(中略)ある見方からすれば、かれらは、たしかに残虐ではない。しかし、視点を変えれば、それこそ、人間が人間に対してなしうるもつとも残虐な行為ではなからうか?』

『…日本人とイギリス人—ヨーロッパ人とどちらが残虐であるか、どちらがより正しいかを決める共通の尺度はないと思う。日本軍捕虜に対する英軍の扱いの中にも、私たちには、やはり、これはイギリス式の残虐行為ではないかと考えられるものがある。そして、英軍の処置のなかには復讐という意味がかならずふくまれていた。(※⑧資料「アーロン収容所 会田雄

次」より』

## 戦争裁判の始末手記 ①

戦さに負けた厳しい現実を、もつとも苛酷な仕打ちとしてその身に叩き込まれたのは、報復の名の下に“戦争責任なるもの”を、自らに問われた皇軍の兵士たちであった。

捕虜となった末に、戦犯容疑で抑留、そして取調べ、戦争裁判へと駆り立てられた者たちの“無残な記録”も史実の一つとして、記憶に止めておく必要がある。

戦争裁判におけるA級戦犯とは：侵略戦争の計画・開始・遂行など「平和に対する罪」を犯したと認定された者を指す。28名起訴、7名死刑、18名終身禁固刑、2名裁判中に死亡、1名精神鑑定で公判停止。

BC級戦犯は、捕虜虐待などや、殺害・虐待などの罪を犯した者とされるが、BC級戦犯に対する裁判は、「連合国各国」が東京以外の地でも軍事法廷を開いて裁いたので、実数は不確実とはされるが、対象者五千七百人余に対して、死刑九百三十四名の数字が示されており、死刑判決を受けた者が多いのが特徴。

「戦争裁判の実相 巢鴨法務委員会編」(※註資料⑨)

昭和二十七年に初版が刊行された、膨大にして詳細なる日本人側からの裁判記録で、後々の世までも評価されるに足る内実を備えた書である。

およそ、百四十数名の「本人記名の手記」が、この「戦犯裁判の実相の書」のページには収められ、記録されている。

戦争犯罪者として区分され、裁きを受けることになった運命を負った者たちの手記は、裁判に対する「不明、不公平さ・取調中の非人道的な扱い・蛮行、残虐行為」の数々などを切実に訴えている。この手記に目を通すだけでも、戦勝国の名の下に行われた戦争裁判の理不尽さが浮かび上がってくる。真実の声がここにはある。

その中で、数例のみを挙げるのは、それこそ、不公平とも言うべきもの

だが、なるべく、文章も含め、簡略にして当を得た内実の手記を、ここでは、再現するように努めた。

『ジャワ 十二年』

西田象三 五八才 広島県

(一、戦犯に問われた事件の経過などについての項目は省略。

(\*原文のまま)

二、連合軍の指揮下にある吾々日本軍に対し、「命令指示に応じざる現地人は女子供でも直ちに射殺すべし」と数回督促せられた勿論日本軍にて之を実行した者一名もなし。彼らは進駐の途上にある部落に対して敵の有無等眼中に無く先ず集中射撃を滅茶苦茶に加へつつ前進するのを常態とせり、又インドネシアの俘虜住民等逮捕連行する時は殆ど半死半生の状態に叩き付け後実施するを常とし而も十歳に満たぬ子供迄監獄等に入れありしを屢々(しばしば)散見す。自ら斯くの如き暴行をなしあるに不拘、(かかわらず)日本軍の戦犯行為として原住民を一つ撲つても(これが刑事犯罪者の場合)五年十年の刑を科し或ひは逃走せる俘虜を軍法会議にかけずに射殺したる故を以って死刑を宣告する等を敢へてす。

拷問を受けたる例

私の取調官多数ありし中に和蘭本国より来れる警察官と云はれるスオーデンなる者、最も非道の人物にて昭和二十二年の初期答弁が気に喰はぬとて殴られ歯を一本折り緩む。(後まもなく脱落)(中略)矢張り思ひ通りの答弁せざりし故を以って顔を殴打され出血しつゝあるのを炎天下無帽で立たさした事もあり、又死刑となりし〇〇氏(※作者注―名前は伏す)は真ッ裸で十日以上も蚊の多き独房に入れ放す。之は別の調査官なるも矢張り死刑となりし〇〇通訳(名前は伏す)は糞壺に首迄つけて数時間放置した事もあり其の他の例も数多し』

八月十五日の終戦の大詔によって米軍に投降したルソン島の日本軍は十万人を下らなかった。これらの将士の大部分は敗戦に伴ふ食糧欠乏の疾病に悩みながら辛うじてラグナ州のカンルバの米軍収容所に辿りついた。これらの将士に対しては、米軍としては当然十分な給養と患者に対して親切な手当てが施されるべきであった。（中略）（※注作者―入所早々に食糧他の所持品、私有物一切が没収されて丸裸状態、医療品も充分あると聞かされていた）携帯品の中には飯米や乾麵包や乾肉なども入っていた。（中略）将士はこの言葉を信用して自分の所有品を殆ど提供した。ところがキャンプに入つて、そこで与へられたものは一口で吸へる重湯粥とコップ一杯の汁であつた。人々は野草を漁り、食器に附着している粥の汁を犬のやうに舐めた。来る日も来る日も空腹の連続であつた。そのため栄養失調の人と患者がバタバタと倒れていった。その数は二百や三百ではなかつた。墓地の墓標は部隊が到着する毎にその数を増した。死亡者は二万に達したと云はれてゐる。米軍としては食糧の輸送と医療品が準備が間に合はなかつたと云ふかも知れない。然しそれだからと云つて二万に近い人々が飢へと病気で倒れた責任は免れることは出来ない。（中略）仮に所領が間に合はなかつたと云ふことを認めるとしても、大半の将士が帰還して半年を経た後の一九四六年一月も尚三度々々が重湯粥で人々が飢餓に瀕してをらねばならぬと云ふ理由は成立しない。それは故意であるか復讐であらねばならない（後略）』

『アンボン 十五年』

森田正一郎 三三才 和歌山県

昭和二十一年四月二十八日、モロッカ群島中のセラム島「ビル」と云ふ街に蘭印当局より約百五十名の陸海軍人及同軍属の出頭を命ぜられ「ビル」街の栈橋に着いた私共は全く飢えた猛獣の群れに投げ込まれて子羊の如く

無念の涙をのんで彼等の為すが俛に身を任さねばならなかった。船が着くや否や一斉に自動小銃を構へた兵士達は船中に飛び込んで来た。そして我々を銃や棒で棧橋上に叩き出し各自の被服等の携行品を片っぱしから奪取し残されたものは古い軍服や破れた下着類で目ぼしいものは殆ど奪取され、其の日の着換へもない者が出た。棧橋上に叩き出された我々は黒山の如き見物人弥次馬の中で、反感に燃えた蘭印兵士より、鉄拳、銃床等で気絶する迄撲られ海中に突っ込まれ軍靴で背や横腹を蹴られた後、未だも撲られ乍ら駆足で船の荷物をトラックに運んだ。(中略) 収容所に入るや否や直ちに留置場に閉じ込められ全裸の俛、身体検査を受け早正午を過ぎていくのに昼食も与へず作業場に連行(中略) 作業中も監視兵から銃で撲られ井戸に突き落とされ乍らも全く無我夢中で働いた。この日撲られない者は殆どなく如何なる暴行を受けても何等の術もなく絶望の毎日を送った。夜間は一五坪五名の割合で扉を閉め切った上に数個の便器を持ち込み悪臭の中で寝なければならず交代で這入って来る警戒兵の物資の強要に応じなければ戸外に立たされ銃剣を突き付けられ強迫された(後略)』

『ボルネオ バンゼルマシン 二十年

平野重治 四五才 長崎県

○未決収容中虐待を受けた事実

一、戦犯容疑者として拘禁され少量の流動食と毎日の強制労働に服し再三武装警戒兵のなぐり込みによって物品の略奪殴打が行われた。

二、一九四六年三月蘭軍に移管されてより益々食糧は低下され、毎日強制労働に服した。勿論雨天の日も働かされた。週一回は必ず首実験があり、血を見なければ其の日は収まらなかった。昼食もなくジャングルを切り開き、レール敷設伐材及運搬等に終日、鞭で追い立てら恰(あたか)も地獄図であった。(中略) 吾々の憔悴はその極に達し遂に熱病に冒さるゝに至り四十日間全く(※作者注―本人) 重病人となった。少々快復後取り調べが

開始されたが其の間顔面殴打或いは一時間太陽直視と云ふ拷問を受け、義齒は其の時壊された（後略）』

『ボルネオポンテアナク 十八年

柘植義藏 四九才 岐阜県

#### 取調の際の拷問事実

他の行動を知っているだろうと云はれ、少しも知りませんと云ふと知らぬ筈はないと云って両手を後頭部頸の所に組合わせ其の間に棒を通して膝頭にて立たせ、其の下に棒を入れ永い時間の苦痛に姿勢が崩れると棍棒にて撲られる。

#### 收容中の虐待事項

- 一、唯一の食器である各自の飯盒を以って糞尿の中に入れて其れを汲み出させ配食時間迄作業を続けて僅かの時間に身体と飯盒を洗ひ其の飯盒で食事をせしめた。（中略）
- 二、理由なくして日本人を向かい立たせ交互に力一杯撲り合ひをせしめた。
- 三、何とか欠点を見付けて銃尾で胃部を突いたり靴で蹴ったり雑草をむしり取り食わせたり、掃除が悪いと云って単の糞や埃を食はされた。
- 四、地上三米位の鉄棒に両手を縛り付けて下げられ、三十分位で気絶した者や殴蹴の為に気絶した者に水を掛けて正気付かせ、之を繰り返す事数回、遂に人事不省となり三日間飲まず食わずに倒れて居た者、
- 五、過度の虐待で死亡した者もあった。』

『第六 グアム戦犯ストッケード

古木秀策 （※年齢他記載なし）

グウム島（\*原文ママ）戦犯ストッケードは椰子林と低いジャングルに囲まれた縦横二百米の二重の有刺鉄線網で囲まれていた。（中略）（※注作者―虐待拷問例、四一例中の悪質例を任意に示す）

◎ 就寝直前に部屋を水浸しにして壁と床こすりをやらされ濡れたまゝ床をのべて寝た。歯ぶらしで床と壁をこすらされそれを歯磨きの為に使用させられる。

◎ K海軍中将（処刑された）は或る番兵が勤務につくと痩せて衰へ果てた体で電柱の廻りをこまの様に走って倒れた。

◎ T陸軍中将（処刑された）は或る番兵が勤務につくと素裸のまゝ礫の上へ柔道の背負い投げを食って前方に倒れる要領と横に倒れる要領を数十回やらされるのが常だった。

◎ 六十有余の陸軍中佐はよく裸で猥せつな踊りをやらされていたが処刑の前日シャワーで素裸のまゝ之をやらされた。非番の番兵達が大勢外から押しかけて来てワイワイ笑ひ乍ら見物していた。

◎ 処刑されたI海軍大佐は絞首刑の判決を受けた後も屢々（しばしば）番兵に強制されストッケード内の私達一人々々に対し「愈々処刑されることになりました。永々お世話になりました」と挨拶廻りをやらされた。

番兵はキューと声を立てて首をしめられるまねをしながら上機嫌で同大佐につき添ふていた。

◎ 右に述べたI大佐は理由なしに裸で無帽のまゝ直射日光の下で不動の姿勢を取らされた。偶々両下肢の湿疹に巻ひていた包帯をとっていたので痛みと痒みに堪かねて包帯をまくことを数回頼んだが拒絶され、自暴自棄になって「かうすれば貴様らは満足するだろう」と言ひ乍ら吹出ものを自分の爪で引つ掻いた。流れる血を見乍ら番兵は「ジョウトウジョウトウ」（上等々々）と笑っていた。

是は同氏の未決の頃のことである。」

◎ 番兵は陰茎を口でくはへる事を英語で「カクサカ」日本語で「シヤクハチ」（尺八）と言っていたが大概の者は始終之を口にして私達を罵り嘲っていた。不起訴で帰った某兵曹は「二晩夜中に拳銃を突き付けられ、抵抗しても二人掛かりで押入られて無理に口にそれを押し込まれた」と涙を流

して語った。私の房から一つ隔てた房の別の若い兵曹は夜之を強要され「許してくれ」と泣き乍ら訴へていたが無理矢理に便所へ引っぱって行かれた。

◎ I兵曹は或日の午後便所の扉の把手に手をかけて瞬間感電死した。当局からは何の説明もなかった。私達は真の原因を知る由もなかったが虐待の嵐が最高潮に達していた当時の環境で起こった此の事件に何時こんな風に殺されるかも知れないといふ恐怖感を興へたのは事実であった。』

実録ばかりでは、息も継げないので、【獄中歌】の中に、せめてもの慰みを見つけ出した人たちの“心の詩”にも耳目を傾けてみよう。

森重義雄

神の御名によりて裁くと云ひ放てど

復讐の眼吾は見にけり（メダン）

東木誠治

死にまさる 恥をしのびて生きて来し

我が祈りで果たさせ給へ

小市広栄

刑死せし 友の空き部屋おとなへば

小鉢の野菊色あせてをり

浜田 貞

暁の死房に聞ゆる「海行かば」

悲しきいのち今日も逝くらし

谷口武次

生き死にのはげしき道をかへり来て

焦土に立てり暗き冬の日（横浜埠頭）

大石鉄夫

ひっそりと 貧しき街に真日照れり

終戦の日もかくありしかな

## 戦争裁判始末記②

『第四編 仏領印度支那戦犯欄』

三、受けたる拷問より

（※作者注―編者の見解記述文）

仏国の日本人戦犯容疑者告発の起訴中には殆ど総ての人々に「拷問」なる起訴項目があった。このような起訴項目に依って起訴したガルドン検事及び其の一派は、日本人戦犯容疑者に対して、あらゆる拷問を加えている。従って殆どが拷問虐待に責め抜かれているので到底その全部を記載することとは出来ない。以下記すものはほんの一部にしか過ぎない。（中略）安南人を妻にしていたN氏（作者注―民間人）は拷問を受けた末に独房で縊死、また、その上妻及び一人娘は仏蘭西人の毒牙にもてあそばれたということである。又Y大尉、S少佐は惨状目を覆う拷問を受け、チーホア刑務所に帰された時には耳の穴から血塗をふき出していた。両者はこの虐待と拷問に抗し憤死したが、Y大尉の如きは石鹼に爪書で「仏蘭西人の暴状に死を以って抗議す」の遺書を認め、薄暗い独房で縊死を遂げた』

当時、仏領インドシナと呼ばれていたベトナムのサイゴンにあったフランス軍刑務所スタンレー監獄での項には、未決拘留期の虐待の件に関して、次のような記載がある。

『…（前略）二十年正月二日、八十名の容疑者に集団処罰が加へられた。禰一本の裸体にして小雨の降る中を屋外に連れ出し、コンクリートの冷た

い歩道に五分間俯向けに寝かせ、つぎに温かい水でシャワーを取らせ、再び雨中で運動、体操、此の間三十分、全身は冷えて齒はカチカチと鳴り、鳥肌が立って唇の色は失せた。(中略)二十一年二月始め、日本から到着したN大佐はその翌日にはもう顔が變形していた。同大佐は屢(しばしば)々暴行の対象となり、坐骨神経痛が再発して松葉杖を突ひて断頭台に上がった。殴打によって耳の變形した者外に二名。そのうちの一名は五十過ぎの老人であったが耳に血腫が出来、残忍な英国兵の一撃を受けるたびに、鮮血が高さ九尺の天井迄とどいた。(後略)』

余りにも悲惨な事例ばかりで筆が進まぬが、ひとたび、敗戦国の烙印を押されれば、かくも、非人間的な行為が罷り通ることになる。

ここに記しているのは、極く一例であり、無念の想いを込めた手記などを残すことが出来た者も、限られた者たちであることを忘れてはならぬ。ここの採録分とて、紙面の都合上の、その一部であり、読者の皆さまは、心して“転写記載した事項”を、お読み頂きたいと思う。

この項の結びとして、次の文を記載する。

“戦犯容疑者の苦痛・無念の想い”、その経緯のほどが伝えられた“長文の手記”の一文より。列記項目より、いくつかを採録記載す。

『虐待行為を蒙りたる手記

地獄絵巻 ウエーキ島

海軍少佐 橘 壮一

(※作者注―長文の抗議書より一部採録)

太平洋上の粟粒の孤島、僅かな灌木の外椰子の木もなく、雑草さえ殆どは生えない白砂の珊瑚礁、魚類を除いては食糧を他に求めなければ一日とて棲息を許さない無人島、その魚類として連日の敵機の哨戒爆撃の為自由に捕獲出来なひ状態が孤立無援の全く敵の演習場と化した哀れな我が前進基地で二年に及ぶ絶へ間なき砲撃と餓死の脅威と戦って、僅かに生き残った

私を待っていたものは、敗戦、無条件降伏そして米軍の正義人道を標榜する戦争裁判の脅威であった。(中略)それは余りにもあつけないものであつた。戦ひでもなんでもなかった。クリスマス前に終わらなければとの判事、検事の相談で(弁護士の言)日本人に尋ねる事以外は凡て通訳なし、急げ急げとばかりに二日間で終はってしまった。あたかも私達を観衆とした一つの芝居に過ぎなかった。(中略)

そして最後に、怒りの記を記す。(※作者注―発言者は日本人司令官)

「我々を戦犯として裁くならば、まず広島、長崎に原爆を投下し、女子供老人は勿論、病院で療養中の病人含めて一挙に何十万と殺戮した行為に對しその最高司令官、指揮者及び実行者を凡て正義人道に基き、世界最大の戦犯として裁くべきである。其の後に於いて我々は此の裁判を合法的と認めやう」家族が広島市にあつたこの司令の怒りの爆弾動議に、裁判官連中は、青くなり赤くなり、果てはぶるぶる身ぶるいして怒った挙句、「あなたはしぼり首の刑に処せられます」と茶番劇の結末を告げた。

予定通りの判決を受けたあと、この司令官は笑いを以って応じた。

「すまん許してくれ」との司令の言葉にも「司令いゝんです。どこまでも連れて行って下さい」と、同僚の戦犯者たちも、微笑みを返した。

この時の裁判は斯(か)くて終わった。

ちなみに、広島、長崎に、米空軍により投下された次第について、一稿を割く。戦時期と重なるが、当時の悲惨なる事実と、犠牲者の痛苦の想いなども伝わると思うので、【原爆詩集 峠三吉―昭和二十六年刊】の一節から、被虐を語る一稿を借りて記す。

ちちをかえせ ははをかえせ

としよりをかえせ

わたしをかえせ

こどもをかえせ

わたしをかえせ わたしにつながる  
にんげんをかえせ

にんげんの にんげんのよのあるかぎり  
くずれぬへいわを  
へいわをかえせ

この詩は、広島市の平和公園内の「記録碑」に刻印されている有名な詩の一節である。次に、怒りの情が迸（ほし）ばる、「痛苦の長詩編」の一部を長くなるが、紹介しておく。

八月六日

あの閃光が忘れようか  
瞬時に街頭の三方は消え  
おしつぶされた暗闇の底で  
五万の悲鳴は消え

渦巻くきいろい煙がうすれると  
ビルディングが裂け 橋は崩れ  
満員電車はそのまま焦げ  
涯してない 瓦礫と燃えさしの 堆積であった広島  
やがてボロ切れのような皮膚は垂れた  
両手を胸に  
くずれた脳漿を踏み  
焼け焦げた布をまとい

泣きながら群れ動いた裸体の列

石地蔵のように散乱した練兵場の屍体

つながれた筏へ這いより折り重なった河岸の群れも

灼けつく日ざしの下でしだいに屍体とかわり

夕空をつく火光の中に

下敷きのまま生きていた母や弟の町のあたり

焼けうつり

兵器廠の糞尿のうえに

のがれ横わった女学生らの

太鼓腹の 片眼つぶれの 丸坊主の

誰がたれとも分からぬ一群の上に朝日がさせば

すでに動くものはなく

異臭のよどんだなかで

金ダライにとぶ蠅の羽音だけ

三十万人の全市をしめた

あの静寂が忘れようか

そのしずけさの中で

帰らなかつた妻や子やの白い眼窩が

俺たちの心魂をたち割って

込めたねがいを

忘れようか！

痛恨の想いを込めての記載であるが、終戦後、広島にやって来た米軍医

療団は、せつせと、「原爆禍の医学的資料」の蒐集に傾注したとされる。

要するに、被虐民たちの痛苦などには殆ど目も向けず、彼らは被虐民たちを、モルモットとして扱い、医療データ蓄積に精を出したのだ。無念なり。

次の別なる手記を示す。

「バラックの中に作られた四面鉄格子の動物の檻、それが私達の死ぬ迄の生活となり絶望の囚人生活が始まった。(中略) その最初の夜、(※作者注) 白人兵と看守が交代した或る夜のこと) 私達の荷物は建物の片隅の棚に積み重ねてあったが彼等の一人がツカツカと荷物の方へ進んで行った。我々注視の前で強盗が始まったのである。メリメリトランクを引き裂く音、中味をバサツとぶちまけて目ぼしいものを物色する。他の者もこれに加はった。私達は啞然とした。これは拳銃を突きつけての強盗の何の違ひがあらう。(中略) 良心もなければ羞恥心も無い。その太々しい態度、何とすざまじい人間どもであらうか。これが米人の姿だったのか。(中略) 一日一回十五分間運動の時間が與へられた。一日中薄暗い『獄房にとじ込められた私達には精神的にも肉体的にも、有難ひ恵みである筈であったが、これが彼等にとつては最も合理的合法的な虐待を加える貴重な時間となった。一人づつ引つ張り出される度に今日は何をされるだらうかと覚悟を新たにしてお出て行かねばならなかった。戦争中の栄養失調に続く此の生活では健康は憂慮すべき状態にあったが彼等はそんな点の顧慮もしない。否、充分に顧慮してこの虐待方法を考へたのだらう。(中略) 炎天下老人に対しても容赦がある筈がない。時には大きな石を左右に伸ばした両手に一つづつ持って一時間も立たず。手が下がってくれば警棒で殴る。(中略) A中將はその後処刑されたが「お前達若い者はどんなことがあっても頑張って生き抜いてくれ。自分はこの老人、到底この運動には堪へられなくなる。その時には自殺をするつもりだ。しかし、お前達最後迄頑張って国民にこの真実を伝えて呉れ」とよく話されたとの事である』

この手記を書き表した者は、絞首刑の判決を受けた後、終身刑に減刑に

なつたと、この書の裁判事件調査票には記載されているが、その後の人生については不明なり。

この手記の終わりに、「人類の敵」と小見出し・分類をつけた一文があるので、「戦犯始末記」の結語としての、大いなる意味も込めて、ここに記載しておく。いまなお、このメッセージは生きている。そのことも伝えたい。

(※作者注―一部改行、改稿で記す)

『「人類の敵」と云ふ一言がしばしジャーナリズムに現れた。

凡てに見捨てられた世界の孤児、それが私達戦犯の姿であった。

★だが、如何に言葉にて、あざとく宣伝に努めて成功した行為ととも、その被害者だけは欺く事は出来ない。

★ 私達は彼らが何をなしたかを身を以って体験して来た。

★虐待行為の限りを以て我々を遇して来た彼らは今何の咎(とが)めも受けず人道の権化、世界の救世主の如く我々の上に君臨している。

★ この真実を世に明らかにしなければあのまゝ殺されていった人々にすまない。それは私たちの義務である。その結果たとへ身に禍ひをもたらすとしても真実を明らかにしなければならぬとたく決意したのである。

★このいまわしい思ひ出は出来れば忘れてしまひたい。今更これを思ひ出し度くないのだが、敢へて手記をものにしたのは、この運命を女々しくくやむためでもない。まして私怨を晴らそうとするのではさらさない。

再び私達の子弟が此の運命に泣く事がないやうにと願ふ一心からである。

★戦勝国の実体を身にしみて知り彼等の真の姿を身を以って知らされが故に過去の日本の凡てが悪であり、彼等のすべてが救世主であったと誤れる考へあるを棄てて貰ひ度ひが故に書いたのである。

★身を顧みず愛して来た、又愛しつゞけやうとする日本が再び戦争の暴逆にさいなまれ事なく永遠の平和と繁栄を賢明を守ってゆくことを心から願ひ、神に祈りつつこの手記を終わる』

局面は変わり、中国での戦争裁判はどのようであったのか。

告発記、懺悔録などは、余り見受けられない。数少ない資料の中から、憲兵には厳しかったという記録があるので記しておく。

『一九四六年から一九四九年にかけて、BC級戦犯に対して、中国各地十か所で対日戦争裁判が開かれた。(うち、死刑が一九九名、無期懲役八三名、有期懲役八七二名、無罪三五〇名) 中国は甚大な被害を蒙ったにも拘わらず、他国のBC級戦犯の過酷な判決に比べて比較的寛大な判決を下したという』

(裁かれた憲兵と中国政府の戦犯裁判を中心に 和田和穂著 岩波書店刊) (註作者一部補遺)

憲兵の軍務であるが、民間人とも接することから、スパイ活動の嫌疑を掛けられた者へ拷問・虐殺などの事例があり、被害者からの告発、或いは、首実見等々で、多くは罪状が明らかにされた挙句に処された。当然のことながら、誤認逮捕、事実と異なる事例もあったと思われる。

憲兵は軍人の非違を視察し、行政警察及び司法警察の事を兼ねての役目を負った。憲兵は「軍事警察」の職務を旨としていたので、それだけ、民間人への加害行為に逸脱した行為が存することになった。

ちなみに、戦争裁判を行なった国々の死刑判決事例数を、ここに記しておく。\*アメリカ一四三名\*イギリス二二三名\*オーストラリア一五三名\*オランダ二二三名\*フランス六三名\*フィリピン一七名\*中国一四九名 『戦争裁判の実相』を手掛けた編者の一人、巢鴨法務委員会委員長東邦彦氏が序文に掲げた一文が、何よりも雄弁に、戦争裁判の実相を語っていると思うのでここに転載させてもらおう。

『「法の女神」は布でその両眼を覆い左手に秤を提げ右手に両刃の刀を持っている。両眼を覆っているのは法の裁きの公正無私であることを意味し、その秤は衝平を象徴するものであり、その刃は正義の象徴である。われわれが「裁判」といふものに常に神聖なものを感じるのはこの「法の女神」を聯想するからである。終戦後横浜、マニラ、バタビヤ、其の他の各区で

行われた「戦争裁判」は名や形は裁判であったがその実は裁判ではなかった。布に覆はれざる女神の両眼は被告に対する憎悪の色に輝き、秤を捨てた左手は被告の襟がみを掴み、右手の刃は被告の喉元に擬せられた。否、裁判所は女神を仮装させる「ギロチン」に過ぎなかった。祖国防衛の第一線に立つて尽忠報国の誠をつくせる幾多の戦士は戦争犯罪の汚名を被せられこの残酷な断頭台の露と消えたのである…』

「法の女神」とて、敗戦国には憎悪の念しか向けなかった。「非現実の現実」、負けた国に負わされた厳しい現実がここにはあるのだ。

「日本国は二度と負けてはならぬ」

天は天を知る―いや、天とて人の操る天なりし。

天無きを以って、人は天と知るべきか。

### 第三章 闇市成金術の始末白書

闇なるがゆえに闇なのだ

六万人の露天商がいたと言われる首都東京、主要駅周辺に、その勢力の陣を張った悪どい連中の縄張りの下、「首都闇市」なんぞの名が付されてしまったが、それでも、なんとかかとか、“物流の名目”だけは保ちつつ、闇市は存続した。

戦後の混乱期、誰がテキヤで、誰が博徒か、そして、その利を貪る他の勢力派とは？その生業のほど、入り乱れて、実のところは、正体不明の“ごろつき連中”となった。

それでも全体の二十パーセントぐらいは、テキヤの采配でことは進んではいたそうだが、さて、敵か味方とて知れぬ混乱状況、分かり易い図式で示せば、『日本人対三国人』の対抗意識だけは、闇市では厳然と生きていた。

ところで、敗戦三日後の八月十八日には早々に都内主要紙に、さるテキヤ屋大親分の肝いり、署名入りでの大広告が打たれた。

『転換工場並びに企業家に急告！平和産業の転換は勿論、其の出来上がり製品は当方自発の“適正価格”で大量引受けに応ず、希望者は見本及び工場原価見積書を持参至急来談あれ 淀橋区角筈〇〇〇（〇〇邸跡）新宿マ―ケット 関東〇〇組』

商魂逞しい平和日本復興への第一歩が、早々に布告され、公然たる呼び掛けを行った。もちろん、その後、国民の味方？かと、一瞬思えてしまう

ようなこのキレ者一家？が、闇の勢力を拡大したのは言うまでもない。

食うためには働かねばならず、金子（きんす）も必要、また、余った生産設備なども手付かずの状態に置かれていたのだから、時宜を得た呼び掛けではあったのだ。

何しろ、軍需工場から吐き出された失業者、それに、仕事を失った元軍人の帰還者・戦死者の遺族、いわゆる、戦争未亡人たちから、傷痕軍人、また、戦災者の遺家族たち、戦争孤児に、加えて、時期はずれるが、朝鮮満州からの引揚者たちも加わって、敗戦後からの日々、「雑多な難民人種」が、その日の糧を求めて盛り場をうろつくことになった。

ちなみに、東京空襲の実害だが、区部の半分以上が焼け野原となり、焼失家屋七十七万九千戸、罹災者数は百万人以上、死者は十一万一千人を越えた。特に、「東京大空襲」と呼ばれている昭和二十年三月十日の下町空襲だけでも死者十万人以上、都市部を無差別空襲した事案では、もっとも大きな被害実数だ。

焼跡現場に足を踏み入れよう。

テキ屋親分発案の勢力をも駆逐する勢いで、やがて、「強力グループ第三国人」が力づくで、この市場には割って入った。

ここにも、朝鮮人、中国人、台湾省民たちが多くいた。

終戦の時点で、日本には二百三十六万五千二百六十三人の朝鮮人と、五万人を越える中国人（台湾省民を含む）がいた。

街頭に溢れた二百数十万人の「解放国民」たちのうち、一四〇万人の朝鮮人と、若干の中国人、台湾人は終戦時に帰国したが、なお、不穏な空気はそのままにあった。朝鮮半島からの新入の密入国者も後を絶たず、他所者がはびこる始末、これらの連中の蛮行が改まるはずもなく、更々に勢いを増すだけ、まさしく、「敗戦国」は全土が彼らに占拠されている状況はどここの地でも続いていた。

首都東京には、進駐軍の総司令本部が、接收された第一生命ビル内に設

けられた。位置的には、皇居と丸の内の中間辺り、お堀端などや、皇居あたりも見渡せる地である。

銀座四丁目交差点角にある和光（現服部時計店）や、銀座三丁目のデパート松屋が接収されて、駐留軍のPX（酒保）となった。

こちらは、連日、アメリカ兵などが観光気分よろしく、大勢押し掛けた。

昭和二十年十一月一日には、総司令部近くの日比谷公園で、「餓死対策国民大会」が開催された。当日の新聞によると、「上野駅で最高の六名の餓死者を出した」の記事がある。また、「栄養失調」の新語？も登場、それらに関連した記事では「飢えに泣き叫ぶ子をなだめて川へ投げ込む母」「買出し先の農家が留守だったので、台所にしのびこんでおひつのご飯を食べてしまった主婦」などの記事もあり。

米軍の俘虜を輸送する列車が駅を通過する時の風景に、敗戦国日本への「悲憤の情」が込められている一文もあった。

『ウィスキーは飲み、タバコをくゆらせ、そして、彼らは、行き継りに、腰のパンを、ほいほいと、車外に放り投げた。

飢えた者たちが群れた。

「…ふり向きもしないのかと思ひのほかわつと駆け寄ってわれ勝ちに拾ほうとするのです。子供ならともかく立派な洋服の男までもが。黙って見ている人の中には涙を浮べていた者もありました』

次の二例は、高見順「敗戦日記」より。

『仲見世は、両端がびっしり露店が出ていた。そして人がいっぱいいたかっていた。その賑やかに驚いたが、そのみじめたらしいありさまにも胸をつかれた。汚い露店のみじめさ、それにたかっている汚い風態の人々のみじめさ、乞食市だ。いろんなものを売っている。食料、衣料、大事な生活必需品を除いたあらゆるもの、と言っていいかもしれない。ただしいずれもこまごましたものだ。何か汚らしいみじめたらしいものだ』

『日本は四等国だとマッカーサー元帥が言ったが、国民も四等国民だ。敗

れて、誇りを失って、ガタガタ落ち込むみたいにして、四等国民になったのか。敗れる前は一等国だったが、とはお世辞にも言えない。しかし、敗戦国民になってから急激に低下したところもある。ただに、日本人のみでなく、人間とはそういうものではないか』

最後の不敬罪というのもあって、「朕はタラフク食っている、汝臣民飢えて死ぬ」というプラカードを掲げた一労働者が起訴されたなんぞという話もある。

警官も堂々の闇買い、「勤務にさしつかえのない限り食糧休暇は認める」とは、本家本元の農林省役員への通達、こんな世相の中、このついでに、記しては申しわけないが、「二億総闇行為時代」が容認される中、闇買いの行為を潔しとせずの餓死事件も起きた。或る高校教師はそのままに栄養失調で死んだ。

『残された日記の終わりのページに、「国家のやり方がわからなくなってきた、きめられた収入とこの食配給では今日生活はやって行けさうもない」といふ意味が記されてあった』自分はあまり口にせず、家族の者に食べさせたくて、結果的に体力を消耗したのだという。

(毎日新聞昭和二十年十月二十八日記事)

東京地裁刑事部山口良忠判事も、かたくなに、闇買いを拒んだ末に死亡した。「死の日記」より、一部抜粋。

「食糧統制は違反だ。しかし法律としてある以上、国民は絶対に、これに服従せざるを得ない。自分はどれほど苦しくても、闇の買出しなんかやらなない。(中略)敢然と戦って餓死するのだ。自分の日々の生活は全く死の行進であった。(中略)自分だけは今(〇〇〇ママ)として清い死の行進を続けていることを思うと、全く病苦を忘れていい気持ちだ」

時の政府が闇買いをしてはならぬと通達した「食糧統制令」に真つ向から抗議しての自死となるが、是とするなりや？否とするなりや？

ぜひもない―食い物のない時代、それなりに庶民も知恵がないと生き延

びるのは困難であった。「闇の物資」だけが流通している時代、何とか、各人が生きて行ける分だけは食べることに、それには、庶民の知恵を働かせることが大事だったのだが、これさえもが、「食糧統制令」のゆえに、統制されていたのだった。

当時の新聞記事を追えば、政府の諸策と、「闇屋商法」との知恵くらべ、また、それらに派生して生じた事柄・事件なども拾うことが出来る。それらを列挙しながら、この間の世情のほども探ってみよう。

／白昼の街に闇市場、歪んだ帝都表情、りんご一個五円梨三個十円／露天商も今後は間口、張出しなど嚴重に／生野菜や鮮魚を鉄道便で送れる買出しに自粛要請／米兵からの物資、警視庁指導取締まり／新内閣の課題、食糧問題の解決、復員と失業対策／闇を取締る警官の闇／飢餓の迫る壕舎村（※作者注―防空壕跡）／弱身につけこみ法外な闇値売りの農民に訴える／銀座八丁ずらり闇市などなど…。

他に、血なまぐさいものを記すと、

野天市場の裏表、仕入れは親分の役／贋造紙幣乱れ飛ぶ／強盗一夜一件、中野、高円寺に恐怖広がる／酒もねらう集団強盗、中野かいわいを襲うギャング／救いなき人々、すさぶ罪「上野」に群れをなす少年らの悪事（※作者注―多くは戦災孤児）や、／（※作者注―飢えた）野犬群少女を喰い殺す、なんぞという空恐ろしい事件も発生していた。

千金争いはシヨバ争いなりし

「青空市場」なんていいザマもあったのが闇市なれど、なんてったって、人間食わなければ生きてはいけないのだから、どこもかしこも、「市の立つところ」は殷賑を極めた。

東京の上野駅から御徒町にかけても、「大闇市」の観を呈し、連日、わんさと、老若男女を問わず、腹を空かせた連中が訪れた。

「買った！買った！さあ、よそより安い！」

今でも、年末になると、正月料理の買い物でこったかえすので有名の地だが、その頃の客引きの文句は、「買った！買った！買った！ボヤボヤしていると生存競争に負けちゃうよお」だったとか。世相を映し出している話だ。

東北線にゆられてやって来る“かつぎ屋”が、警察の眼をのがれて、ゲリラ的に出没するのが、立地条件に恵まれたこの地、もちろん、警察の取締まりの網からのがれるのは、素人には無理なところもあったから、ここでも、第三人たちは荒稼ぎをする場を得た。

食い物の仕入れに関しては彼らの独占場であった。本来なら、「食管法」による取締まりを受けると、闇買いの品は没収されてしまうのだが、彼ら第三人はそんな憂き目には遭わなかった。やりたい放題、すべて、暴力沙汰で法とは対決、取締まり出動で腕をへし折られた警官や、命を奪われた警官も多数出たりで、彼らの傍若無人ぶりに警察も拱手傍観の様、立ち向かうことが出来なかった。

元々は、露天商たちの仕切っていたシヨバに第三人が割って入ったのだから、抗争ことになるのは必至。テキヤM組の五代目親分M組長は、東京・新橋駅前ヤミ市などをニワ場（博徒の縄張り・シマ）として、露店からカスリ（利益のピンハネ）や、シヨバ代を集める支配権を手にかけていた。直系子分約百人、組の総勢は二千人を越えていたという。

「新橋新生マーケット」の名の市場の建物建設を巡って、台湾省民グループとの間でいざこざが絶えなかった。元々から日本に居た者と、戦後、台湾航路の軍属船員などをしていて、そのままに日本本土に残された者など台湾省民のメンバーも、入り組んでいた。

お互いが助け合うという華僑精神も働いていたし、一方では混乱期の絶好の商機到来”、元々、商売のうまい彼らのことだから、新橋だけではなく、台湾省民たちは全国の闇市でも、それなりの勢力を張っていた。

日本人テキヤのシキタリとは無縁だから、シヨバ代や、売上金の上納な

どはしない。

利害が一致しない同士、「新橋新生マーケット」についても、これまでの既得権を巡っての交渉事、つまり店の割り当て数のことで、双方が条件が合わずモメていた。もつとも、テキヤの子分には元々のことを言えば、台湾省民もいたというから、何もかも、話を通じないのではなかったが、テキヤの親分とて、絶好の機会に一稼ぎをもくろんでいたので譲らなかつた。テキヤの連中は、「日本人代表格の闇市主流派」でもあつたが、“仁義より金儲け”が最優先策であつたのは言うまでもない。

それに、ここでも、“戦勝国民への遠慮”があつたらしく、朝鮮人、台湾省民などに対しても、そもそもは、M組は腰が引けてはいた。

終戦の翌年昭和二十一年六月に発生した事件。新生マーケットの入居割り当て案、台湾省民にも有利になることを条件として、「新橋闇市」のシヨバ仕切りのやり直し策を、M組は進めていたのだが、話はまとまらなかつた。両者のトラブル解決のため、占領軍憲兵司令部も対案を提示していたが、これも、調停案にならず。その結果、ついに、「血が血を呼ぶ決戦場」まで迎える仕儀とあいなつた。

ことの様子、次のような事態が到来した。

『六月十七日、マーケットの棟上式のこと、トラック数台に分乗した二百人ほどの台湾省民の暴徒がその現場にやって来た。

「まだ話はない。工事を中止しろ！」

と口々に叫びながら、M組側五十人ほどと小競り合いとなつた。

この時、愛宕警察署員一個小隊三十人と、愛宕署の依頼で駆けつけたM P十人が出動、警戒に当たつた。その日は、直接のぶつかり合いは避けられたが、後日、台湾省民側はM組関係者を渋谷東横線のプラットホーム近くで待ち伏せし、ふくろ叩きにした。

かくて、組はその報復を図るため、元M組組員で今は台湾省民側の男を、新橋路上で襲い、海軍ナイフでアゴをえぐつた。二日後、今度は、台湾省

民側がお礼参りに、二台のトラックに分乗して、マーケット建設現場の事務所を襲撃した。ナイフでアゴを裂かれた犯人を出せの騒ぎとなり、事務所は破壊し尽くされた。組員一人が殺され、台湾省民も負傷者二名。このあとも、報復合戦が続いた。

およそ、「仁義道」とは関係のない殺戮合戦で、渋谷道玄坂にあった台湾省民の「渋谷華商本部」が今度は襲われた。

ピストル隊まで用意されているの発砲騒ぎ。日本刀、ドス、バット、棍棒を所持した武装集団同士だったので、また、負傷者が出た。

その夜、台湾省民側も仕返し作戦、M組員が臀部をピストルで撃たれ負傷、今度は報復のためM組が新橋の華僑自警団本部を襲った。

血が血を呼んでの総力戦、M組はショバ取り戦争に負けた側の腹いせの分も手伝ってか、“戦勝国組”？の殲滅を図り決戦費用二百万円を、“関東ヤクザ連合”とも言うべき、名だたる仲間のテキヤ衆から、また、配下の露店の連中などから調達した。今ならン億の金の額だったという。

ちなみに、新宿はW組、池袋はS組、銀座はU組、浅草はS組、新橋はM組が勢威を揮っていた。用意した兵器は、機関銃二丁、ピストル五十丁、日本刀、棍棒…などなど。まるで、「第二国人对日本人の決戦」の様相も呈していた。東京のヤクザ連中が大集合をかけたので、これに対抗してか、関西方面から実際の数は分からぬが、台湾省民二千人？が上京するという噂まで立った。実際に、相当の数の台湾省民が加わったのは事実だったらしい。かくて、新橋鬧市のM組側の露天商も、その強大さに腰が引けて逃げ惑い、こちらは「戦わずしての大混乱」状態とあいなつた。

昭和二十一年七月十九日、決戦の場では、新橋のM組本部に各衆が集まった。その数、千数百人、虎の門付近、組本部裏手の小学校などに配置、ガレージ下には、機関銃二丁が据えられた。

まさしく、戦場そのものの構え。

台湾省民側は、京橋の国民学校に約五百人が集合、待機した。

この間、事態の重大さに、中国軍事代表団僑務処の処長役の男が駆けつけ、いきり立つ台湾省民を宥めた。(※作者注―中国大陸代表部) 一応、説得成功、事態は収束したはずだったが、トラック二台に分乗した約二百人の省民の怒りは収まらず、彼らは決戦場の新橋へと向った。

再び、取つて返した処長が説得して、ともかくも、騒ぎは収めたのだが、暴徒まがいの省民の若者を乗せた二台のトラックの帰途コースが誤解を招くこととなった。

トラック隊を、中国代表部のあった有栖川公園(※作者注：港区内)に誘導すべく、「銀座く新橋く虎の門く米大使館く有栖川公園」にしたことから、情報を知らぬM組が過敏に反応し、トラック隊一行が、虎の門に差しかかった時、一丁の機関銃が火を噴いた。

幸い、機関銃を撃った男は初めてのことで操作の方法を知らず、暴発状態で、撃った本人がおお慌て、挙句に、流れ弾が米大使館方向に飛んだことで、GHQから装甲車四台とMP隊、警官らが緊急出動して来たので、新橋決戦は回避された。

ところが、同じ、この日の午後九時過ぎ、今度は、舞台は渋谷が緊迫状態を迎えた。トラック五台などに分乗した台湾省民約百五十人が、恵比寿から渋谷警察署前にと差し掛かった。

事の顛末は、今度は、警察相手となつてのことで、両方に負傷者が出た。

渋谷署が、この二日前に、一斉に“闇市狩り”を渋谷周辺で行ったことで、彼らは危機感を募らせていた矢先、「警察も日本のヤクザに味方している！」の怒りが彼らに渦巻いていたのも、衝突の原因だった。

事実、大阪、神戸方式同様の収拾策の一つ、いわゆる任侠一味と称する連中の力をも借りながら、闇市に横行する第二国人グループの取締まりを、日本の官憲側が全国的に進めているという状況を、これも示す一例なり。やっと、無力化されていた警察組織が機能し始めていたのであったが、この過程では、いわゆる「日本人暴力団」が台頭する「機」と「場」とを、

博徒やテキヤなどの暴力組織などに、行政側が力を貸したという矛盾を生む結果ともなった。各種の利権が、その後、彼らや、ある種の利に敏い組織連中の手に渡ったのは事実、これまた、「闇の闇市発」の連鎖の一つと言えるだろう。

ここでは、首都決戦の様を取り上げたが、さて、その後、一大勢力となった暴力団の隆盛ぶりを見るまでなく、この、戦後混乱期の“闇市対策”の一環が行政に及ぼしたツケのほどが分かって言うもの。やはり、これとて、「敗戦国」の「負の遺産」の一つには違いない。

今もって、と言えるところが、この「闇市発の問題」の根の深さ、その後の「ツケの大きさ」を如実に物語っているようだ。

#### 無法・かつぎ屋稼業始末記

かつぎ屋稼業では、三国人は列車に乗るのもすべてが無賃乗車で、超満員の列車中での座席独占なんぞはこれまた当たり前であった。

つまらぬトラブルに巻き込まれて、実際に、一般客でも殴り殺される者が続出した。

これらの「闇の事件史」もまた闇に葬られているので、実相のほどはほとんど明らかになってはいず、これまたみんな泣き寝入り？

『大きな駅に着いた時、大変なことが始まった。第三国の連盟の腕章を巻いた、あまり風体がよくない若者が、窓から無理やりに乗り込んできた。

(※作者注―建青同盟の腕章か?) 周囲の人たちを押し退け、突き飛ばして場所をとり、氷が溶けて水の流れ出る臭い魚の箱を積み込んだのである。総勢七人のその連中はまったく言語道断で、座っている者を追い立てて、全員が座り込んだ。(中略) それから少しして連中の一人が、「さあ、寝ることにしようか」と言って立ち上がった。どうするか見ていると、網棚の上の荷物は払い落とし始めた。棚の上に寝るつもりである。立っている人

間の方を踏み台にして、棚の上に這い上がったその男はまだ場所が十分でないのか、足元の荷物を蹴り落とした。ところがその荷物が運悪く、子供を抱いていた婦人の上に落ち、子どもに当たったので、火の付いたように泣き出してしまった。それまで辛抱を重ねていた私は、とうとう我慢できなくなり、ついに無意識のうちに「無茶をするな」と大声で怒鳴ってしまった。

（秘伝少林寺拳法」宗道臣 光文社刊）より』

同じ日本人でも少林寺拳法の創始者である人物なので、この場合は、強気の態度で接することが適ったと思われる。詳細は知れず。

大阪買出し部隊の実情レポートも記そう。

『：配給ルートにのらない闇物資はどうやって集められ、市場に並べられたのか。食料品のほとんどは“買出し”によってであった。大阪府食糧第二課の調査によると（朝日新聞二〇・一〇・二五）大阪府下の買出し部隊は近鉄大阪線だけでも一日三、〇〇〇人にのぼるというから、すざまじかった。もちろんこの中には闇商人だけでなく、ツテをもとめての一般市民のささやかな買出しも含まれての数字であるが、とにかく、大阪府下の全郊外電車で計算すれば一日一万五、〇〇〇人の買出し部隊が横行している計算になった。（註資料④飢餓戦線の補給基地・闇市より）』

次は、視点、立ち位置を変えて、台湾省民であった者の目撃話からの観察を試みる。断りをいれておくが、台湾人には二種類の人がいた。戦前から台湾に住んでいた人と、戦前・戦後に中国大陸から移住して来た外省人に分かれるが、次の一文を残した蔡焜燦は、終戦時、岐阜陸軍整備学校奈良教育隊に所属し、日本に在住していた台湾省民という身分であった。『台湾と日本精神 日本人よ胸を張りなさい 蔡焜燦 日本文教社刊』

（※作者註資料⑩）※作者注・改行あり。

『昭和二十年八月十五日、終戦の詔勅下る。

山奥で作業中に年配の応召兵が「負けた！」と隊からの伝令を口にしたまま、呆然と立ちすくんでいた。我々は何が起こっているのかさっぱりつ

かめない。無理もない、玉音放送があることすら知らされていなかったのである。ただ、中隊長の青ざめた表情は事態の深刻さを物語っていた。しばらくして、敗戦の事実が我々台湾出身生徒にも正式に伝達されたとき、悔しさと無念の気持ちでいっぱいになり、とめどなく込み上げる涙で頬を濡らしたことはいつまでも鮮明に覚えている。

無性に悔しかった。それは台湾出身生徒も同じ心境であった。

他方、朝鮮出身生徒達は、その日から食料倉庫、被服倉庫を集団で強奪するなど、したい放題のありさまで、我々は複雑な心境でそれを眺めていた。日本人を殴って、「戦勝国になったんだ」と威張りちらす者もいれば、「独立だ！」と氣勢を上げる輩もいる。敗戦の報は、それまで一つだった“国民”を三つの国民に分けてしまったのである』

『：そして八月十七日の夕方、連合軍の命令で我が隊の武装解除がはじまり、日本人は復員することが決定した。(中略)しかし、残務整理は日本人事務官でこなせるものの、兵隊がいなくなつては武器庫や飛行機などの警備もできない。そこで進駐軍がやって来るまでのおよそ二ヶ月間、あらゆる軍施設を我々四十名の台湾人生徒が守ることになったのである。「朝鮮人は信用できない。だから君達台湾人が守ってほしい」素晴らしい残して去つた上官の言葉を、これまで経験してきたもろもろに照らし合わせて了解した』

『昭和二十年十二月、連合軍の命令で台湾への帰還を命ぜられる。(中略)ああ、日本は本当に負けたんだ：目にするそんな光景が幾度も私に日本の敗戦を教えていた。私は終戦の日をもって“戦勝国民”になったはずだが、やはり心の底でまだ日本人だという意識があり、“複雑な心境”で“敗戦”を思った(中略)(※作者注「帰国のため列車に乗る」心の切り替えができない私は、誰から見ても敗戦で肩を落とした日本人と見えたのだろう。まだ日本兵の軍服で汽車に乗り込んだ私は、八月十五日をもって急に威張りはじめた連中のいやがらせを受けた。座席の下に置いた新品の飯盒を朝鮮

人に盗まれ、それを奪い返そうとすると、「なんだお前、朝鮮人をバカにするな！降りてこい！」と、たちまち数人にとり囲まれてしまった。多勢に無勢、勝目はない。こうなつては、「すみません、私の記憶違いでした」と謝り、難を逃れるしか術はなかった』『それから佐世保に到着するまでの三十時間、連中は執拗に私を含め多くの日本人乗客をいびり続けた。若い女性トイレに行こうとすると通路を塞ぎ、次ぎの駅で窓から降りるよう指示するなど、この連中のあまりにも情けない行状を、私ははらわたが煮え繰り返る思いで眺めていました。ただ、黙って見ているしかなかったのである』

男の欲望を滾（たぎ）らせた多数の不埒（ふらち）な者ども、人目も憚らぬ不逞なそれらの連中の行状の数々のほどは、この時代を生きた者なら誰もが知っていることなのだが、年月の経過とともに、そのほとんどの事実ごとは、葬り去られてしまった。もちろん、この混乱の時代、日本人にも悪い連中が多くいて、性犯罪でも、買出しの女性客に「買出し物資を分けてくれるところを知っているから連れて行ってあげよう」などと甘言を弄し、強姦・殺人行為を働いた不埒者もいたのは事実としてあった。それに類した事件もかなりの数なかったわけではない。念のために記しておく。

また、この「闇屋―かつぎや」だが、ものがなく生活費も稼げない世情ゆえに、日本人でもこれを商売とする悪どい連中がいたのは事実で、それなりに団結しながら悪事に精を出した。

当然のことながら、腕っぷしに自信のある連中は、凶器を手にも不逞鮮人グループと対決して、血なまぐさい抗争も繰り返した。

愉快ではない話ばかりなので、山田風太郎の「戦中派闇市日記―二十二年五月六日」より、その一節を借りて、当時の「かつぎ屋事情」、また、「日本人の想念のあり処」なども、探ってみたい。語り継ぐべきものあり。

『夜六時五十分発、臨時列車に乗る。（注東京発）坐る能わず京都まで立ち

つづけ、その立つも、両足揃えて立てる靴一寸も動かす能わず、肢を曲げたくなるもこれまた一寸も曲げる能わず、車内の電灯は両端にひとつずつ、五燭光ぐらいにとれるのみ。それも消えて暗黒なることも多し。文字通り地獄列車、時にすれちがう進駐軍の列車明るき車内に人の姿稀なり。苦痛地獄のごとく、発狂したくすらなる。(中略) 闇屋の青年多く、いつもの汽車に見るごとく言動傍若無人なり。網棚の荷を積み上げて己の横たわるに足る空間地をつくり、終夜ヒワイなることを高語す』

と、嘆き節が入り、続いて「横暴第三国人の見聞記」にて、日本人の怒りを示す。見事、今の世をも喝破せしところ、大いに感じ入る。

『老婆あり、前の女に一寸足を動かしてくれというのに、その若き女、いきなり「お前日本人の女だろ」という。然りと老婆答ふるに、「日本人のくせに生意気な！あたしや中華だよ！」と怒鳴る。老婆黙して暫くの後何かぼそぼそ言うに「文句あるなら事務所に引っ張ってゆくよ」と威嚇す。何でも華僑の事務所か局かのごとくなりき、車中数百の日本人共何人も一矢を加うるなし、(中略) 誰か隅にて「威張りたいたいだけ威張れ、あんまり長かアねえぞ」と実に小さき声にて呟きたるのみ、日本人の自信喪失せるや滑稽なるばかり也。然れどもその声小さきもまた無理ならんか、長かアねえ未来に何とかしなくてはならぬと考えるは皆同じなれど。その何とかの具体的なること空想もする能わざるほど叩き叩き抜かれた今の日本人なればなり。支那人、朝鮮人の威張るは日本人が支那、朝鮮に於てムヤミに威張りたる自業自得なりというべく反省の余地頗(すこぶ)るあれど、日本人の威張りたるは日本の力にて威張りたるなり、今の支那朝鮮の威張るは虎の威を借る狐のみ。朝鮮が一等国なりとは常識ある支那人朝鮮人の一人をもが信ずるに能わざることならん。一般に今日本に残留せる支那人、朝鮮人、一人としてロクな人間なきは、而してその低級なる土足を以って日本人を踏みて得意然たる者多きは、反動として恕(ゆる)すべき点あれど、また、長き目にて見て支那朝鮮のために大いなる、而してとりかえしのつ

かざる不幸というべきなり。

窗外、月明蒼くひるのごとし、富士幻のごとく幽かに虚空の浮かめるを見き。』

#### 所変われば品変わる闇市史

戦後の混乱期の「闇市事情」をさらに追う。

話が前後するが、昭和二十年末の警視庁調査資料によると、露天商は三〇〇〇余の数、翌年四月から五月にかけて、学生が調べた結果では、新橋、上野、新宿の三ヶ所だけで二二一八店とある。また、新宿の闇市については、バラック建ての店舗を構えているものは、四四八店のうち、三二店にしか過ぎず、多くはよしず張り、または、戸板を並べたもの、地べたに商品を並べただけの店とは言いがたい店ばかりであったとある。

いずれも、埃りにまみれており、舗装がないのも同然の道筋、雨が降ったらぬかるみ道となったが、それなりに知恵を働かせて、みんながみんな、商売にこれ努めた。

もちろん、客あつてのこと、東京では、新橋・有楽町の“めし屋横丁・すしや横丁”新宿西口駅の線路沿いにあつた通称「思い出横丁”こちらは”しよんべん横丁”の名の方が有名であつた。新宿東口にあつた“銀めし横丁”はそのものずばり、新宿・歌舞伎街界隈の新宿ゴールデン街、同じくノガミ(上野)“しよんべん横丁もそれに肩を並べる。上野の“アメヤ横丁”は、今も、当時の名残をほぼ止めたままに、雑多な店を立ち並べている。

東京・渋谷の“のんべい横丁”、吉祥寺の“ハモニカ横丁”などもよく知られていた。大阪では、十三のしよんべん横丁”、道頓堀の“ちようちん横丁”また、仙台なら地元の人しか読めない“壺式参(いろは)横丁”とか、その名も庶民味たつぷりの賑やかさ、どこもかしこも、今だつて小路の通り、(ご)ちや(ご)ちやした造りなので、その面影が偲べる地。

北海道・帯広市にあった“満蒙マーケット”などは、その来歴が知れる呼び名であろう。

いずれにしろ、かつての鉄道の中心地には、大小を問わず、闇市なるものが存在した。

「闇米に闇野菜の大根だの人参だのを切り刻んで、大きな鍋で炊いて、ドングリで売るぞうすい。豆コーヒーなんていって、豆をこがしては、お湯でのばして、サツカリンをブチ込んだものを、そう言って売っていた。そう、ニワトリが食べるフスマなんぞを、一升五円で売っていた」

当時の事情を語る或る上野の闇市商人のこれは言なり。

これらの「闇市」での商品だが、闇市がデパートを制したと言われた時代、商品の流通も複雑を極めていたが、大きく分けると、仕入れルートは次のようになる。

A 親分に商品を世話してもらう。これはさらに①親分の直営の露店・マーケットと②商品だけまわしてもらうという二面に分かれる。

B ①自分の個人所有物を売り食い目的に販売する場合と②被災商工業者が焼失をまぬがれた商品を売る場合に分かれる。

C 産地直接仕入れ 例・鮮魚などを、運送方法を確保するために特定の業者（※作者注―この場合は闇組織が協力？）に委任する。

D 卸屋、ブローカーから仕入れる。卸屋といっても、仕入れ価格は闇値、食品類は“かつぎ屋” 仲介屋“運び屋”と呼ばれる者から買い入っていた。

E 特殊ルート。密輸品、PX（※作者注―米軍酒保）からの横流れ品。特殊ルートがないと無理なので、華僑系が大方は押さえていた。洋酒、缶詰、牛肉、パン、チョコレート、ガム、タバコ類に、それに、ガソリン、中古乗用車まで仕入れられた。また、一部では拳銃も流れた。

彼らの悪行の数々、極く一部だが記す。以下は特定されている事件なの

で第三国人とは表記せず、この項目は“朝鮮人”と呼び為す。

『昭和二十四年春、東京深川・枝川事件では、朝鮮人四人組が月島の繊維卸売問屋から純綿十二反を盗み出して巨利を得た。

当時の金で二十六万円なり。

(※作者注―公務員の月給、高給取りで五百円程度の時代、最低が四十二円、相当額を換算すると、高給取りの年給にしてほぼ四十二年分、ちなみに、煙草は希少価値で値が高くピース一箱七円なり)

警察が犯人を突き止め、捜査員二人が逮捕に向かう。

だが、その犯人が逃走しようとしたため威嚇発砲したところ、その様子を見ていた約四十人の朝鮮人が「仲間を殺そうとしたやつは殺してしまえ」と、捜査員二人に襲い掛かり袋叩きにした。

本署への通報で応援部隊が掛け付けたが、激しい抵抗に遭い、警察側に多数の負傷者が出たため、米軍憲兵隊に救援を要請、やっと、事態は鎮静した』(この項は警察庁資料より)

続いて、「かつぎ屋事情の追記」を記す。

『直江津黒井駅でヤミ米ブローカーの朝鮮人3名が列車の窓ガラスを割って乗り込もうとしたところ、ある日本人乗客に拒まれて乗り込むことができず、デッキにぶらさがって直江津まで行った。彼らは直江津駅でその日本人乗客に対し、「乗降口から乗れないので、仕方なくガラス窓を壊し乗ろうとしたのになぜ妨害した」と詰め寄ったが、日本人乗客が「窓から乗り込むという方法はない」と反駁したので、「朝鮮人に向かって生意気だ！ホームに降りろ。殺してやる!!!」と叫んで、その乗客をホームに引きずり出して、パイプやスコップで滅多打ちにして殺害した。朝鮮人3名はその後逮捕されたが、全員逃走してしまい、結局、うやむやのうちに終わってしまった』

(昭和二十年十二月二十九日に発生した直江津駅リンチ殺人事件。)

※当時の新聞記事より。昭和二十一年になると命がけの買出し旅行解消のために、一部では武装警官が列車に乗り込むようになった。

『強盗事件の容疑者として朝鮮人3名が逮捕され、そのうちの一人が警視庁富坂署に留置されていた。1月3日になって朝鮮人の集団が署内に乱入して、容疑者の釈放を要求したが署長が拒否し続けたため、朝鮮人たちが椅子や棍棒で襲いかかるなど暴徒化して、事実上警察署が占拠された。そして留置所に留置されていた容疑者を捜しあてて、署外に連れ出し逃走させた』

(※作者注―先述記あり。富坂署襲撃事件―昭和二十一年一月二日に発生) 無法地帯を地で行く暴虐三昧、さながらに“国対国”の向かい合い、一種の戦闘状態が、なおも、敗戦国では続いていたのだった。

#### 今も昔もアメ屋横丁

闇市譚―どこまでも話は続くが、今もその名残りを残す、「アメ横」のノガミ闇市物語にも少し触れておきたい。

昭和二十一年夏、約八十軒ほどの規模のマーケットが御徒町一帯に姿を現した。アメ横と言うからには、アメリカ物資が溢れたところと想像している人が多いが、さにあらず、原点は“芋アメ”だったそうで、甘味に飢えていた国民に“爆売れ”したのがきっかけ、人気商品がこの“芋アメ(朝鮮飴)”で、親指大の大きさを一個一円、それでも飛ぶように売れた。

ご存知の向きもあるかと思うが、“芋アメ”の製造法、蒸したさつま芋を卸金で漉して、擦り込んだ後、同量の水を加えて熱し、半のり状にし、さらに、数時間恒温槽で煮込み、糖化させて煮詰めたもの。

御徒町アメ横話、横道にそれたが、“芋アメ”から出発したアメ屋横丁、この地は、関西方面、特に、大阪、神戸、京都から上京して来た朝鮮人が主力となった。ここにも、関西商法がまかり通ったという。“エゲツナイ”

商法の始まりなんぞという人もいる。

アメ横に“砂糖ブーム”が起こったのは、昭和二十四年、一袋一二缶入りの砂糖が、どこからか多量に持ち込まれた。そんな中、当時の金で一億円の巨利を得た者もいた。

これらは、当時の関係者の言によると、米軍のPXから盗み出したものか、米軍側に不心得者がいて、うまく持ち掛けて、応分の金品を餌に取引きして得たものであった。

いずれにしろ、闇市で捌かれる商品の出処は不明のものが多く、これは、その一例である。やがて、芋アメ横丁は、アメリカものを多く扱うようになった。 “アメ横”の本来の意味、「アメリカもの」が店先に並ぶようになった。それらの品物、PXから流れる「Pモノ」、海外に出掛ける者が持ち込む「Bモノ」「ブランド」、パンパンガールがG・Iのルートで調達して来る「ミーモノ」「私物」なんて言い方があったようだ。

日本人対第三国人、この対立の構図はここでも変わることなく、繰り広げられた。アメ横の一带は、国電（JR）の変電所があったところで、空襲の類焼を守る見地から、元の住民は強制疎開をさせられ、大きな空き地となっていたので、上野駅から御徒町にかけての一带は格好のマーケット地となった。ここでの対立抗争だが、かなり、悪質なものが多い。

日本人闇商人として名のあった者が、権勢を揮っていたこともあり、また、彼らが警察の関係者に“貸し”を与えてうまく取り入っていたこともあり、第三国人側は不利な状況もあったからだ。

「〇〇宏済会」とか、「上野〇〇人露店組合」などの国名の分かる団体なども、抗争ごとを記したのものにはその名が残されている。

誰がどのようには、ここでは記さないが、抗争ごとは大掛かりだったのが窺え、第三国人の抵抗も、極に達した頃には、横丁の角々に機関銃が据えられたりもした。

また、日本人側などの構えた建屋に、朝鮮人が仕掛ける火つけが多くあ

り、日本人側が夜番で見張るといふ事態も多く発生していた。

闇市では旧日本軍の拳銃も売られて、「一触即発の緊張状態」が続いた。三国人の抵抗はすさまじかった。日本のヤクザ、テキヤ、それに連なる勢力も出入りしており、「昼でも銃声が聞こえたり、警官が一人で闇市に足を踏み入れようものなら殴り倒された」そんな時代であった。

また、米軍とて、安全ならず、浅草千束のマーケット近くでは六名の米兵が多数の朝鮮人に取り囲まれての暴行沙汰となり、真の戦勝国の人間であるはずの米軍兵士一人が死亡、二名負傷の事件も発生している。

#### 日本人死す！密造酒禍とヒロポン禍

日本の戦後は「闇市から発し闇市で終わった」という見方がある。最たる混乱期に、様々な人間模様を見ることが出来た。“人間の本性”がここではさらけ出され、醜さも、怖ろしさも、狡智さまでもが、すべて、焙り出される始末となった。また、手段を選ばぬ、その国の法律とも無縁な、「自分たちが法律だ」の思い上がり思考の下、彼らは“やりたい放題”のことをやり、無法地帯を闊歩して歩いた。荒稼ぎの結果、彼らは巨利を得た。

「闇市」で日銭稼ぎをし、ボロ儲けしたその資金は、今度は、“密造酒”と、覚せい剤の“ヒロポン”販売にも向けられた。

次なる巨利を得るためにだ。

もちろん、どちらも、闇市とは切っても切れぬもの、酒を飲みたがる人種も闇市に群れ、また、ヒロポンを求める者たちも、盛り場をうろついた。需要と供給があるところには、どこにでも、止まることを知らない第三国人の、飽くなき“成金根性”が顔を出す。

まずは、この間の諸事情について述べよう。

当時の状況を記した新聞記事の一文。

『ヒロポンとカストリ

覚せい剤、密造酒となると、これは第三人の独断場といった感があつた。ヒロポンやセドリンといった覚せい剤は、戦時中、軍需工場で作業能率を高めるために使われていただけで、一般には手に入らないものだったが、終戦によつてこれらが大量に放出されたことから、街娼や博徒、芸能人が使いはじめ、中毒者が増えていった。

悪化した中毒患者は幻覚、半狂乱といった症状を呈するようになり、これが原因で各種の犯罪を引き起こす事例が多発し、治安上の問題に発展した。特に第三人らが製造するヒロポンは、家内作業で密造するため不潔で、また、患者の要求に応じて即効性のある粗悪品だったから、品質の点でもさまざまな問題があつた。

覚せい剤密売の巢窟とみられていたのは、台東区浅草松濤町の部落で、約130世帯、230人の住民のうち約半数が朝鮮人で、覚せい剤の売り捌きを主な業としていた…云々』

次に、カストリの密造についての記述。

『この覚せい剤とともに大流行したのが、カストリの密造である。米不足からの酒不足に悩む大衆は、この安い酒に群らがつた。

工業用アルコールを主体とした“原子爆弾”とよばれた酒の弊害が叫ばれていたが、当時、このカストリはたちまち大衆酒場の“寵児”となつていった。家内作業で容易に密造することができることが、製造量を激増させた』

話が二分してしまうので、まずは、密造酒から話を追つてゆこう。

ひとつところに、かつ、川のあるところ、つまり、“水道完備ガス見込み”なんていう文化住宅のキャッチフレーズが二昔か三昔前に流行つたことがあるが、そういうのとは無縁の、ともかく、ひとまずは、“人の住めるところ”が彼らの集落になつていた。みんなが貧しく、誰も彼もが住むに適した地には住めない時代のこと、特に、この指摘に他意はない。

戦後の混乱期、誰だって貧しかった。

自分の貧乏ぶりを、「ああ、あの頃は…」と、語る資格のある者は、日本人として万余という。わたしだって、そりゃ母子家庭で貧しかった。

自慢して貧乏話をしてみたいぐらいだ。

脱線してはまずいので、話を元に戻す。

水道は??電気は??燃料は??

そんなのはちゃんと調達する才覚だけは並外れていて、水はドブ川から、電気は電柱から勝手に盗むのは朝飯前のこと、何にしても、元手のいらない“闇行為”である上に、みんな家内作業だから、コストも掛からず。

それでも、密造酒を作っている朝鮮部落を特定し、当然のことながら、警察は取締まりを行った。

『川崎で密造酒大検挙

川崎市櫻本町三丁目、入江町、水ノ江町の朝鮮人部落濁酒密造検挙は廿三日午前十一時半から行われた。横浜検察丁の〇〇検事、〇〇両検事の指揮の下に県警察本部公安課、経済防犯課、刑事三課、鶴見、川崎両署ならびに横浜市内各署からの応援を求め武装警官二百名と出動税務官吏百名が十数台のトラックに分乗、部落を包囲して交通を遮断し、〇〇川崎税務署長以下神奈川、横浜の両署からも応援の税務官百余名が片っぱしから実宅内の調査を始める。

多くの家には大カマドが置かれてあり、ボイラーをすえつけているものもある。タンス床下にはコウジや米がかくしてあるもの、糠で二重カベをつくってそのなかにコウジを入れてあるもの、つまれた藁のたばをどけてみると中からタルやカメにつめた酒がでてくる。もつとあるはずだと付近のアシの原っぱをさがしてしみると出てくるわ出てくるわタルづめの酒だ。部落の中はぶちまけた酒が芳じゅんな香りを放つ。路上に米をぶちまいていたものもある始末。

かくして午後六時半までに実に七時間にわたる大捜さくで証拠品に濁酒は密造者といっしよにトラック二十余台につままれて横浜検察庁にはこぼれた。今度の検挙は全国でも珍しい大がかりのものとなった。

《※密造酒八〇石、約一升ビン八〇本、原料の米、麦、麴等十数石押収蒸留設備その他多数差し押さへ》《2嫌疑者100余名を検束》

(神奈川新聞 昭和二十二年六月二五日号)

続いて、この大手入れの結果、朝鮮人一味から、取締り側は酷い報復を受ける。さらに、その新聞記事を追う。

『第一報〇〇暴漢に襲われ間税課長重態』

神奈川県税務間税課長〇〇は廿四日午後九時半ころ、京浜川崎駅前で数名の暴漢に襲われ、打つ、ける、なぐる暴行をうけてこん睡した。急をきいて川崎署員がかけたとき暴漢は逃走、〇〇氏は市立新川崎病院に収容手当を受けているが頭部と腹部の内出血で重態である。

(神奈川新聞 昭和二十二年六月六七日号)

『第二報 〇〇間税課長殉職』

さる廿三日、川崎署櫻本町付近の朝鮮人部落密造検挙に参加した神奈川県税務間税課長〇〇氏は(中略)廿六日午前十一時半腹部内出血がもとで遂に絶命殉職した。犯人は川崎署で厳偵中だがほぼ目星はついている。

(神奈川新聞 昭和二十二年六月二七日号)

次なる別件・高田ドロク事件

『昭和二十四年四月七日午前六時頃、取締部隊は朝鮮人集落に到着し一斉取締を開始した。早朝であったため、この取締りそのものは整然と行われ、午前八時三十分頃には引き上げた。』

午前十時四十分頃から朝鮮人たちが高田市警察署に集結し始め、正午頃になると200人に膨れ上がり、検挙者の釈放を要求した。

しかし、警察側が断固拒否したため、警察署に向って投石を行い窓ガラ

数十枚を破損させた。四月八日も朝鮮人約200人が警察署前に集結し、釈放を要求した。

四月九日正午、一人の朝鮮人女性が高田税務署に現れた。一人であったことから税務署を警備していた警察官も、一般の利用客と思って油断していたところ、あつという間に14、5人の朝鮮人女性が集まり、署長との面会を要求してきた。警備の警察官が退去を勧告したところ、「人殺し」と叫び座り込みをはじめた。

午後一時になると多くの朝鮮人男性が押しかけ、税務署内に突入しようとしたので、小競り合いになり双方に負傷者を出した。

四月十日、検挙者の自供により、高田市（現・上越市）においても密造酒の醸造が行われていることが判明したため、在日朝鮮人連盟信越支部などを家宅捜査した。

四月十一日、約500人の朝鮮人が高田市に集結、デモ行進を行った。彼らは市民に対して「警察が朝鮮人に対して不当な弾圧を加えている」「放火して高田市を灰にする」などと叫び牽制していた。

ここに至り、警察もデモの首謀者12人を検挙したため、この事件も収束に向い始めた』（新潟県警察史参照）

### 『多奈川町事件』

以前より多奈川町警察は、隣接の国家地方警察泉南地区署の応援を得、幾度も朝鮮人による密造酒の摘発を行っていたが後を絶たず、増加するばかりであった。

昭和二十六年三月二十四日、大阪国税局は、同局泉佐野税務署・大阪地方検察庁岸和田支部・国家地方警察泉南地方署と合同捜査会議を行い、一

斉摘発を決定。

昭和二十七年三月二十六日午前五時四十分ごろ、泉南署に、国税員45名・検事1名・副検事1名・検察事務官12名・制服警官50名の合同捜査チームが密造場所に向う。

納屋や豚小屋に偽装された密造工場の各所で、朝鮮人による抵抗に遭うも、検察庁職員によって容疑者逮捕、国税員によってドブロク・コウジ・蒸留機などの密造器具を証拠品として差押さえするなどし、各班は遂次南海電気鉄道多奈川駅前に集合。

この時、婦女子を先頭にした朝鮮人約200人がトラックの前に座り込んだり、大きな石をいくつも道路うえに置いて交通を妨害した。

これを排除しようとした警察官が激しい抵抗に遭っている間、手薄な警備に勢いを得た朝鮮人の数はさらに増え、ついには「生活権」を訴える怒号に煽動された朝鮮人が「殺してしまえ」とわめきながらトラックに殺到し、タイヤの空気を抜く、窓ガラスを叩き割る、トラックの運転手を袋叩きにする、差押さえた証拠品を叩き落として破壊・強奪する、被疑者を逃すなどの暴挙に出た。

この危機を脱したトラック3台は集合場所の大阪拘置所に向かったものの、残る台は駅前の国道で立ち往生となる。

1個班につき警察官5人と言う手薄な警備体制が招いた失敗であった。

不測の事態を受けた合同捜査チーム総指揮官〇〇検事及び泉南地区警察署長は、深日町警部派出所から国家地方警察大阪本部に応援を要請。検拳は後日に譲ることとし、後日の検拳に備え多数の現場写真を撮影、道路上の妨害を排除しつつタイヤの空気を入れなおし、午前7時半ごろ、捜査チームは泉南地区署に引き揚げた。

午前8時過ぎごろ、朝鮮人30名が多奈川派出所に押しかけ「俺たちの生活をどうしてくれる」と抗議。間もなく代表者3名が引き揚げる。

午前9ごろ、取材に来ていた○○新聞大阪支社の記者がドブろく密造地区捜査取材のため多奈川派出所に向う途中朝鮮人の暴徒に囲まれて殴打され、石を投げられ、全治二週間の怪我を負う事件が派生。また、この騒ぎで城東税務署員も右手に怪我を負っている』

『(記事一部省略) 同年三月二十日午前2時、検事らをはじめ、大阪府下8地区から制私服警官・警察学校生、約450名が大阪市城東区関目の大阪警察学校に集結。午前5時過、自動車・トラック約30台に分乗して多奈川町小田平、朝日、東、湊、深田町兵庫21ヶ所に急行し、逮捕、押収捜索にあたった。捜査員が被疑者を逮捕しようとした際、人糞を降りかけられ、手を噛まれる、水桶・たらい・マキなどを手当たり次第に投げつけられる。トウガラシの粉を投げて目つぶし戦術に出るといふようなことがあり、捜査員3名が打撲傷などを負ったが、前回ほど集団抵抗はみられなかった。』

三月三十日の検挙の際、朝鮮人1名が職務質問を受け逃走、追いついた警官ともみ合いになり拳銃の引き金が引かれ、弾が(※作者注―被害者警官)右腹部を貫通、重傷となり、数日後に死亡した』

(大阪府警察史、新聞記事など参照)

もう一つ、別の視点から付け加えれば「酒の質は劣悪なものばかり」と、この当時の政府発表の白書は苦々しげに伝えてもいる。また、清酒などと称する酒は、有名醸造元のラベルを偽造して販売していたともいう。

ちなみに、戦後の極端な米不足のため、正規の酒の生産量が落ち込んで

おり、昭和二十二年九月時点の数値を示すと密造酒生産量は50万2000キロリットで、正規の酒の34万3000キロリットを上回っていた。

終戦後に激増した密造酒製造者の検挙件数だが、報告されている数字によると、昭和二十年で八、五一〇件、昭和二十一年一一、六八六件、密造酒に対する取締りが強化されるにつれて、妨害活動は尖鋭化した。終戦直後は組織的な取締り執行の妨害、取締り直後の集団陳情などの抵抗も極めて激しく、その様相は、計画的、集団的な行動であった。

申し添えておくが、ドブロクの原料になる米は統制品であり、はなはだ入手困難の状況、それでも、彼らには大量入手のルートがあった。朝鮮人たちは行政職員への脅迫によって、米の配給を二重、三重に受給していた。

「そんな馬鹿な！」 飢えていた少年の今更ながらの呟き、いや、餓死して死んで行く者もいた世の中のことだ。こんな無理無体を通るわけもない。主食の米が払底し、日本国民が「飢餓の状態」にあった最中での“事実話”である。当時の新聞なら連日報道している。

また、「政府管理の米倉」から米を盗み出すなどは序の口で、“買出し列車のかつぎ屋”のルートでも容易に米は入手可能だった。

こちらは庶民いじめの悪どい手口だった。

買出し列車とて彼らの独断場なのは前述したが、何でもあり、買出し客の“米”を脅して巻き上げ、かつ、詐欺行為までやった。

その詐欺の手口は「〇〇の駅で警察の取締まりがあるらしい。次ぎの駅で降りた方がよさそうだ」と、ロコミの嘘ネタを流布して、次の駅で米を持っていく買出し客を降ろす。待ち構えていた暴力グループ連中が、否応なく、“米”を強奪し、予め、配車してあった盗難車の元軍用トラックにと取り込むという、悪辣な手法までも使った。

「仕入れ価格無料の米」が彼ら朝鮮人の手には渡っていたのだ。

“飲むと目が潰れる。失明する”と言われていたメチールアルコール、通称“ばくだん”と呼ばれていた物騒な酒も売られていた。

本来は工業用の薬品であるが、戦後すぐさまに闇市に出るようになった。この薬品は、中枢神経系統、特に、視神経に害を及ぼすので、当時、社会問題となった。

頭痛、めまい、不安感、激昂、精神不安定、呼吸困難など、高濃度で摂取すると、たちまちに、惰眠、意識混濁、昏睡、けいれん、急性呼吸不全、失明に至ることもありという、恐ろしい症状を呈するアルコール類。“ばくだん”とはその名の通り。

闇市の安酒場に行くと、当時、自家製で容易に造れる芋焼酎（カストリ）がよく飲まれた。どこでもいつでも、“のみすけ”たちは、より強い酒を好む傾向があるから、この、メチルアルコールが混入されていた。

客も承知ではあったが、この禁制品を密造するのにも、朝鮮人部落が登場する。工業用のアルコールそのものは安価で、かつ、入手し易いことから、含有物の「メチルアルコール」と「エチルアルコール」の沸点の差を利用し分離して、「メチル」とし、「酒」を作り出し供用したのが始まり。問題は、分溜が不完全なケースで、メチルアルコールが残留していると、失明などの大事に至るということにあいなるのであった。

前述の「朝鮮部落」への密造酒取締りで、押収品の中に、“蒸留品”と記されているのは、この工業用薬品を“ばくだん”に変える装置までも見つけたということを物語っている。

あまりにも、不毛の話ばかり続くので、少しだけ、「安酒談義・証言」も、挟んでおこう。

『カストリで憂さをはらす庶民―カストリとはドブクロを蒸留して作った粗製の焼酎である。コップを口もとに運んだだけでツーンツと異臭が鼻をつく。最初の一杯は鼻をつまんでのむほどだが、二杯目はかなり酩酊し三杯目は酔いつぶれる。（中略）カストリは闇市の最高のゼイタクだったし、酔えばハモニカ横丁が天国に見えたものだ』

(※③茶本繁正―闇の中の生活よりの「採録文」)

この懐旧談だがハモニカ横丁は、今でも、東京・吉祥寺駅前片隅に、やはり、ごちやごちやした一郭のままに残っているようだ。

少しだけの息抜き、酒好きにはたまらないひとときだったろうが、「魔の酒」には違いなかった。度数を強くすると、よく酔えるというので、メチルアルコールを多めに混入してある呑み屋は繁盛する傾向にあった。

呑み屋のカウンターなどには、アルコール度数を示した一升瓶なんぞも置かれていた。五十度、十度などと、その度数が一升瓶には貼られており、客の気を引いていた。

度数の強さに負けて、ついついに呑んでしまい失明しまった者が続出した。有名人もその災禍に遭ったので、新聞紙上にもこれらの者の名が何度も出たことあり。

麻薬市場に群がった者たち

まだまだ、無法者の彼らの“金が儲かるなら何をやってもいい”の極め付けの話は続く。

戦後ヒロポン禍と言われるものがあつた―覚醒剤と一般では呼ばれるアンフェタミン類の精神刺激薬である。敗戦時、ヒロポン漬けと言われた芸人たちが多くいた。常用するようになったのは、いわゆる戦争禍によるもの、戦時中、軍需工場の生産効率を上げるために「ヒロポン」が用いられ、その時の高揚感ゆえに止められなくなったとか、また、死線に挑む特攻隊員の士気を高揚させるために、この手の覚醒剤が打たれたなどと言うまことしやかな話も巷間に伝わっていた。

一説、攻撃などでの恐怖心を取り除くのが「突撃錠」、夜間作業、作戦、歩哨、通信などに従事する者には「猫目錠」が渡されていたとも言う。

ほんの少し前、戦前の日々には、堂々と、新聞広告でも、“疲労の防止と

快復に！最新徐倦覺醒剤 ヒロポン”の文字が躍っていた“元氣薬”で製薬会社の名も示されていて、その時期は禁制品ではなかった。

昭和二十五年頃になって、やっと「乱用要件」が社会問題となり、昭和二十九年になって、遅まきながらも法体制が確立、取締りが強化され、「覚せい剤問題対策推進中央本部」が設けられた。

需要と供給にわかに、密造グループが暗躍するようになる。元々、怪しげなヒロポンを作り、儲けていた連中どもにとっては、俄然、大々商機到来となった。取締り強化となれば品薄になるのは必定なり。

やはり、戦後の闇市流れ派―朝鮮人グループなどが、この機を逃すはずはなく、警察対密造グループとの「対立構図」が、ここでも、繰り広げられることとなった。

「覚せい剤事犯の根源となっている覚せい剤及び覚せい剤原材料の密造密売、密輸入事犯並びに営利目的又は常習として敢行せられる覚せい剤事犯等悪質事犯で、集中的な取締りが行われた結果、昭和29年10月から12月の3か月間に、密造事犯として400件・697人が検挙されています」

と、ひとまずの成果をまとめた取締まり側の発表が為されているが、野放しの状況はしばらく続く。ヤミ市場に流通する不正品は後を絶たず。また、覚醒剤のかたちも変化が生じ、手軽スタイル、いつでもどこでも、かつ、安い単価で購入出来る“アンプルタイプ”にかたちが変わった。その分、普及可能で、使用者の裾野を広げた。

この間、国会でも問題になり質疑あり。当時の警視総監が答えている。「現在…やみに出て流れておりますのは…：きわめて簡単な方法によって作られておるものでございます。つくる方法としましては、御承知のように白金または銀を触媒としてフェドリンから製造する製造方法としてはこれが一番簡単でございますので、これによって原末をつくって、蒸留水または水に、一定の割合で混じて、自家製のアンプルに溶閉して、これをレ

ッテルも張らずに流してしまふ……朝鮮人等におきましては、原末を大阪方面から(中略)ひそかに持つて参りまして自宅でもって水道の水、または蒸留水で割りまして、アンプルに溶閉してこれをひそかに売り出す。これが現在都内にも相当流れておるのじゃないか、かように考えております」

「もうひとつの密造グループは、地下市場で原末を入手し、これを水溶液にしてアンプル詰めを行ふ。アンプル屋と呼ばれる人たちですが、実は、この時期に覚せい剤取り締りの主要な標的とされた密造者は、このアンプル詰め加工に携わる多数の人たちでした。(中略)新聞に出ている、普通密造としてあげられている連中は、そういうもの(※作者注―密造された原末)を買つて来まして、それを水に溶いてアンプルへ詰めるという仕事をやっておるのであります。これはごく簡単に、それこそ裏長屋の三畳の戸だなの中でも、アルコールランプさえあればできるもので、これが大抵たいあげられる」

(※作者注―関西が出所の覚醒剤は赤ネタの通称で粗悪品)

実態はこの通りだが、覚醒剤に関しての貴重にして、かつ、重要内容もあるようなので、視点を百八十度変えて、ヒロポンなどに対するものの方の一部を記載しておく。

『一九五九年(※昭和三十四年)十一月、兵庫県警防犯課は朝鮮人の覚醒剤(ヒロポン)密造密売組織を内偵調査していたが、尼崎市在住の〇〇(※原文は朝鮮人名)を覚醒剤取締り法違反の疑いで逮捕した。そして〇〇の自宅隣の豚小屋から覚醒剤の原末一、二キロ(末端価格一億二千万円)と真空ポンプなど五四点の製造器具を押収した。ここで押収された覚醒剤の量は、県警始まって以来最高となった。(兵庫県警察史)』

この頃、三宮の中心地にある神戸の国際マーケットは、覚醒剤の「密輸基地」として全国的に有名でその名が知れ渡っていた。

港のあるところ、下関、横浜、そして、日本海側の対馬島嶼なども、麻薬取引の拠点となった。

『戦後日本の「ヒロポン時代」の特徴は、密造、密売、投棄のすべてが日本国内で行われていたという点、そして、組織犯罪集団との関連性がとりたててなかったという点にあった。日本政府が覚醒剤取締法をつくり、「ヒロポン」の使用を犯罪と規定して取り締まるようになった五〇年代半ば、この世界に変化が起こった。使用すること自体が犯罪とされるようになった。「ヒロポン」は地下に潜行するようになり、その密造と流通に「ヤクザ」組織が手を伸ばしはじめたのである。しかし、この変化は、当時はあまり重要視されなかった。日本当局の取り締まり強化は、シヤブ犯罪を暴力団の掌中に収めさせただけでなく、韓国系の密造技術者たちを故郷・韓国に逃避させ、犯罪の種を撒き散らす結果をもたらした』( )

※作者註資料⑪「シヤブ 知られざる犯罪地下帝国の生態」 趙甲濟 黄民基訳より JICC出版

この問題に関連した一文を次に示す。

「密造拠点は韓国へ―覚せい剤の半世紀

弁護士 小森 榮の薬物問題ノート」より転載

(※作者注―抄録の記載方式)

『：韓国からの覚せい剤密輸が本格化したのは昭和四十五年ころからで、その後昭和五十八年までの10年以上にわたって、わが国で摘発される覚せい剤密輸において、韓国は、供給地の第一位を占め続けます。韓国ルート<sup>1</sup>の覚せい剤の密輸押収額がピークに達した昭和五十六年では、密輸押収量102、8キログラムのうち、74、4% (76、5キログラム) が韓国を供給地とするものでした』

『ヒロポンの時代、密造者として検挙された人たちの中に、朝鮮半島出身者が際立って多かったことが、当時の警察の集計で知られています。(中略)昭和二十九年に警察は覚せい剤事犯に対する集中取締りを実施しましたが、取締り開始直後の同年10月に検挙された密造事犯者の54、8%が朝鮮

人または中国人だったといひます。日本でヒロポン製造に関わった人たちが、その後、帰国し、韓国に覚せい剤製造の技術を伝えたことが容易に推察することができます』

『いっぽう、日本の暴力団も韓国に進出して、韓国の密造グループと連携して覚せい剤の密造や密輸に関与し始めますが、昭和五十四年版警察白書には「最近では暴力団関係者がこれらの国に駐在し、現地人と結託して大規模な密造密輸組織を作り…云々」などの記述あり。

更に、一韓国人新聞記者のルポルタージュ、「シャブ 知られざる犯罪地下帝国 趙 甲済著」の記事より抜粋。

『私はシャブ(覚醒剤)がもたらす途方もない利ザヤに目がくらみ、“灯火”に飛び込んでくるむしのように密造、密輸入に群がる犯罪者たちと出会い、興味を抱くようになった。そして、日本の組織暴力団が背後勢力としてからみ、国際的な規模と機動性をもったシャブ犯罪の取材に興味を持ちながら取り組んでみて、初めて問題の深刻さに気づかされた。

(中略)私は一九八四年一月、シャブ問題取材のために日本へ向った。当時、日本で流れているシャブの大部分は韓国から密輸入されたものだった。日本の警察はシャブ犯罪を最大の社会問題として考え、その対策に総力を傾けていた。わずか、数十名の専従員をもって、数千人のシャブ犯罪者たちを追っていた。犯罪者たちの誘惑に乗ったシャブ常用者は泥ぬまにはまり込み、もがき苦しんだりしているのに韓国の捜査の実情はあまりにも安易であった。当時、無勧告の政府やマスコミはシャブ問題を「対岸の火事」を見物するように見ていた。数百万にもものぼる常習者たちが常用しているのは、ほとんど、韓国で作られたシャブだったが、韓国では、常用者が少なく、日本への密輸出で多額の外貨を稼いでいるのでないかという安堵感が広がっていた。(中略)次に、シャブ犯罪に対する「罪の欠如」をあげざるを得ない。率直に話そう。「ヒロポンの密輸がなぜ悪いのか？日本の奴らに目いっぱいヒロポンを送りつけ、奴らをみんなヒロポン漬けにす

れば胸の内がスッキリするではないか」「われわれも輸出できるものをもつていけば自慢すべきことになるのではないか。ハハハ」

最後の件りは、少し悪意に過ぎる箇所を表出してあるが、これは一部の者の見方であり、この部分を強調する意図は当方にはない。

さらに、この敏腕記者は続ける。

『韓国が日本のヤクザの裏庭になって久しい。二十五万人の日本警察が目を見らざる自国でできないことを彼らは韓国に来てする』の指摘がある通り、日本ヤクザがこの巨大利権の差配をしていたのは周知のこと、もっとも、暴力団の人員構成には次のような一文もある。

『暴力団の世界には韓国人が多い。民族差別の問題を刺激するおそれがあるため、詳しいことは書き控えるが、少なくとも六〇七〇％は韓国人だろう。私が後に大阪、神戸の警察署で確認したこの二地域の暴力団のうち韓国人は一〇％ほどで、広島は五％だった。彼らは親戚のある韓国によく行き来することができ、シャブの密輸ルートを構築するのに有利な立場にあった』と、その構成員についても触れている。

別の視点から、このシャブ・コネクションを観察してみる要もある。いわゆる第三国人の範疇でこの問題を透察すれば、別の貌も浮かんで来る。次の記述がそのことを物語っている。

ここには台湾コンツェルンが登場する。

『原材料は華僑の○某（五一歳）と○某（七三歳）が主役だった。（中略）八二年九月、韓国貨物船で船員を台湾の基隆市に送り、中国人から原料七五キロを密輸入するなど、香港・台湾ルートに代わる台湾ルートを新たに開拓した』と、第三人関与を指摘している。

（※作者注―華僑実名曹積傑、張世昌）

いずれも、日本暴力団が背後には潜んでおり、闇市支配の時の構図のような、「続きの続きの、さらなる闇市始末記」が、シャブ・コネクションの闇の世界では罷り通っているということになる。さらに、この追跡者の評

価すべき取材行記事に、これらの問題とは不即不離の関係にある重大指摘もあるのです、その一節も借りることにする。

真のコリアン・コネクション、その、奥深い闇の世界への接近を彼は大胆に試みている。

『日本のヤクザの実力を知るために、ここでしばらく、三人の巨頭の生涯を探ってみる必要がある。日本の政界の黒幕だった〇某と、Y組の〇某、東京の“夜の警察署長”と呼ばれた〇某がその巨頭である』

(\*作者注 夜の警察署長は在日韓国人、

日本人フィクサーは小佐野賢司)

と、あり、前記の趙記者は、今回の取材行もコリアン・コネクションの根元を掘り起こすのが重要な目標だったとも述べている。

日本でも出版されたことにも、この際、大いなる意味が見出せるということなのかも知れない。読む者の意も問われている。

この問題には、「事態処理に対する始末」なるものがないーもちろん、それらしき「始末記」が、この場で記せるはずもない。

#### 闇市の終わりが日本の夜明け

露店、マーケットなどの「闇市」に対する当局側の取締りは、昭和二十一年以降、厳しくなった。順次、体制も整い、警視庁は昭和二十一年二月六日「臨時取締り規則」を発令した。さらに、この実施策を強化するため警視庁令第一〇号「露店営業取締り規則」を加えた。

「露店が悪の温床」だという世間の批判に対して、各種団体の代表者は恭順の意を示し、おおむね、当局の意向に従った。

もつとも、勢力地図を窺い見れば何でもありの「闇市」の下で、しっかりと根を張った者たちであった。テキヤあり博徒あり、そして、華僑連合、朝鮮人徒輩などいずれもスネに傷を持つ連中には違いなかった。

もちろん、利得既存勢力などもこの内に入る。

当然の世の流れながら、そんな闇市隆盛の時期も、やがてのこと衰退期を迎える。世論も許さなくなり、取締りも強化で、彼らの闇市稼業も次第に窮屈になって行った。

行政側の露店整理の実施が始まると、当然のことながら、大反対運動が起きた。各種団体個人が、決起した。その時のプラカードには“露店撤廃絶対反対、弱者の生活を守れ”“悲痛な叫び、血を吐く言々旬々”“人、人、人が渦巻く”などのスローガンまでも生まれた。

『戦後の日本の復興は闇市から始まった』というのは、わたしも事実だとは思う。

何事も、「現場に強い人間」が真実を知っている―まとめに、当時、東京街商協同組合理事長であり、また、一部で詩人として知られた坂田浩一郎の述懐をここに掲げる。  
(※註③―掲載文よりの転載引用)

『露店は戦災復興のパイオニアだった。流通ルートが麻痺し、商店もデパートも再開できずにいるとき、われわれは焼跡を整理し、そこにズリ(ゴザ)を敷いて店を開いた。電力会社を動かして、まっ暗闇の焼跡に灯をともしたのもわれわれだ。強盗タウンだった焼跡に灯がともると、お客さんが、どつとばかりに押し寄せてきた。しかし、戦災の復興工事が軌道になり、商業資本が力をとりもどしてくるとわれわれは露店からはじき出された。掃除をさせ、灯をともさせ、お客さん呼びもどしたらもうおまえらに用はない、というわけだ。考えてみればいつの時代でもそうだった。古い地図をひろげると、はっきりそれがわかる。いま商店街や盛り場として有名なところは、むかしはみんな露店がずらりと軒をつらねていた地帯だ。町がきれいになってお客さんが集まってくると、大手の商業資本が進出してきて露店をあっという間に商店街にかえてしまう。たのまれもしないのに、グレン隊が入り込んでくれば生命を張って締め出したこともある。そのときは適当におだてておいて、用済みになれば邪魔者あつかいする。わ

りにあわない稼業だよ』

別の視点から「闇市話」を採り上げ、この一節は終わることにしようと思う。「へえー、そんなのお、ありなのお?」と言う。「ネズミ算」より「ブタ算」?の方がお得?の面白いネタを一つ提供させてもらおう。

いや、「日本の高度経済成長は闇市から」の説もあるのだが、「金儲けの術の秘訣」とやら、その極意がここにはあるかも知れぬので、こっそりと皆さまには耳打ちしておこう。日本には“ねずみ算”というのがある。

まずは、「話」の前振り、余得話を、とくと、お楽しみあれかし。

ネズミの一つがいあり。父母より出でて、子を十二匹生む。このねずみがさらにまた子を生みというねずみ算、一年間に産み落とされるはずのネズミの数は二百七十六億八千二百五十七万四千四百二匹となるのだが…。

さて、これが「豚」ならどうなるか?

神戸・三宮国際マーケットでの話、この地は、国際港神戸は朝鮮半島、台湾などとの船便物資の流通基地の観も呈していたので、物が豊富にあつた。その分、国際マーケットも隆盛を極めた。

当時のテナント入居者の内訳は、朝鮮人が六割、日本人が三割、残りは中国人、台湾人、白系ロシア人、トルコ人、イタリヤ人、ギリシヤ人と、さすがに国際都市のこと、国際色も豊かだった。

この地は、「闇市後日譚」となるが、あちらこちらに点在していた無法地帯の闇市を一ヶ所にまとめて発足した「新興の闇市」、行政側が主導して建てられた「市」で、闇市隆盛の当時は、行政の浅はかな知恵が働いて、「国際マーケット」なる立派な名もついていた。

もちろん、不法占拠の闇市が整理統合された際、“闇市陣取り派”の連中は応分の分け前、立ち退き料をせしめ、代替の店も都合させた。

その仔細は闇のまた闇なりし話なり。

さて、さて、最後に「豚の話」をするのだった。この国際マーケット発

の話が面白そうな「豚の話」なので、筆を進める。まずは、この話、事の発端は当時の地元新聞報道からで、当時の状況が手に取るように分かる。

読者からの切々の投稿文の一節。

『国際都市と言いなながら街の中にブタ小屋が多く、街路やミヅに流す汚物や、エサを煮るにおいが臭くてたまらん。それにハエがぶんぶんわいて非衛生きわまる。勝手に小屋を建て一坪や二坪の狭いところで一〇頭、二〇頭をすしづめにして飼育してもいいものでしょうか。掘立小屋同然のエサを煮るカマドの煙突が短く、火の粉が飛んで火災の危険も多分にある。なんとかならないものだろうか』

この住民が指弾した豚小屋が林立する街中の地域とは、推察しか出来ないが、旧葺合区、旧生田区の一部（現在は中央区に統合）の生田川筋などの利便の地に多くは陣取っていた可能性あり。

三宮駅から大阪寄りに一つの目の駅、阪神・阪急電車の各春日野道駅近くの周辺あたりの地域なども該当するのではないか。

あちらこちらにと点在もしていたことだろうから、今更に特定地域を上げるのは難しい。何しろ、焼跡に突然に現れた豚小屋、どこまでがどこまでとは決められはしない。

下司の勘ぐりーこの繁華街に近い至便の一等地、今では誰の所有地なのかを知りたくなる誘惑にも駆られるのだが、さて、さてと…。

密集したバラック街のあちらこちらに、我が物顔に約二十軒ほどの豚小屋が、この時期、ところ狭しと建っていたらしい。

そこでは常時ン百頭の豚が飼育されており、せまい路地からは、「ブーブー」と、鼻音を鳴らす豚どもの煩い鳴き声が響き渡っていた。

一軒で十数頭も飼えばその数はおよそ、二、三百頭ともなりしか。

なかなか壮観な眺めでもあろうが、その巨体から発せられる鼻をつく異臭、不衛生なんてものではない。それに、狭い小屋の入り口に積み上げられた残飯類、魚のアラに腐りかけた野菜の類など、その上、糞尿処理場

とてないので、そのままに豚の排泄物があたりには滞積していた。

排泄路を求めても無理で、路地に糞尿がたまるのは当たり前のこと、真つ黒にハエもたかつて、ぶんぶん羽根音も立てている。

とにもかくにも、この近所になんぞ住んでいたら、とても、生活してはられない。我が家の食卓をもハエの群れが襲う。新聞への投書もむべなるかなの、これは住む者にとっては、緊急非難事態なのであった。

当時の食糧事情、闇市事情を探れば、ごもつともこの豚小屋事情ではあるのだが、それにしても、焼野原状態を利用して不意なる闖入者となった者たちのこのザマをよく考えてもらいたい。

れつきとした市街地、しかも、三宮の中心地、何の既得権か知らぬが、よくもこんな地に豚小屋なんぞを、作れたものだ。

焼野原だったからと言ったって、どこにもここにも豚小屋か！まあ、この豚小屋もいわば敗戦の副産物そのものではあるが…。

終戦直後で、肉類が欠乏しており、肉と名がつけば飛ぶように売れた時代のこと、肉イコール金、金に目が眩んだ連中が目を付けるには格好の商法が、ここにも罷り通っていたのだ。ともかく、儲かればそれでよろし。

当時の価格では豚肉一〇〇匁が二〇〇円にもなるという時代、(※作者注 一匁は三百グラム相当) さらに子豚が生まれれば一頭一万円以上の売値があった。最初の一頭が二頭になりやがて十数頭にとあいなるのが、私の言う“ブタ算方式”というやつである。いくらでも増える。

やがて、我れ先にと次々と同業者が現れて、瞬く間に二十数軒にはなろうかという豚の飼育業者が誕生することになった。

増えに増えて、豚の数も二百頭以上、壮観とも言うべきだが、近所に住む者にとつてはたまったものではない。

ここで、“ブタ算”を試みてみると、一頭のメス豚は一年に二、三回の分娩をし、大体のところ、一回に十頭程度の数のコブタを生むとある。“ブタ算”どこまで膨らむか？ 子豚一頭の値段が、一万円以上也。

メス豚一頭が一年に二回、雄雌合めて十頭生んだとして二十頭となるが、それだけでも、二十万円？もちろん、雌豚なら、なおよろし。

“豚コレラ”なんぞもあるから、みんながみんな無事に育ってくれたらの話にはなるが、それでも、ボロイ儲け話には違いない。

当時の公務員の月給が高給取りで「五百五十円」程度、比較の仕様もな  
いが、まさに、「錬金術」、ここで少しばかり、下司（げす）の勘ぐり法ではあるが、計算を試みてみよう。

敗戦後のインフレ率は五十九パーセントの高率ではあるが、“ブタ算”による「メス豚一頭分」の稼ぎ、一年に二十頭生んで二十万円也と想定した場合、公務員給料五五〇円と単純比較してみると、何と、ほぼ三十年分、公務員の「一生涯の給付分」が、メス豚一頭の出産能力をもつてすれば、たったの一年で儲かる勘定となるのだ。怖ろしい。

こんなボロイ商売、わが国のバブル期にだって、あんまり耳にしたことはない話だ。第三国人の「無理無体の何でもあり生活法」については、先達日本人の「怒りを込めた一文」がwebサイトには残されているので、ここに「総まとめ」として収録しておこう。

土地の不法収奪行為についても一部触れているので、その点にも、ご注目あれかし。  
(自称北斗星氏・註―資料①原文のまま)

『戦後の第三国人どもは本當に酷かった 軍の兵器を盗んで来たらしく三八式銃で武装し 小銃には着剣して強盗強姦傷害恐迫不動産窃取 時には殺人まで 経済犯 實力犯を中心にあらゆる悪事を重ねてみた 斯うして情勢に便乗し 朝鮮人は「朝鮮進駐軍」と僭称して堂々と闇商売を行ひ 派手に稼ぎまくってゐた そりゃ儲かるだろう 取締を横目に犯罪のし放題 警察の検問を竹槍日本刀を振り回して強行突破したのだから當時は物不足で 賣る方は素人ばかりでも出来た 仕入れこそ難しかったのだが 彼等は日本人露店商を襲って商品を奪ふのだから 其の警察が黙認して捕まへないのだから こりゃあ損のし様が無い』

『土地も屋敷も物資も操も 奪ひ放題であった 闇 賭博傷害 強盗事件が多く 殊には 空襲や疎開で一時的に空いていた土地が片っ端から強奪された 今 朝鮮人が駅前の一等地にパチンコ屋や焼肉店を営業してゐるのは 皆なあの時奪った土地だ』

『警察が襲撃されること頻りで 署長が叩きのめされたり 捜査主任が手錠を掛けられ半殺しにされるぐらいは珍しくなかった 上野で朝鮮人経営の焼肉店へ国税局査察部が査察に入った際 大金庫を開けて手を入れた瞬間を狙って二十人ぐらいで一斉に金庫の扉を押したものだから査察官は腕を切断された』

『堪りかねた警察が密かにヤクザに頼み込み 「浜松大戦争」になった訳だが 「小戦争」は日本中に頻発した 最後の頼みの聯合軍であったが 遂には其の憲兵隊でも手に負へぬ非常事態に立ち至った 其で流石に米軍も腹に据へかね 日本全域占領を担当してゐたアイケルバーガー中将が 関東と言はず関西と言はず はたまた北九州と言はず不逞朝鮮人活動地域に正規戦闘部隊の大軍を出動させ街頭に布陣して簡易陣地を築き 重装甲車両を並べ 人の背丈程に大きな重機関銃を構へて不逞朝鮮人共にピタリと狙ひをつけ 漸く沈下した 我々は其の火器の煌めきを間近に見た』

(※これらの実相話は、当時を生きた北斗星さんの談話の一部)

浜松大戦争―朝鮮人と地元テキヤ一家との抗争だが、数日間の戦闘で死者負傷者300人を出す、MP400人が出動し沈静化した。(＃市民有志からテキヤ一家に金一封の見舞金を送られたという大真面目の話つき)

この手の痛憤の文、追ってゆけば切りがないのだが、先達氏の切々の思いが込められた次なる伝言、わたしも感じ入るところがあるので、「わがメッセージ」を返させて頂く思いでここに掲げた。同感なり。

これらの、憂国の士のSOS発信は、もう、ン数十年前のこと、その後の世の成り行きを考えれば、さらさらに、この発信の持つ意味が、その根元にある「敗戦国事情」と重なって、色々と見えて来るようだ。

この章の終わりは、先達氏の穏やかなるお人柄に応じて、穏やかなる文言を添えておこう。ゆつくりとした喋り口でのメッセージだ。

『近頃の報道人は齢も若く、当時の経緯語感が全然判らないのだろう。知り合ひの報道人幾人かに電話しても、テレヴィにでも新聞にでも出て、歴史の眞實を話して進ぜやうと申し入れたら皆、検討させて下さいと逃げてしまった。眞面目に報道する気はないのかの』

『貴公 パソコン通信を遣つてなさるそうじゃが、インターネットとやらは随分と情報を発信出来て、幾百万の人が見ると聞く、一つ満天下の正義の為に、今の話を発信して下さらんか』

これ、穏やかなる口調なりしが、怒髪天を衝く、天の声なりし。いや、「日本国は二度と負けてはならぬ」の「天の声」「人の声」の声なりしか。

#### 第四章 ソ連邦国人の不参戦始末記

##### 何処（いずこ）にぞ行かむ人の道

かつて、ソ連邦という国があった。

正式にはソビエト社会主義共和国連邦という。ロシア、ウクライナ、白ロシア、ウズベク、カザフ、グルジア、アゼルバイジャン、リトアニア、モルダビア、ラトビア、キルギス、ダジク、アルメニア、トルクメン、エストニアなどの各共和国によって形成された元国家である。

東西ドイツの壁が破れて以降、各連邦国の独立などがあり、大きく変動して、今はロシアと言いついては、これからの話は、スターリン率いる「悪しきソビエト国」の物語なり。

ヨシフ・ヴィサリオノヴィチ・スターリンの名で知られるが、これは筆名なりとか。その筆名、スターリンとは直訳すると「鋼鉄の人」の意で、そうありたいと願ったこの男は、鋼鉄の理念の下、爾後、共産主義国家を強大国家にと変貌させた。

本来なら、どう、この国が日本と戦ったかと言うのは、大筋から外れるのだが、「戦後の日本」が置かれた厳しい状況を考えると、どうしても、日本へのソ連参戦の経緯は洗いなおして置かねばならない。

終戦間際の八月六日に原爆が広島に投下された日、日本とは戦っていないソ連はこのままでは敗戦国側からの戦後処理の「分け前がもらえない」と思い立ち、すぐさまに参戦して来た。分かり易く言えば、不意の参

戦であり、ソ連邦は「戦勝国」の仲間入りを果たそうとしたのだ。

日ソ間には昭和十六年に結んだ不可侵条約があり、また、終戦を決めた日本政府が外交ルートを通って、「終戦の仲介役」をソ連に打診している最中のこと、日本がぎりぎりの状態にあるのを事前にソ連は知っていた経緯があり、よもや、その国が参戦はしてくるまいの日本側の油断もあったが、突如、ソ連は参戦に踏み切った。

八月九日未明、総兵力百五十七万といわれる極東ソ連軍が国境を越えて、日本国が樹ち立てた「満州国」になだれを打って侵入して来た。

傀儡（かいらい）政権と言われた満州王国の皇帝、溥儀の下、「満州国」が築かれていたのだが、日本の関東軍壊滅とともに、残された邦人たちの一団は、その殆どが、その地に遺棄される運命となった。

日本の国策でもあった移民政策で「満州開拓団」に加わり入植していた者を始め、満州鉄道などの維持管理者、その家族、また、インフラ事業など、諸策に携わっていた者たちの多くの日本人が帰国への道を塞がれた。

その数、二十七万とも三十二万人も言われる。そのうち日本に帰国できた者は十一万人でしかなく、この数字は「敗残の道」の厳しさを何よりも物語っている。

取り残された弱者たち―そのほとんどは、老人、婦女子で小さな子供、幼子も含まれていた。それに、緊急の場のこと、男たちは狩り出されていて、みんな無防備だった。

欲しいままの武力をかざしてやって来たソ連軍兵士どもは、いきなりの「戦勝国」気分浸ってか、ここでも、あらん限りの悪逆非道な蛮行を行った。悪名を欲しいままにした“山男軍団”として、世界でも怖れられた連中であつた。一説では、監獄に入れられていた凶悪犯の連中を野に放ち、弾除け代わりに先陣に立てたの流布話も、まことしやかに伝えられている。何しろ、他国でもソ連兵の評判は悪い。

独軍、ヒトラーが敗北したベルリンでも、ソ連兵の暴虐の行為は目に余

った。或る医師が発表した推定による犠牲者数は、(ベルリンの二つの主要病院によるもの) 九万五千人乃至十三万人、レイプによる死者が一人前後、多くは自殺だった。

全体では二百万人を越える女性がソ連兵の餌食になったという。

スターリン自らが兵士どもに声を掛けた。

「ドイツ人の夫が東部戦線にいる今、おまえたちは人種優越性にひたるドイツ人女性に充分に陵辱を加えよ。焼き、殺し、犯すのだ」

かくて、豹狼と化したソ連兵どもは、ドイツ人女性に暴虐の限りを尽くした。被害者は墮胎者だけで数百万人に達したという。

「ベルリン終戦日記 ある女性の記録 山本浩訳 白水社刊」の記した一文には、生々しい記録が残されているので一部を紹介。

『ソ連軍兵士たちは、年齢に関係なく全ての女性をレイプした。彼らの暴力行為は現代に生きる筆者の想像を超える凶暴さであり、明白な『人道に反する犯罪』である。(中略)

ダーレム(ベルリン市内)の産院と修道院を兼ねる『ハウスダーレム』では、修道女、若い娘、老女、妊婦、出産したばかりの母親が、みんな容赦なく暴行(レイプ)された』

この書は、生前の出版時作者が非難の嵐に曝されたことがあるので、彼女の死後、作者の署名なしの体裁に改められて再出版された。

同様に、日本人女性が出版した「竹林はるかに遠く ヨーコ・カワシマ ハート出版」も、一部に、満州からの引揚時に、鮮人たちが日本人女性を犯していると思われる実録場面描写(京城、釜山にて)があったため韓国系アメリカ人による反発を受け、アメリカで教科書にも採用されたものが中止の措置を受け、日本でも出版が大幅に遅れた経緯がある。

ソ連兵士どもの蛮行を追記してゆく。

(※註資料⑫)

(「戦後引揚げの記録 若槻泰雄 扶桑社刊」の一文より)

『満州に侵入したソ連軍は八月十九日には、早くも外部との一切の通信交

通を遮断した。そして世界の目から隔絶された中で、ソ連の軍隊はほとんど例外なく、被占領国である日本人の上に強奪・暴行・婦女暴行をほしまにしたのである。(中略)抵抗するもの、あるいは、これを阻止しようとするものは容赦なく射殺する。窓を閉じ、扉に鍵をしめ、更には入口を釘で打ちつけていても無駄である。軍隊が本気で民家に侵入しようとするならば、そんな程度のもを打ち壊すのはいとも簡単であろう』

『荒れ狂う婦女暴行―ソ連兵の日本婦人への暴行は、すさまじいの一語に尽きる。それが十二、三歳の少女であろうと、七十近い老婆であろうと、そして、人前で有ろうと、また雪の上であろうとも、そういうことは全く頓着しなかった。樺太の場合同様、女性たちは丸坊主になり顔に墨をぬり男装して難を逃れようとしたが、彼らは一人一人胸をさわって女であることを確かめると引き立てていった。南満へ疎開した人たちが、終戦後また新京の自分の家に帰る途中、公主嶺の駅で、進駐してきたソ連軍の列車とばったり出くわしたとき起こった事件は、「誰知らぬ者もない事実」だという。それは、あわてて発車しようとする日本人の乗っている列車をソ連兵が止め、女は一人残らずプラットホームに降ろされ、「白日の下、夫や子供や公衆のまん前で集団暴行を受けた」のである。

もとより日本人女性のすべてが易々諾々とソ連兵の毒牙に身を任せただけではない。凌辱に耐えかねて死をもって抗議する若い婦人、暴行から身を守ろうとみずから死を選ぶ人妻もいた。例えば敦化(とんか)の日満バブルKKの社宅では、ソ連軍は命令によって男と女を分離させ、一七〇人の婦女子全員を独身寮に監禁し、夜となく昼となく暴行の限りを尽くしたが、この際二三人の女性は青酸カリによって自殺している』

この事例は敦化事件と呼ばれている―他にも、クラブ従業員の女性二人を拉致し、数時間後には一人はぼろぼろになって、もう一人の若い娘は、牡丹江に流されて行方不明となった。

これらの引揚者は難民であり、難民たちに暴虐の行為を加えるのは『人

道に反する犯罪』であるのは間違いないことだ。

対外戦争、民族紛争、人種差別、宗教的弾圧、政治的迫害、経済的困窮、自然災害、飢餓、伝染病などに遭遇し、自立では生存が適わぬ者たちが「難民」に該当する。

戦後、外地やその他の地域から引揚げた日本人の数は旧満州国や大連地区から一二三万人、北朝鮮地域から三〇万人、韓国地域から四二万人、中国地域から五〇万人、台湾地区から三二万人、その他の南方地区を含めると、約六三〇万人もの日本人が“難民”となった。

逃げ道を塞がれた弱者である一般邦人たちの悲劇―破れた国の悲惨さがここより始まる。

とりわけ、満州、北朝鮮在住の日本人は日本に帰国するまでの道程の長さが障壁であると同時に、引揚げが一年以上も先送りされたり、また、引揚げ業務が正式に開始されたのが、昭和四十六年十二月に入ってからとなったことで、その間、犠牲者を多く出した。これらの行路で、餓死・凍傷・伝染病で亡くなった者が三万五千人ほどもいた。多くは、言うまでもなく、老人、子供、幼児たちであった。

#### 満蒙開拓団の敗残始末記

当時の日本政府の政策により、旧大陸の旧満州、内蒙古、華北に、日本人が入植し、新天地を拓こうとした。一九三二年から一九四五年の終戦の日まで、十四年間で二十七万人が移入した。

農業青年二十万人、その家族などの移住者二万人とされる。

北アメリカやブラジルなど南米諸国への移民策が、各種のトラブルが生じ段階的に制約されるなか、北進策の一つとして満蒙移住策が日本政府によって推進された故のことだった。

もう一つ、“昭和恐慌”という不況の波が押し寄せていた。これは、世界

恐慌」とも呼ばれ、アメリカ合衆国の窮乏がもたらしたものだのだが、対米輸出の柱であった生糸輸出が激減したことで日本にも影響が及んだ。

また、昭和五年には米の値段の暴落により農家が「豊作貧乏」に陥り、翌昭和六年には、今度は、東北地方・北海道地方の冷害による大凶作に見舞われて収入源が絶たれ、農村は壊滅的な打撃を蒙った。

いわゆる世に知られる「東北飢饉」である。

「東北飢饉」だが、重い小作料が払えず、窮乏の果て、娘を身売りする親も多々いた。その一例、「青森県農地改革史」によると芸・娼妓に売られた者累計七〇八三人とある。

ソ連軍の侵攻によりソ満（ソ連と満州）国境近くに入植していた開拓団は、たちまちのうちに大混乱となった。この時点で、日本・関東軍は彼らを「棄民」の扱いとされていた。彼らの進むべき道は、三つしかなかった。

- 一、ひたすらに帰国を目指すこと。
- 一、生きて虜囚となること。
- 一、自らで潔く死を選ぶことで、あった。

満州開拓団の悲劇は、引揚げ体験者の手記も多く出版されているので参考にしていただくことにし、この稿では、外地人により蛮行を蒙った「被害者たちの無念の想い」を汲み取りながら筆を進めることにする。

各開拓団では集団自決しか法はなく、老若男女が行き場もないままに観念した末、自決の道を選び、「血の修羅場」のうちに、いくつもの村々が集落そのものを閉じた。かくて、満州開拓団なるものは滅ぶ。

逃げのびた者たち―彼らの「敗残の道」には、なお、過酷な運命が待ち受けていた。

生きのびるためには、進攻してくるソ連軍から身をかわすこと、現地民、匪賊・土匪（※地方に住む武装勢力団）などの襲撃から身を守ることが求

められ、当然のことながら、食糧不足、病気などにも悩まされた。

戦争花嫁という言葉があるが、「満妻・満妾」と呼ばれた女たちのことで、『満州開拓団員並びに一般在留邦人の妻や娘、敗戦の混乱により自活できなくなり、中国人のもとに身を寄せた。満妾ともいう。子供を抱いて中国人家庭に入った婦人が多い。(※註資料⑬「検証・満州一九四五年夏―満州開拓団の終焉 合田一道」)より。続いて、この書からの転載文。

『このころの中国では売買婚といって、女性と結婚するとき、男はたくさんの品物を贈り届けるのが礼儀であったので、荷車に食糧をいっぱい積んでやってきて、

「私の嫁にならないか」

と、言つて女性をもらつていくケースが目立った。最初のうちそれを知らずに親切な中国人だと思ひ込み、食糧を何度ももらったため、泣く泣く嫁にされた娘もいた』

『食物ハモチロン、身ニマトウ一枚ノ毛布モ一片ノ綿モナク、遂ニ人生ノ最後ニ至ルトイウ有様。シカラザレバ婦人ハ中国人ノ家庭ニオイテ食物ヲ与エラレモ、イズレモ貞操ヲ要求サレ、応ゼラレバ放リ出ストイウ現状ニシテ、既ニ夫ノ留守中、子女ヲ生カサントシタルソノ数、実ニ数十人ニ及ビ、コノ惨状見ルニ忍ビズ』

『北鮮ニ侵入セル「ソ」兵ハ白昼街道ニテ通行中ノ婦女ヲ犯ス。汽車ノ通ラヌタメ歩イテ来ル途中、一日数度強姦セラル。二人ノ娘ヲ伴ウ老婦人ハカクシテ上娘ハ妊娠、下ノ娘ハ性病ニ罹ル。元山カ清津ニテハ慰安婦ヲ提供

強ヒラレ人数不足セルヲ籤引キニテ決メサセタリ、日本婦人ノ全部ハ強姦セラル。強要セラレ自殺セルモノ少ナカラズ。男女ハ別ニセラレ男ハ労働セシメラル。知事其ノ他高等官モ道路清掃ヲサセラレツツアリ。幼児ノ死

亡モ少ナカラズ。満州ヨリ南下スル列車モ殆ンド平壤ニ止メラレ悲惨ナ光景ヲ呈シアリト。ソノ他ノ地ハオシテ知ルベキナリ』

当時の情報を伝えた一文を記した。

次に、「採録された記述」は、ここにそのままに記すのをためらうような無残な記録であるが、誇張、虚偽はないとされる。

このような事実、ことから目を逸らしてはならぬと、わたしは自分に言い聞かせてこれまでの文を纏(まと)めてきた。ゆえに、敢えて茲に記す。

たまたまに入院していた日本人、平本直行氏の証言【されど「わが満州」文芸春秋編所載文】とされ、信憑性は高いとされている証言である。

(\*この稿は、webサイトよりの収録)

『病院の玄関で大声で騒ぐ声にびっくりして、私は板でくくりつけた足をひきずりながら玄関を出て見て驚いた。十二、三歳ぐらいの娘から二十ぐらいの娘が十名タンカに乗せられ運ばれていた。それはまともの上から見ることの出来る姿ではなかった。その全員が裸で、まだ、恥毛もそろわない幼い子供の恥部は腫れ上がって、その原形はなかった。大腿部は血がいつぱいつぱいつている。顔をゆがめつつ声を出しているようだが聞きとれない。次の女性はモンペだけをはぎとられて下(しも)の部分は前者と同じだが、下腹部を刺されて腸が切口から血と一緒にみ出していた。次の少女は乳房を切られて、片眼を開けたままであったから死んでいるのかもしれない。次もその次も、ほとんど同じ姿である。「ああ、女はこんな姿でいじめられるのか…」次々と病室に運ばれて行く少女たちを眼のあたりに見てもその非情なソ連兵の動物的行動に憤りを感じると同時に、道徳も教養も平和の中にもみあるのであつて、一つ歯車が狂ってしまったら、そんなもの何の役にも立たないのだ…。一週間私はこの病院にいて毎日毎日この光景を見て、その無残、残酷さに敗戦のみじめさを知った。銃でうたれて死ぬのは苦痛が一瞬であるが、自分の体重の三倍以上もある毛もくじやらの男数名

になぶられた少女や娘はどんな苦しみであったろうか…医師の話では「十名に二、三名は舌を噛んで死んでいるんです」……』

満州開拓団の存否記録だが、ソ連軍または中国人暴徒の襲撃によって殺害されたり、または、開拓団の集団自決が一〇〇団以上もあったこと、逃避の難民生活などにより飢え、病気などなど、満州の全開拓人口の約三〇%が、終戦後に死亡したと見られている。

満州・北朝鮮におけるソ連軍の日本人虐待は、壮絶を極め、暴行と強奪は日常的に行われ、そして、残虐な行為を犯した。

とくに、野獣のようなやり方で女を奪い、抵抗する者は容赦なく殺した。まるで荷物を受け取るようにトラックを、民家や避難場所などに横付けをし、女なら誰でもよく攫って行った。軍の規律などなく、「あいつらは囚人部隊ではないか」の風評がいつも交わされていた。事実、野に放たれた殺人・強姦・強奪犯人たちの群れに過ぎなかった。

追記となるが、満州に残された日本人のうち約一万人は子供で、終戦の混乱状態の時、孤児になったり、捨てられた者たちであった。

彼らの約半数は、或る引揚げ者の伝えによれば、「満州ブローカー」に捕まって、農家や商店などに奴隷として売られたという。

また、五千人以上の孤児が共産党軍支配下の満州各地で八路軍（※注共産党軍）に保護された後、長じて、十六歳になると同時に中国共産党に引き入れられるという経緯を辿ることとなったという。

かくも戦いしか、白衣の天使たち

国家への勤めとして“日赤十字社看護婦養成所”で学んだ者たちの多くは、軍の施設病院や戦地に派遣された。

根拠となる養成所規則には、「20年間は国家有事の日に際せば本社の召集に応じ」とあり、のちに応召義務年限は15年、さらに12年と短縮さ

れたが、この規則の効力は旧日本軍解体後の昭和三十年まで存続した。

戦時召集状が届けばもいかなる家庭の事情があろうとも、戦地に出動するのが原則で、事実、太平洋戦争時には産まれたばかりの乳飲子を置いて、召集に応じた者もあった。

また、日中戦争頃からは看護婦不足の事情もあり、一般の看護婦資格を有する者も採用された。戦線拡大とともに従軍看護婦の数は増え、満州事変、日中戦争、太平洋戦争において出動した看護婦で軍籍にあった者は、日赤出身者だけで、延べにして20500名、そのうち外地勤務者は6000名であった。応召中の日赤看護婦は15、368名だったが、詳細なデータは欠如している。いずれにしろ、陸海軍とは不即不離のものとなり、多くの犠牲者を出すこともなった。

ここからは、終戦前後から、その後々までも、身柄が拘束されることになった従軍看護婦たちの受難の日々を追ってゆく。

『痛恨の事のみ多き大東亜戦争の中で最も憤（いきどろ）ろしく、許せないのは、米軍の原爆投下とともに、それ以上に、日ソ中立条約の有効を信じて対米和平の斡旋さえひたすら頼み込んでいたその相手ソ連から、背信の火事場泥棒に続いて加えられた史上未曾有の悪魔的惨虐であり、何よりも痛ましいのはその鬼畜の蛮行に曝された女性たちの悲劇であった。』

（※註以下webサイト資料、後部資料欄に説明文掲載。「青葉地蔵尊由来記 従軍看護婦の悲壮なる自決」よりの転載）

『明けて昭和二十一年の春、城子溝にあるソ連の陸軍病院第二赤軍救護所から三名の看護婦を応援に派遣せよという命令が、H婦長に伝達された。惨劇は、この一枚のソ連軍側からの“命令書”から始まった』

『仕事も出来、気も利く優秀な三名の看護婦を選び、H婦長は送り出した。白羽の矢を立てられたのは、A子、B子、C子の三名だった。不安の思いはそれぞれにあっただろうに、それでも、極めて元気に、役務一ヶ月の約束の下、指定された赤軍病院に三名の看護婦は向った』

『ところが、約束の一月が経っても先遣の看護婦三名は戻されず、何事ぞ、厚顔無恥にも、またしても、後続の看護婦三名を送るようとの命令書が届いた。D子、E子、F子の三名が送られた。誰も戻っては来ない状況のその二ヶ月後に、看護婦追加三名の人員調達の指令書がまたも届いた。もちろん、医療関係者にも戸惑いはあった。しかし、戒厳令下、長春に止め置かれている他の邦人一行の身も案ぜられるがゆえに、ソ連側の要求は呑まざるを得ない事情もあった』

(作者注※これらの一文は「従軍看護婦団の悲壮なる自決 K・H」より、成るべく原文に近いかたちで一部抄訳し書き記して表記している。なお、諸事情が生じてこの原著書籍は絶版。その間の事情は後記資料欄に記す) 心痛む四回目の人選を了えて、H婦長が夜人時頃、病院を出ようとした時、扉口によるめき倒れかかっていた傷だらけの女性を見つけた。

日本の振袖をイヴニング・ドレスに更生した肩も露わな洋服を身にまとい、裸足で桃色の繻子(じゆす)の靴を片足だけしっかりと握り締めている。落ち着いてよく見ると、何と第一回目に派遣したA子ではないか。病室にかつぎ込んで手当てしたが危険が刻々と迫っている。

以下は、A子が死の床で語った切々の一部始終である。

赤軍病院の実態が知れた。

『A子さんを揺すぶっては起こし聞いてみますと、哀れなこの看護婦は私の腕に抱かれながら、ほとんど意識を失いかけている臨終の眼を無理矢理にひきあけて、次ぎのように物語るのです』

『「婦長！ 私たちはソ連の病院に頼まれていった筈ですがのに、あちらでは看護婦の仕事をさせられているではありません。行ったその日から、ソ連将校の慰みものにされてしまいました。半日たらずで私たちは半狂乱になつてしまいました。約束が違っ！と泣いて叫んでも、ぶっ蹴つても野獣のような相手には通じません。

泣き疲れて寝入り、新しい相手に犯されて暴れ、その繰り返しが来る日

も来る日も続いたのです。食事さえ覚えがなくなり、何日目だったか、空腹に目を覚まし、枕元に置かれていたパンにかじりつき、そこではじめて事の重大さに気が付き、それからひとりで泣きました。涙があとからあとから続き、自分の犯された体を見ては、また悔しくて泣きました。

たったひとりの部屋で、母の名を呼び、どうせ届かないと知りながら、助けを求めて叫び続けました。そしてどんなことをしても、どうにもならないことがわかってきたのです。

やがて、おぼろげながら、一緒に来た二人もおなじようにされていることもわかりました。ほとんど毎晩のように三人か四人の赤毛の大男にもてあそばれながら、身の不運に泣きました。逃げようとは何度か思い、しかもその都度ひどい仕打ちにあい、どうにもならないことがわかりました。記憶が次第に薄れ、時の経過も定かでなくなった頃、赤毛の鬼たちの言動で、第八病院の看護婦の同僚たちが次々と送られてきていることを知って、無性に腹が立ち、同時に我にかえりました。

これは大変なことになる。なんとかしなければ、みんなが赤鬼の生贄になる。そんなこと許してはならない。そうだ、たとえ殺されても、絶対に逃げ帰って婦長さんにひとこと知らせてあげなければ…。赤鬼に汚された体に、命もいまさら何の未練もありませんでした。私は、二重も三重もの歩哨の目を逃れ、最後の鉄条網の下を、鉄の針で服が破れ、肉が引き裂かれる痛みを感じながら潜り抜けて、逃げてきました。後ろでソ連兵の叫びと銃の音を聞きながら、無我夢中で逃げてきました」

「婦長さん、もうひとを送ってはなりません。お願いします…」

『聞いている私をはじめ、居残っていた病院の者たちも、その話に暗澹と息をのみ、激しい憤りに身内が震えてくるのを禁じえませんが。脱走した時、うしろから撃たれたのでしよう。十一発もの銃創の外に、背中に鉄条網をくぐって来たかすり傷が十数本、血をふいて、みみずばれに腫れています。どんな気持ちで鉄条網をくぐって脱走したのか、どんな危険を冒して来た

のか、その傷は何よりも雄弁に物語っているではありませんか。身を挺して次の犠牲者を出したくないと決死の覚悟で逃れて来たこの看護婦の話に、私の涙は噴水のように後から後から噴き出しました。国が破れたとしても個人の尊厳を冒すことは出来ないのでしょうか。それをわずか七日間の参戦で戦ったというだけで、清純な女性を犯すとは何事ぞと、血の出るような叫びを、可憐な二十二歳の命が消えて行こうとする臨終の床に、魂をさく思いをしたのでした。「婦長さん！もう後から人を送ってはなりません。お願いします…」という言葉を最後にその夜十時十五分、がっくりと息をひきとりました。泣いても泣いても、涙が止まりませんでした』

『土葬の野辺の送りを病院関係者の手で済ませ、そして、髪の毛と爪を骨代わりに箱に納め、その夜は居残ったみんなは夜遅くまで、A子の思い出を涙ながらに語り合ったのでした…』

この悲劇には更なる第二幕が用意されていた。

翌日の朝、病院の診療開始の時刻になっても、誰一人として、看護婦たちは病院には顔を出さなかった。H婦長は「看護婦たちの覚悟」「乙女心の決意」のほどを、目の当たりにすることになる。

異変に気づき、看護婦宿舎にと足を運ぶ。

三階の宿舎入り口の靴脱ぎ場には、きちんと、靴が揃えて置かれていた。

胸騒ぎがするのをH婦長は覚えた。

『…障子を開けると大きな屏風が逆さまに立ててあります。中からプンと線香の匂いがしました。変だなと考えているひまもなく部屋に駆け上がってみました。胸がドキドキしました。二十二人の看護婦たちがズラリと一列に並んで眠っています。しかも満州赤十字看護婦の制服に制帽姿で、めいめいの胸のあたりに両手を合わせて合掌しているではありませんか。脚は紐できちんと縛ってあります。直感的な不安を感じ私はあわてて一人に触ってみました。もう冷たくなっていました。(中略)しーんとした死の部

屋で、どの顔もどの顔も、極めて平和な、しかも、美しい顔をして、制服制帽こそ長い間の従軍につきが当たり色褪せていますが、折り目正しく、きちんと着ています。二列になった床の中央に机を持ち出し、その上にA子さんの遺髪を飾り、お線香と水が供えてあります…』

二十二名の看護婦たちは青酸カリによる服毒死であったが、年長の看護婦の一人がみんなの服毒を最後まで見届けたあと、居住まいを正していたので、すでに、「安逸の世界」に身を置いた者たちには服装の乱れはなかった。一人、その面倒を見た年長の看護婦だけが、苦悶の末、絶命していたふうが看取れた。

これもまた痛ましい限りであった。

もはや、死語になっているようだが、当時は、女性には“貞操観念”というものが存した。性に関しては“純潔”こそが女性の美德であった。

わたしの世代でさえ、「純潔の身でなければ嫁には行けない」の言葉を何度か耳にしたことがある。それだけ、“貞操を守る思い”が、彼女たちには強かったとも言えるだろう。

看護婦二十二名が遺した遺書の一文。

『二十二名の私たちが自分の手で命を絶ちますこと、軍医部長はじめ婦長にもさぞかしご迷惑と深くお詫び申し上げます。

私たちは敗れたとはいえ、かつての敵国人に犯されるより死をえらびます。たとえ命はなくなりましても、私どもの魂は永久に満州の地に止まり、日本が再びこの地に還って来る日、御案内致します。その意味からも、私どものなきがらは土葬にして満州の土にして下さい…』

この遺書の後に全員の署名あり。

復讐とても徒花（あだばな）ならんか

看護婦たちの受難の日々はここでは終わらない。

なお、地獄行の世界でもがき苦しむ。集団自決した看護婦たちの四十九日が経過した、或る日のことから話は始まる。

『たまたまミナカデパートの地下室のダンスホールに、あの三回に分けてソ連の病院に瞞(だま)されて行った人たちがダンサーをしているということを知った。早速訪ねて行って待っていると六人の看護婦が急いで出てきた。日本の着物を更生した肌も露わなイブニング・ドレスに、眉を細くひき、ルーージュも濃く、いかにもナイトクラブのダンサー然としているが、顔は病人のように蒼白である。

「こんな所でこんなことをしないで、早く私どもの所に帰って来て」と極力勧めたが、俯いて肩を震わせて泣く彼女たちは、首を横にふるばかり。たまりかねたHさんが、「あなた達はそんなことを好きでやっているのね。そこまで日本人も墮落したのか」と罵って三つばかりひっぱいた。するとみんな一層にしょげて、涙ながらに言うには、「婦長さんがそれほどまでに私たちのことを考えて下さるなら申し上げます。最初私たちがソ連の病院に送られた時から、私たちは毎晩七、八人のソ連の将校たちに犯されたのです。すぐに国際梅毒をうつされてしまいました。私も看護婦です。今では大分悪化しているのがわかります。こうなっては自分の体は屍に等しいのです。どうしてこの体で日本に帰れましょう。仮に今後どのような幸運に恵まれても日本に帰れる日が来たとしても、この体では日本の土は踏めません。この性病がどんなに恐ろしいものか十二分に知っています。暴行の結果うつされたこの性病を私はソ連軍の一人でも多くにうつしてやるつもりです。今は歩行も困難なくらいですが、それでも頑張って一人でも多くお客をとることにしています。これが敗戦国のせめてもの復讐です』

彼女たちの負った心の傷の深さ、過酷さ、そして生きる望みを失った者の絶望感……あらゆる苦悩への思いに、H婦長はおのれの力の無さ、そして、自分が人選して彼女たちをソ連の病院に送り込んだその罪の深さに慄く。

どんなことがあっても、彼女たちを元気な体にしなくてはならぬ、日本に連れて帰らねばならぬ―そんな強い決意の元、病院のありったけの梅毒治療薬を携えてH婦長は、その翌日、再び、ダンスホールを訪れた。

『…日本人の人たちが作ったこの薬品、こんな貴重な薬品をいただいては申し訳ない。ソ連軍からうつされた私どもの病気を日本人の作った薬で治すのは勿体ない』と言って受け取らない。そして他日、重ねて行った(※注ダンスホールで)婦長に、「その御親切を無にするわけをお見せしましよー」と自分たちの部屋に案内して患部を見せた。正視できない症状。コンジロームが局部一杯に広がってその先が全部化膿して濃が流れ、無花果の腐敗したのを見る感じに、長年看護婦として馴れているはずのH婦長さんも全身総毛立ちの寒気がしたという…』

当時、梅毒は、俗説によるところ、“ろうそく病”とも呼ばれて、病状が進むと、文字通り局部などが、次第次第に溶けて行くような状態を示すとされていた。実際に、その病状のほどをH婦長は自分の目で確かめることになったのだ。正直なところ、もはや手遅れの感は否めなかった。

局部全体から水泡が出ており、さらに、尿道口にも膿みが生じていて、典型的な梅毒の症状が示されていた。こうなると、排尿困難、歩行困難ともなり、もはや、性器そのものが“腐る状態”で、梅毒の末期症状であるのが分かった。もはや、どうしようもない病態だった。

翌年の六月十九日のA子の命日には、彼女たちの何人かは一度だけのことだが病院を訪れた。そして、花を手向け、焼香して、同僚の霊を弔った。

時日が過ぎた。

『昭和二十三年九月のある朝、その日の午後七時、南新京駅に集結という、突然の帰国命令が出た。自分の身支度を整えた後、H婦長はダンスホールまで行き、日本に帰れる旨を彼女たちに告げ、集合時間に南新京駅に来るように伝えた。「一緒に日本へ帰ろうね」「わーい、帰国だあ、よかった

あー!」「時間までに行きます!」彼女たちは満面の笑みを浮べて喜んでくれ、そう約束をした』

そして、いよいよ、帰国列車の発車時刻が迫った。いまかいまかと、H 婦長は彼女たちが喜び勇んでやって来るのを待った。

出発時刻が迫り、やっぱり、彼女たちは来ないのかも知れないと思っていた時のこと、やっと、彼女たちが姿を現した。

『「婦長さくん!」と明るい声がありました。どこにいたのか、意外と近くに、ワンピースにもんぺ姿のE子、F子、G子の三人の姿が見えました。とっても嬉しそうな顔をしています。「あとの娘たちは?」「大丈夫です。あとから来ます。(中略)」「わかったわ。でも、もうあまり時間がないと思うから、早くしてね、急ぐのよ」「はいっ」そのとき、振り向いた彼女たち三人の笑顔を、H婦長は生涯、決して忘れない。忘れようがない。三人とも、とても明るい、ほんとうに何事もなかったかのような、明るくてさわやかな笑顔だったのです。H婦長が、彼女たちが戻ると安心して、貨車の順番の列に並んだ時です。パン、パンと2発の銃声がありました。そしてすこし遅れて、パンと3発目の銃声が響きました。列車への乗車券を待っている日本人たちが騒ぎ始めました。「おい、自殺だ」「若い女3人みたいだ」「!」三人とも即死でした。

F子さんとG子さんの体を覆うようにし、倒れていたE子さんの右手にピストルが握られていました。申し合わせてのことでしょう。

頭部からは、まだ血が、流れています。E子が先に二人を射殺し、最後に自分のこめかみを撃ったのがわかりました。

わかる、わかるわ。あなたたち、こうするほかはなかったのね。ごめんね。ごめんね。ごめんね。はやく、気が付いてあげられなくて。もう、なにもかも忘れて、楽になつてね。今度生まれてくる時はね、絶対に、絶対に、もつともつとずっと強い運を生まれてくるのよ……』

結局、顔を見せることが叶ったのはこの自死した三人だけで、あとの看

護婦たちは姿を見せず、噂によると、ソ連将校がソ連領の郷里に一人は連れ帰ったともいう。引揚げ列車は南下し、それぞれの悲劇と過酷な過去から、まるで逃れるように、祖国日本へ向け鉄路を南へ向けて走り出しました。』

※日本に帰還したのち、重い梅毒に罹っていたIさんは、サルバルサン、ペニシリンの注射治療に通い、悲惨な青春を送ることになったが、完全に治癒し、良縁を得て結婚をし、引揚者用の開拓地に入植し荒地を耕すために汗した。三人の子供にも恵まれたの記録もあり。

夢と希望をもって大陸に渡った満州開拓団の人々が酷い目に遭わされた。集団自決した看護婦たちの思い、あるいは、梅毒に罹患したゆえに生きる望みを失ったのか、日本に帰ることを拒否した看護婦たち、彼女たちが残した遺書には、「私たちは満州の魂魄として残り、いつの日か、日本が再びこの地を訪れるとき、ご案内したい」とも記されていた。

それらの看護婦たちの大和撫子の心意気や、尊ぶべし。

日本国を思うこの健気さ、一輪の百合合として咲けしなり。合掌。

ここに、皆々の哀悼の想いも込めて、一句を捧げておこよう。自らも満州からの引揚者で、終戦時は十二歳であった天内みどりの句なり。

作者は、短歌「コスモス」の同人。著書「芙蓉の花」より転載す。

生け贄のごとくに女を

差し出して還へる命ぞ大事に生きむ

引揚げの少女の日々を

わが思惟の原点なりきならねばならぬ

次は、敗戦国の立場からではない視点からのソ連軍蛮行に対する怒りの著より。中国国防大学教官、徐 焰大佐著の「1945 満州進軍 日露戦と毛沢東の戦略よりの一文」

『ソ連軍が満州に入った時点からもその相当数の兵士たちは直ちに、横暴な行為を露骨に現した。彼らは敗戦した日本人に強奪と暴行を振るうただけでなく、同盟国であるはずの中国の庶民に対しても、悪事をさんざん働いた。特に強奪と婦女暴行の二つは満州の大衆に深い恐怖感を与えた。100万以上の満州に出動したソ連軍兵士の中では、犯罪者は少数というべきだが各地で残した悪影響は極めて深刻なものだった。(中略)満州の各都市はどこでも同じような状況で、夜になるとソ連軍兵士が街角に現れ、通行人を止めては携帯物品を強奪し、女性を追い回し、時には銃を持って民家に押しかけることもよくあった』

と、害が中国人にも及んでいることを指摘している。

だれかれ、場所も選ばずのソ連兵による蛮行が行われていた事実が、ここには、客観的事実として示されている。

もう一つ、特記すべき稿があるので、状況推移のみを抄訳記載。

国籍を問わず、ソ連軍兵士たちは朝鮮人の女たちも当たり構わずに狩り出していた。

『満州との国境から喊康や興南工業地帯の南へ侵入したロシア人は、朝鮮人と日本人の財産略奪を広範囲かつ無差別にやり尽くした。そして武器を使って朝鮮人と日本人の女を奪い、暴行した。(中略)連続七日間、咸興と興南地方、その周辺で悪事を働くロシア人の略奪グループに同行した者によると、そのやり口は、トミー銃で武装したロシア人達はトラックで目星をつけた朝鮮人や日本人の家にトラックで乗りつけ、二、三発、脅しのために発砲してから、家の中に押し入り、若い娘たちを見つけ次第に引きずり出してトラックに乗せた。さらに、目についた家具その他の物もみんな

一緒に積み込み、兵舎にと戻って行く。一日か、二日後、物を捨てるように、「まともな状態ではない、用なしになった女」たちをどこかの通りに放り出す。まるでゴミのようだ』

(「検証「シベリア抑留」ウイリアム・F・ニンモ 資料⑭)より。

追記になるが、「日赤看護婦たちの霊を弔う」ために、帰国後、関係者が資金集めにも奔走して、昭和三十一年六月二十一日に、その名を「青葉慈蔵尊」とし慰霊碑が建立された。今も埼玉県大宮市の墓地青葉園の一郭には、没看護婦たちの名が刻まれた石碑も残されており、毎年、建立日にちなんで慰霊祭も執り行われているという。

中国軍についても、共産党軍、国民党軍を問わず、各種の虐待・被虐行為はあった。国民政府は数千人の日本に対してすぐには引揚げを認めなかった。そのなかには将校の愛人にされたり、あるいは売春婦にされた女たちもいたと言う。そのような例は限りがない。いつまでもいつまでも、悲惨な引揚げ行は満州に始まり、北朝鮮、南朝鮮と延々と続いた。

かくて、多くの女性が「望みもしない人の命」をわが胎内に止めることにもなり、二重苦、三重苦の責苦を難民女性たちは負わされる身となった。

新たな悲劇の始まりだった。

引揚船が日本に向けて出る港までやっと辿り着いた彼女たちだが、今度は、「妊娠しているのでは?」「性病を罹患しているのでは?」「この汚辱の思いをどうやって身や心から取り去ることが出来るのか?」という不安の思いにと取り憑かれて行った。

『朝鮮の三十八度線以北と中国東北部からの引揚船は、とくに婦女子の痛苦を乗せていた。ソ連軍の攻撃、現地民の報復、集団自決、逃避行と収容所での飢餓や、伝染病、ソ連兵の女狩り…さらに国共内戦(※中国の国府軍と共産党軍)そういう極限を生きのびて、やっと引揚船に乗れたのだが

…。

主婦のAさんは、集団自決でわが子を締め殺し、自分は死ねずに収容所に入り、ソ連兵に強姦されて妊娠した。彼女は引揚船から海に身を投げて死んだ。軍国乙女だったBさんも輪姦されて妊娠し、故国を前に入水した。夫の目前で強姦されたCさんは、引揚げるとすぐ離婚した。ソ連兵の慰安婦として開拓団から「供出」されたある少女は重い性病に苦しみ、叫びながら船上で息絶えたという。

博多港や佐世保港で引揚女性を待っていたのは、検診と中絶手術だった……』

『しかし、引揚女性の性被害は封じ込められてきた。公表したら当時は被害者が白眼視されたのだ』との一文も、webサイトに、一市井人からの声として届けられている。

### 三十八度線を越えて

「ある戦後史の序章―MRU引揚げ医療の記録！編著者木村秀明※作者註―資料①」の貴重な書が手元にある。「かつて日本人も難民であった。略奪・暴行・不法妊娠・孤児・栄養失調・餓死など、敗戦後の大陸引揚げ者の実態を記録する」と本の帯封には付されている。

“聖なる行為なれば救いありしか”とも思うが、ここには「冷酷な現実」のみしか存在し得ないので、心しての一読をお願したい。

京城帝国大学医学部付属病院で難民対策に携った現地での医療関係者たちの活動の日々、献身的にして過酷な勤務の実態、そして、その彼らの責務への思いのほどが切々と伝わって来るが、やはり、現実の推移たるや厳しいものがある。読む者も覚悟を決めて、「冷徹な事態の推移」にと立ち向おう。

医師石田一郎の手記より。

『MRU（メデイカル・レリーフ・ユニオン）の腕章をつけて、市内の天

理教会や寺院を廻り、収容されている避難者の方々に接するうちに、いろいろな話をきき多くの体験を得た。すでにジャーナリズムや文学などによって紹介しつくされた観はあるが、満州や北朝鮮からの初期の脱出者は悲惨で、今も念頭を去らないいくつかのエピソードがある。

北朝鮮で農業を営んでいた老夫婦は、年頃の娘二人を連れ、辛苦のすえやっと三十八度線近くの鉄原にたどりついた。そこで見たものは、日本人の娘達がつぎつぎにまずソ連兵に犯され、ついで朝鮮人の保安隊に引き渡されて散々に辱しめられたうえ、虐殺されている光景であった。折角ここまで連れては来たが、最愛の娘達もまもなく同じ運命をたどるのである。ここを不憫に思い、近くの林の中の松の木に縊つて自決させ、これは遺髪ですといつて私に見せてくれた。もう涙も涸れたのか淡々と他人事のように語る表情のなかに私は深い悲しみを見た』

『秋になりめつきり日本人の姿のすくなくなった街頭で、七、八才前後の子どものグループをよく見かけた。これらの子ども達を収容所につれていって保護してやるのも、MRUの大切な仕事の一つであった。彼らは何も語らないが、おびえ、飢えていた。きっと彼らの目前で両親や姉妹たちが犯され、あるいは殺されて、放置されたのであろう。男の子だけに行動力だけは残っていて、心優しい異邦人たちからなにがしかの食と金を与えられ、非情の三十八度線でも憐憫の情から見逃してもらったものであるに違いない。彼らは次第にグループをつくり山野をさまよって、やっと京城に辿りついたものと思われた。戦後内地で見た浮浪児とは趣を異にし、活気もなく、虚無的な影を濃くもっていた。旅路の果ての収容所でひっそりと死んでゆくものも少なくなく、その遺体の始末を引き受けたこともあった』

『避難民は三十八度線を越えて朝早くか夜遅くになって現われる。(中略) 近づいてくる難民たちのほとんどが、たいいてい同じメロディを口ずさんでいたことであった。(※歌詞の一部のみ掲載)

♪泣くな、妹よ 妹よ泣くな 泣けば幼い  
二人して 故郷を棄てた かいがない  
遠い寂しい 日暮れの路を 泣いて叱った  
兄さんの 涙の声を 忘れたか  
生きていこうよ 希望に燃えて  
愛の口笛高らかに この人生の並木道♪

哀愁を含んだ歌詞で知られる【人生の並木道】（佐藤惣之助作詞・古賀政男）作曲」のメロディであった。

彼等は間道を抜け、山道を通り、河を渡り、ただひたすらに南へ向って歩き通し、時には迫害を受けながら三十八度線を突破してくるのである。多くの人が命を落としたなかで、いたわりあい、かばいあって、ようやく南朝鮮に辿り着いた彼等にとって、「人生の並木道」の歌には、たかが、流行歌とは言えない何ものがあつたのであろう。

この歌によってお互いの心を慰めあい、ときに勇気づけられたにちがいない。印象に残る出来事だった』

これら、戦争孤児たちに関して、帰国したのちの話も一部収録されているので追記しておきたい。「戦争孤児施設」の話の一つである。

一部、「闇市譚」にも触れるので採録した。

『保育所の常として、子供たちの出入りは相変わらず激しく、やっと筋道のついてきた保育を受け、心身共に健やかに育ってきたと思う子供は、生活の安定と共に次々と去ってゆき、新たに何のしつけもされていない野放図な子供が私たちの手に託されて、泣くこと、逃げること―なだめること、追いかけることのくり返しが続いた。』

食糧事情は相変わらず悪く、子供たちのお弁当は乾パンだけ。じゃが芋だけという子も多く、たまに白米のお弁当を持つてくる子があると、いつのまにか中味がからになっていることも度々だった。（中略）押収物資の配

給はもつと悲惨だった。博多駅前を始め街の要所所で、月に何回か警察の闇商人抜き打ちの取締まりがあり、そこでつかまった人たちの物資が回ってくるのであった。警察から知らせがあると、私たちは指定された派出所に出向き、そこにうなだれている顔もあげ得ない生活に疲れ切った人たちを横に見ながら、押収品のまきずし・いなりずし・ぼたもちなどを貰ってくるのだが、それらの人たちは闇商人といっても、私たちが預かっている子供たちの親と同じ引揚者や戦争未亡人が多く、「せめてうちの子に食べさせる分だけは返して…」と泣きつかれるのを、「さっさと持っていきなさい」とお巡りさんに追い立てられ、帰るこちらも泣きたい思いだった」

（webサイト「石原病院・千早病院二十五五年」より）

弱き者たちだけが、取締りの員数合わせの対象にされていた一面が伝わって来る話だ。生活不安定、そして、諸物資不足の折からの「闇市事情」の裏には、こんな切ない物語があったことも、肝に銘じておきたい。

#### 被虐の果ての犠牲者たち

医療スタッフの奮闘ぶりにも接したい。

本書に於いて、その一端を知ること、戦後の「被虐史」を追う上では、欠かせない事例であると思う。（旧仮名遣い文）

『昭和二十一年三月中旬、引揚者の大部分は北鮮よりの脱出者であったが、殊に婦女子が多く、その悲惨な姿は見る者をして眼を覆はしめた。これらの婦人の中には、終戦後憐れむべき環境の中で余儀なく汚辱せられ、性病にかかり、妊娠している者があるにかかはらず、何等の対策施設も考慮せられなかった。

在外同胞援護会救療部は、博多港を出航する船舶に対し船医を送り、輸送間の救療に任じておったが、以上の状況を注視し、船医の意見を徴して、早急にこれら患者のために病院を設立すべきであるとの意見を博多引揚援

護局に具申し、両者の協力を以って之を開設することに決した。(中略)

福岡県より筑紫郡二日市町にある旧愛国婦人会県支部武蔵野温泉保養所を借用し、在外同胞援護会は診療に要する器械衛生材料を提供し、且つ所要の医師・従業員を配置して、三月二十五日之が開所の運びとなった』次に、諸策実施のための細則を掲げる。

『イ 収容経路―第一の手段は、乗船地診療所に連絡して、出来るだけ多くの婦人に対し、性病・不法妊娠の有無を尋問するやう依頼した外、船医にパンフレットを全婦人に配布して貰った。このパンフレットには―性病又は不法妊娠の疑ひがあり、身体の異変に気付いている婦人があるならば、直接、船医に申し出て下さい』

『第二の手段は有名新聞に、「引揚げ婦人に告ぐ」として「外地にある時に受けた傷手で悩んでいる方は二日市保養所に相談に来て下さい。充分な施設を以って治療致します」と抽象的な広告を出し、本人が読めば解るやうな字句を連ねて数回に亘り掲載したのである。

斯くして収容した患者の内訳は、埠頭より直接送られて来た数と、一度故郷に帰り本所を知って訪れた数とは相半ばし、北は東京、南は鹿児島に至って居る。(中略)』

『ロ 収容患者数―総数三八〇名。治療日数七、九八一日に達し、付添人を合すると一、〇〇〇名を越ゆる。その内訳は、不法妊娠二二三、正常妊娠八七、性病三五、其他四五である。

1 不法妊娠―妊娠月数より見ると五ヶ月が最高で四八、四ヶ月・六ヶ月の三三、七ヶ月の二七、八ヶ月の二三、の順である。

即ち五ヶ月を中心にカーブを画くのは、この時期に確実に妊娠を自覚し、困惑して訴へるものと判断される。

これらの患者は、当初入所ものは敗戦の混乱の中で不慮の禍によるものが多数であったが、後期に入所する者では、生活困窮による自覚的妊娠が可成りあり、これらは精神的にも余り悲観的ではない。

2 正常妊娠―正常妊娠は八七で、妊娠月数は前半期の例が多い、これらは普通に妊娠したが、過労と栄養障碍のため合併症を来し、人工妊娠中絶に迫られたものが過半数である。

合併症の中最も多いのは、栄養失調、全身衰弱・脚気、環境の変化による結核性疾患、及激動による自然流産等で、何れも人工中絶を行はねば母体に危険を及ぼすものである。

3 性病―性病患者の内訳は附表第四の如く、総計二五名中、淋疾二三、梅毒一二、である。性病患者が比較的少ないのは、妊娠に比し徴候明らかでなく、患者自身気付かない上に、精査しなければ他覚的にも発見困難であり、且つ何処にても治療し得ると言ふ考へから、羞恥心の為に秘匿する原因による』

『：北方からの逃れてきた人々のなかには、北満―平安北道―平安南―咸鏡南道―江原道―京畿道というふうには、いろいろと迂回して引揚げてきたという者が多く、途中で暴行をうけるなど辛酸をなめていた。従って女子のほとんどは断髪しており、性病罹患率も高かった。釜山での検診の結果は、昭和二十年中旬から翌昭和二十一年二月下旬にかけての僅かな期間に、暴行被害者一〇五名、うち性病罹患者は二十九名にも及んだ。

さらに栄養失調も多く、またいはゆる不法妊娠者もかなり発見された。(中略) 博多港に着いたらすぐ中絶を申し出るやう勧めた。しかし、どういう理由か、どうしても堕胎を拒む女子もいた。相手はソビエト人といっていたが…』

加害男性の国籍内容については、「二日市保養所」の医務主任であった橋爪将証言では、

『加害男性国籍内容は、朝鮮人28人、ソ連人8名、米国人3名、支那人6名、台湾人1名、フィリピン人1名』となる。なお、この数字は二ヶ月間でのことで、昭和四十六年六月十日付けの報告書、強姦被害者四十七人を治療した際のデータとある。治療現場での実際はどうかだったのか。京城

日赤病院で働いていた看護婦十人ほどが二日市保養所には待機した。M看護婦の証言より採録す。

風呂場を改造して急ごしらへの手術台が作られた。保養所だった場所なのだから、これとても、止むを得ない処置ではあった。

看護婦たちは仕事の内容を告げられて愕然とした。墮胎手術は法律では認められてはいず、また、熟練した医師たちがいるわけでもなかった。「何とか、まともな体にして故郷に返してやりたい」と、どの医師も使命感を持って、手術には臨んだのだが…。

『数日後、トラックが到着した。荷台に乗っていたのは、短い髪に汚れた顔。男性用の服をまとった人たち。「男か」と思ったが、下腹部の膨らみを見れば女性であることがすぐにわかった』

『恨みと怒りの声、手術室に響く―引揚先の博多港から、二日市保養所に到着した女性たちは、数日間の休養の後、手術室に連れて行かれた。麻酔はない。手術台に横たはると、目隠ししただけで手術は始まった。(中略) 医師が長いはさみのような器具を体内に挿入して胎児をつまみ出す。生身をそげ取るわけだから、それはそれは痛かったでしやう。ほとんどの女性は歯を食いしばり、看護婦の手をぶれるように強く握りしめて激痛に耐えたが、一人だけは「ちくしょう!」―。手術室に響ひたのは、痛みを訴えるものではなく、恨みと怒りが絢(な)い交ぜになった声だった。

おなかが大きくなっている女性には、陣痛促進剤を飲ませて早産させた。「泣き声を聞かせると母性本能が出てしまう」と、母体から出てきたところで頭をはさみのような器具でつぶし、声を上げさせなかった』

『幾多の手術に立ち会ったM看護婦には、忘れられない“事件”がある。陣痛促進剤を飲んで分べん室にいた女性が、急に産気づいた。食事に行く途中だった某看護婦が駆けつけ、声を上げさせないために首を手で絞めながら女兒を濃盆に受けた。白い肌に赤い髪、長い指―ソ連の兵隊の子供だと一目でわかった。医師が頭頂部にメスを突き立て、濃盆ごと分べん室

の隅に置いた。

食事を終へて廊下を歩いていると、「ファー、ファー」といふネコが鳴ひているやうな声が聞こへた。「ネコが鳴ひているのかな」と思ったが、はつと思ひ当たった。分べん室のドアを開けると、メスが刺さったままの女兒が、濃盆のなかで弱々しい泣き声をあげていた。某看護婦に呼ばれた医師が息のみ、もう一本頭頂部にメスを突き立てた。女兒の息が止まった。

死亡した胎児の処理は看護婦のなかで最も若かったY看護婦らの仕事だった。手術が終ほわると、底の深ひ穴に落とし、薄く土をかぶせた。

手術を終へた女性は二階の大部屋で布団を並べ、会話もなく、横になっているだけ。大半は目をつぶったままで、某看護婦は「自分の姿を見られなくなかったから、ほかの人も見なひやうにしていたのでしやうか」と振り返った』

(戦後：博多引揚げ者らの体験)より。

女性たちはほぼ一週間ほどで退院して行つた。看護婦たちは「幸せに生きて欲しい」と願いを込めながら、薄く口紅を引いて送り出したという。中絶手術や陣痛促進剤による早産をした女性は、四百人から五百人にも及んだ。約一年半ほど、病院は業務を続けた。

患者たちに付き添った某看護婦は、その断腸の思いを手記として遺し、次のように記す。

『戦争の周縁では、どの時代、どの地域であつても例外なく必ず性暴力の被害が生じる。この世で最も忌むべき戦争と戦時暴力は、お互ひが癒着し、蛇のやうに絡まりあひ、切つても切り離すことなどできない。』

更にこのやうな状況の下でも生身の女性は受胎し、加害男性の子を宿してしまふ。人間といふ個体の生殖の営みが、これ程、哀しく不条理なもの

であると感ぜられることはない』

二日市保養所の跡地に建つ特別老人ホームでは、かつては、毎年五月、水子地蔵の前で、“水子供養祭”が行われていた。

#### シベリヤ収容所始末記

はじめに断りを入れておかねばならない。

「シベリア抑留」が、すぐに、頭に浮かぶが、シベリア地域にだけ、日本軍捕虜や邦人日本人が連行されていたのではない。

公表されている資料だけでも、現在のモンゴルや中央アジア、北朝鮮、カフカス地方、バルト三国、ヨーロッパロシア、ウクライナ、ベラルーシなどソ連地区や、中華人民共和国など多くの地点が含まれる。

名を知られた地名でも、ナホトカ、ハバロフスク、ウスリー、ウランバートル、イルクーツク、興南地区・元山地区（現北朝鮮）、大連地区（現中国）などで、大体人数の多い収容所なら二万名ほども収容していた。

なお、シベリア地区と称するのは、ウラル山脈以北分水嶺以東の北アジア地域を指す。

「第二次大戦後、旧ソ連は旧満州の軍人らをシベリアなどの抑留所に移送。厚生省労働省によると、約五十七万人が抑留された。このうちシベリアで約五万三千人、モンゴルで約二千人が死亡。抑留者のうち約四十七万三千人は日本に帰還した」

（※日本政府当局による平成年度の資料）

長年にわたるソ連邦国の捕虜抑留は、「武装解除した将兵」の本国帰還を保証したポツダム宣言に背くものである。

ここでの話は、「加虐者对被虐者の構図」で開陳するので、まずは、「抑留記」から、いくつかの「極悪非道」の談話を拾ってゆく。

(※)註資料webサイトー 私のシベリア抑留記

河村廣康記 webサイトより収録)

『昭和二十年九月十五日に「この部隊は一千五百をもって第一大隊として、ハルビン以北の鉄道工事を三ヶ月した後、日本に帰す」とソ連軍から命令が出ました。(中略)しかし物の見事に裏切られ、列車はハルビンを通り越して国境の町、黒河に着きました。みんなは騒ぎだしましたが、何とも仕方ありませんでした。九月三十日に黒竜江の渡河作業が始まり、とうとう捕虜としてソ連領に行くことが決まりました。どっさり積んできた糧秣の運搬作業は、とても、重労働でした。(中略)

汗と埃にまみれたボロボロの夏服を着て、ブルブル震えている者たちに出会いました。国境のソ連軍と戦った兵隊たちでした。荷物は何一つ、持つておらず、ただ、水筒を持っている者が僅かに見えました。顔は真っ黒で、ろくに食事もしていない様子で、痩せ細っていました。(中略)

列車はウラジオストックと反対方向シベリアに向けて北上して行きま  
す。(中略) 十月十日、ダイセット第四収容所に到着。(中略) 松の板を打ちつけた三メートル程の高い塀が周囲を囲み、塀から内側五メートルの間隔を置いてずうっと鉄条網が張り巡らされています。(中略)

収容所の広さはよく判りませんが、千五百人を収容しても余裕のあるほどですから、相当な広さです。捕虜収容所になるまでは、ソ連のシベリアでの強制労働をさせる流刑者を収容していたというのですから、全くお粗末なものです。(中略)

厳寒のマイナス三十度以上もあるシベリアでは、外では口に入れる物はほとんどありません。松の小枝の先端部分が少し緑色になっている所があり、その部分を剥ぐと白い柔らかな繊維が見えます。それを採って食べます。(中略)

極寒のシベリアで私は大きな発見をしました。

ある日のこと、ソ連兵の食料のキャベツを駅までそりを引っ張って取り

に行つたためです。貨車からそりに移すとき、木枠の中の凍っているキャベツが雪の上にバラバラとこぼれます。小指ほどの小さな破片をハンゴウいっぱい拾つて帰り、雪を入れてペーチカの上でゆでて食べました。そのときのつゆの旨かつたこと、甘かつたこと。こんなにキャベツが美味しいものとは知りませんでした。戦友たちにも飲ませましたが皆喜んでくれました。今でもその旨さが頭に焼き付いております。口が肥えた今では、到底その味を味わうことはできません…(中略)

まつげには氷の花が咲きまばたきするにも力が必要です。寒いというより痛いのです。凍死するのは、痛い寒いを通り越すと眠くなります。

そのままですと、あの世行きになつてしまいます。作業が終わり帰る道すがら、目をうつろにしてふらふらしてついてくる戦友がおると、言葉をかけるくらいでは駄目ですから、怒鳴ったり頭を揺すったりして正気にさせました、それでないと、倒れたら、もうその時は息絶えていますから…。

厳寒の零下五十度前後の夜、危険におびえて神経をすり減らし、骨と皮ばかりに等しい体になつて長時間働かされると、体全体の感覚もなく、神経もマヒしてしまいます。危険だという観念もなくなり、無意識の状態です仕事をしている頃には、もの言おうとしても言葉にはならない。こんなときには決まつて二、三人の凍傷者が出ます…』

抑留者は元軍人だけではなかつた。

満州などの外地で終戦を迎えた者で、満州鉄道や、軍機関の用務に就いていた男女の者が止どめ置かれた。

多くはソ連との戦いに何らかの意味で参加、協力していた者、また、諜報機関に関係あると認定された者が対象であつたが、その正否、認定の基準は定かではなかつた。

戦時中、大連ソ連領事館で日本語を教えていた赤羽文子は「国事犯容疑」で逮捕され、ソ連抑留所に送られた。三十六歳の時だつた。

『昭和二十年十一月のある日、私を乗せた列車は、大連の駅を離れた。街にはアカシアの葉が音もなく散り敷いて、早い冬の訪れを告げていた。私の周りには、私と同じように、ソ連軍に捕らえられ、監獄からトラックで列車に運ばれてきた大勢の人々がいた。列車がどこへ行くのか。これから自分たちがどうなるのか、誰にもわからなかった。乗せられた列車は南満州鉄道時代の客車で、私たちには馴染み深いものだったが、窓の内側から頑丈に打ちつけられた木の板が、否応なしにこれが囚人列車であることを私たちに思い知らせるものであったとはいえ、動き出した列車の中は、昼間はかなり騒々しく、みな朗らかでさえあった。男たちは、女の身で捕まった私の身の上を不審がり、私がスパイ容疑という、全く身の覚えのない罪で、このようになったことを説明すると、しきりに気の毒がってくれた』

この後、収容所で彼女は過酷な取調べに遭う。いわくつきの担当検事で、女囚たちを“性の餌食”にしているふうがあった。

この収容所には日本人だけではなく、ソ連に反抗したとされる国々の女性たちが多く収容されていた。

二日前、同じ部屋にいた元歯科医の若い白系ロシア人（※作者注―白露天は旧帝政ロシア時代の生残り者として冷遇の身）の女性が泣き顔を腫らして、取調室から帰って来た。何があったのか―いつまでも彼女は異様と思われるほどに泣いていた。

その他、満州人なども収容されていたが、同じような状況が続いた後、被害者と思われる女たちは免罪を得たように釈放されて行った。

『その日の夜遅く、私はウーソフ検事に呼び出されて、取調室に入った。私の訊問は一ヶ月前にすべて終わっていた筈だったが、暢気だった私は、この再訊問を格別怪しみもなかった。深夜のことであり、部屋は気味悪いほど静かだった。ウーソフ検事は、はいつて来るなり部屋に鍵をかけた。それはいつものことだったが、何故か私はどきりとした。私に、椅子にかけるようすすめた彼の顔には、気味悪い微笑が浮かんでいた。

彼は無言で、ポケットから何かを取り出すと、私の卓の上に置いた。

「さあ。これを飲め」

乱暴な声だった。目の前には二種類の錠剤があった。一つは白かった。いったいこれは何なのか―その先を考えるより先に、私の全身は凍りついた。女としての直感が、この錠剤に隠された、彼の意図を読み取ったのだ。

私は反射的に後ずさりした。勿論、錠剤には手も触れずに。私が追い詰められたのは部屋の隅だった。ウーソフは迫ってきた。大きな手で、子供のような私の襟首をつかみ、後ろにと倒そうとした。私は悲鳴を上げた。

「痛い！」

しかし、私の咽喉はからからで、かすれ声が一寸出たきりだった。ウーソフは物凄い目をして私を睨んだ。

「静かにしろ！」

叫ばなければ！助けを求めなければ！頭は破裂しそうに鳴っていないながら、声が出なかった。どうもがいても、力では到底適わない相手であった。私は敵に襲われた虫のように、身体を縮めるのがやっとだった。と、その時、扉にノックの音が聞こえた……」

危うく難を逃れた彼女だったが、反抗したゆえか、釈放は叶わなかった。

昨夜の一件があったせいも、翌日の朝には厄介者を追っ払うように、彼女は未決監から出された。そして、囚人列車に乗せられる。

その時、彼女はぎよっとした。

あのウーソフが不意に駅に現れて「他言するんじゃないぞ」と念押しし口止めをした。次は奉天の監獄に送られた。

ここでも、彼女は理不尽な場面を目の当たりにする。

『私の訊問はただの一度きりだった。やがて十一月七日、ソ連の革命記念日が来たが、この日はソ連兵も看守も、無礼講らしく、酒に酔った騒がしい声が、夜遅くまで聞こえていた。私たちは早くから寝ていて、扉が不意に開いたのは真夜中だった。廊下の歓声や乱れた唄声がどっと流れ込むの

を背にして、ぐでんぐでんに酔った看守長が立っていた。

「出てこい！」

私は毛布を頭からすっぽり被って寝たふりをしていた。恐ろしさに胸がドキドキと鳴っていた。常日頃峻厳な看守長だけに、この変身ぶりは気味悪かった。彼は私たちが動かないのを見ると、いきなり手近なドイツ女性の足を引っ張った。彼女の激しく抵抗する音が聞こえた。

なんとしても彼女はベッドにしがみついて動かなかつたらしい。

看守長は舌打ちすると今度は中国人の王さんの足を引っ張った。王さんも抵抗したが、若い小柄な彼女は男の力にはかなうはずはなかった。彼女はそのまま連れて行かれた。

酒臭い息が残った部屋の中で、私は息を殺すばかりだった。廊下のどんちゃん騒ぎはまだ続いている。

不意に、その騒ぎが静かになった。王さんはその方角に連れて行かれたのだった。その不気味な静けさは、いつまでも続いた。

王さんの身の上に何が起きているか……私は胸が引き裂かれるような気がした。この次は私かも知れない……もう眠るどころではなく、恐ろしい時間が過ぎた。

どれくらい経った頃だろう。しんとした廊下に重たい鍵の鳴る音が響いた。足音は二人だった。看守長に連れられて、王さんが帰ってきたのだ。

彼女が部屋にはいると、扉の鍵も閉められた。

私は彼女を見ることが出来なかった。

王さんは泣きも、嘆きもしなかったが、あれは虚脱ではなかったろうか。自分が生贄にならなかったことに、僅かな安堵を感じながらも、私はこの先続く、あてのない旅路に慄然とするのだった。

私が、クロポトキンの「ロシアの監獄」を読んでいたのは幸せだった。一九〇〇年頃の帝政ロシアでは、看守や監視の兵隊たちは、女囚を暴行、強姦をほしのままにしていたのである。そしてソビエト連邦となっ

た今も、この事実は多少あったのである…』

そして、収容所から流刑地へと各地を転々とさせられた後、やっと、彼女は日本への帰国許可が出た。その間、囚人同士で愛する貴重な友人も何人か得たし、自然農園のある流刑地では、同囚の男たちからこの流刑地内で一緒に住もうと、結婚を申し込まれたこともあった。

遠く離れた辺境の流刑地ならではの習いでもあった。こんな地だから、望郷の念に駆られながらのことではあるうが、日本には帰らず、男でも女でも、流刑地の一郭にそれぞれに家庭を持ち、「異国の人」となった者もあった。彼らの多くは異郷の地で涯てた。

『私の帰るところは、日本しかなかった。私は日本人であった。どんなに優遇されようと、ソ連に残る気は毛頭なかった。日本もまた、私を暖かく迎えてくれることを私は信じていた。大連で別れたきりの私の父は、この時不帰の客となっていた。(中略)私が興安丸の船上の人となったのは、昭和三十年の四月であった。私の長い旅は終わった。船がナホトカの岸壁を離れた時、十年間捕われていたこの国に対する恨みはもうなかった。人も驚くほど虚弱だった私の、根強い生命力を、十年の歳月は私に教えてくれた。かよわい人間の、強い証として私は生きたのだ。その誇りは、私の心をひそかに輝く灯であった。ともしび(オゴニカ…※注ロシア語) そうだ、シベリアの森の奥で、ひっそりと力強く咲きほこっていたあの花のよう…。日本の土を踏んだとき、私は四十六歳であった』この書の最後の件りより。

(「雪原にひとり囚われて」“改姓”坂間文子 講談社刊 ※資料⑮)

われらは白樺派なりしや

次に紹介するのは、シベリア抑留物語としては心温まるストーリーイを秘めた“男たちの友情秘話”である。

どこまでも過酷な状況が続く絶望の日々の中でも、人間としての“存在感”“心の自由”を求めて抑留者された者たちは、今日在ることは明日も在ること、そして、その日々つながりの果てには、いつか、日本への帰還の日がやって来る―いや、やって来るに違いないと心に念ずることで、やっと生きのびることへの希望を模索していた。

『註資料⑩収容所から来た遺書 辺見じゅん（一九三九〜二〇一一）の一冊を得たことで、わたしは「わが始末記」の終章の件りに“安逸”の想いを込めることが出来そうな気がした。

余りにも、全編を通じてのことであるが、悲惨な、また、「人道に著しく反した事実」とばかりを連ねていることに、正直、筆を進めていることにわたしには心重いものがあった。

ちなみに、辺見じゅんは歌人としても知られており、いくつかの「歌集」も残している。主人公の名は、山本幡男（はたお）である。

収容所内で、同囚たちに「詩句の会」の機会を設けて、せめてもの「心の自由の時間」を提供した志ある者の一人としてみんなに慕われた人物である。これからの文は「収容所から送られた遺書」の話の進展の流れになるべく沿うようにしながら、簡潔にかつ要点をまとめて話を進めてゆく。

なお、この物語は、テレビドラマ化もされ、また、令和の今日、【ラーゲより愛を込めて】のタイトルで映画化もされており、知られた話であることをお断わりしておく。

『居住バラックの内部には、中央のペーチカを囲んで俘虜たちが「蚕棚」と呼ぶ三段重ねの寝台がぎっしりと並んでいた。支給された布団は干し草を詰めたものだった。（中略）ラーゲリー（収容所）の朝は、レールの切れ端をハンマーで叩く鐘の音で始まる。毎朝六時にはこの鐘が不気味に鳴り響き、重労働の一日を告げた』

『黒パンの分配の時はみんな目の色を変えた。食事当番が炊事場から黒パンを受け取ってくると、「蚕棚」にいた者たちの目が、当番のパンを切り分

ける手に集中する。一本の黒パンをだいたい七、八人で分けるのだが、厚さのわずかの違いも見逃さない。とくに外側の堅い部分がだれにあたるかが最大の関心事となった。

黒パンは元々、作業場に携帯していく昼食用なのだが、最初のうちは空腹のあまり朝食のときに食べてしまい、夜まですき腹をかかえての作業の長くて辛いことといったらなかった。

そこで一切れの黒パンを、朝、昼、晩の三食分に分け、それをさらにサイの目に千切って水でふやかして、少しでも空腹感をまぎらわす工夫をして食べた。わずかの黒パンをめぐって、怒鳴り合ったり、掴み合いの喧嘩になることは再々だった。

黒パンにまつわる悲惨な話はどこのラーゲリーでもこと欠かない。食事当番がなに者かに頭を殴られて黒パンを奪われるという騒ぎもあった。真相は、一度でいいから満腹になりたいと、当番自身が自分の頭を殴って奪われたように見せかけたのだ。また、炊事場から黒パン一本を盗んだ男が、夜中に夢中で腹につめこんで水を飲んだとたん、胃の中のパンが急激に膨張してもがき苦しみながら死んだという事件もある。仲間たちはそれを知ると気の毒に思うより、「あいつは腹一杯食べたので、死んで本望だったろうな」と、かえって羨ましがったりした（※註資料―⑰各文とも『内の表示部分は原文を忠実に転載』）

どこの収容所でも同じ状況であったのだが、人と人の集まり、その出会いの中で、収容所の者たちはよき友を得た。句会の勉強会が山本幡男の発案により発足したことで、何人かの同志が集まった。松野輝彦、桜井俊男、難波武成、清水修三たちであった。

営内の「レーニン部屋」と呼ぶ十二畳ほどの板敷きの読書室にみんなは集まった。初めは、五人での勉強会であった。

『山本は第一回目の勉強会のとき、“万葉集”について語った。防人の歌の話から始めると、望郷の思いになんとなく身につまされて、部屋の空気は

沈んでしまった。山本はそれを察したのか、「これじゃ、通夜みたいになっちゃいますな。それじゃあ、恋の歌でも話しますか」といつて、

「たらちねの 母に障(さわ)らば いたづらに 汝(いまし)も吾も ことなるべしや」

たちどころに別の一首を口ずさんだ。

「これは男が、もうおつかさんがなんといつたつていつしよになろう、つて女を口説いている歌なんです。そしてですね…」

身ぶり手ぶりを交えながら解説を加えて、ふたたび朗々ともう一首を口ずさんだ。

「奥山の 真木の板戸を 押し開き しるや出て来ぬ 後は何せむ』」

この句の解説をさせてもらう。

かなり意味深な内容であり、「無事に恋のすべてをわがものにした」という意を含んでおり、「押し開き」の行動性を示す語句には、男ならではののおらかさが表現された自由闊達な句とも言える。

ともかく、勉強会に参加したみんなは山本の奥行きの深そうな話にも聞き入る機会を得て、山本の身の処し方に心酔していった。

或る日、仲間に加わった一人である清水修三が不慮のトラック事故で亡くなった。

『作業場からの帰りに清水はソ連運転手の運転していたトラックに乗っていて、崖から転落して死んだ。運転手の酔っ払い運転が原因だと聞いて、難波は怒りで身体中がふるえた。難波にとって、部隊からずっといつしよだった清水は、かけがえのない仲間だった。

難波は、居住バラックの一隅に祭壇をこしらえ、白樺の木で清水の位牌をつくって飾った。位牌の前に置いた空缶にタバコのマルホカをほぐして入れ、それを線香代わりにたいた。清水と親しかった人びとが通夜に集まっていると、ソ連の将校が衛兵を連れてやってきた。そして、集まった者たちに解散を命じると、いきなり祭壇を壊しかけた。

そのときだった。山本が血相を変えて将校の前にとびだしていき、激しい口調でロシア語を叫んだ。(※作者注「山本はロシア語に堪能の身」解散には応じられないと大声でまくしたてて後に引かない山本に、集まった男たちは目を見張った。スベルドロフスクに来て以来、日本人がソ連将校に敢然と歯向かっている初めての姿だった』

この時、清水の死を悼み、彼のために山本は句を詠んだ。

ボロボロ涙を流しながら山本はみんながびっくりするほど声を張り上げた。周りにいた者たちも一緒になってその句を何度も歌ったという。

その句を記載しておく。

『古里遠く 異国（とづくに）に 君若くしてみまかりぬ

夢に忘れぬたらちねの 姿を永遠（とは）に慕ひつつ

寒（さむ）風狂ふ北の涯て 君若くて世を去りぬ

暗き戦さの犠牲（いけにえ）を

集ひてこゝに弔はん』

山本の姿がときどきラーゲリーから消えるようになったのは、それから間もなくだった。スペドロロフスク市内のMVD（※KGBの前身で内務省）の事務所に呼び出されて訊問を受けているという噂がみんなの間で囁かれるようになった。本人は否定したが、「句会」はソ連側の介入によって、民主運動（※共産主義の勉強会）にとってかわり、ソ連将校が顔を出し指導役になった。その時点で、もはや、句会の趣きは失われた。

レーニン部屋の建物の入り口には、「民主本部」という看板が掲げられ、部屋の壁にはレーニンやスターリンの肖像画が飾りつけられた。

同志会の集まりに「インターナショナル」が歌われるようになった。「世界平和の城砦、ソ同盟万歳」「天皇制打倒！民主日本の建設へ」といったビラが、青年行動隊のメンバーによってブラックのあちこちに貼られていたりした。青年行動隊とは日本人俘虜グループの一員で、ソ連側の政治

主張である「共産化思想教育」に、洗脳せしめられた連中を指す。

仲間たちとは別のバラックに山本は移されていた。監禁状態にあった。

昭和二十三年九月、とつぜんに俘虜の一部に帰還が許された。第一陣に選ばれた者たちは「日本赤化活動」の要員であると思われた。

通訳の役目をこなせる山本が雑務のためと思われる役目で同行させられた。帰還組には入らず、ハバフロスク手前の駅で山本は降ろされた。

それ以後、山本の消息は絶えた。

#### 仲間たちとの再会

彼等仲間たちと山本との再会が適ったのは、別の収容所でのことで、この地は洗脳された活動家（アクチブ）たちで支配されており、新たにこの収容所に送られた者たちは「民主教育」の認識が甘いと、次々に、日本人同士の手になるリンチが日常的に繰り返された。

「民主運動」の総本山でもあったこの収容所に、山本も収監されている身であった。

この時の様を証言した者によると、

『わけても山本幡男氏に対する吊るし上げは猛烈で、二十四時間波状攻撃によって氏は極度に衰弱した』とある。

ソ連が主導する俘虜たちの取り扱いは、

第一期 懐柔時代（入ソ当初）

第二期 増産期間（入ソ一年以降）

第三期 教育期間（昭和二十三年より）

国土復興のために何年間も使役に就（つ）かせ、生き残った者たちには次に共産主義教育を施して、日本に帰還させる―この方針に反する行動を

とる者たちは「反動分子」と看做(みな)されて過酷な扱いを受けた。

山本幡男もそのうちの一人とされていたのだ。

この収容所は赤レンガ造りだったので「赤い監獄(チユリマ)」と呼ばれていた。監獄には「棺桶」「洋服ダンス」と称する丈二メートル、幅七〇センチほどの長方形の箱の拷問用具が具えてあった。

体験者によると、「棺桶」に入れられて外から鍵を掛けられると身動きならず。また、箱の中は南京虫の巣で、衣服を脱がされて箱の中に入れられていると、その南京虫が容赦なく襲い掛かった。

二時間も入れられると、どんな豪の者でもネを上げるといふ苦痛を味わう。大抵は失神した末に一時的だが病院に運ばれる。

この時の証言者橋口松男はその病室で山本と顔を合わせている。

『監獄ではコンクリートの寝台だったが、病室だけあって木のベッドで、毛布も支給されている。しかし、臀の肉がすっかり落ちてしまい、身体を横にしても尾骶骨がズキズキと痛んだ。隣の山本も憔悴しきっているようで、眼を閉じていることが多い。自分より先にアクチブのリンチや「棺桶」で相当に痛めつけられたなど、橋口は察した』

『日本はいい国ですよ。戦争に負けてかへってよかったのかもしれない。：しかし、いまのやうなこの国の共産主義を日本へ持ち込んでも、しよせん、無駄でしやうな』

それまで話しかけることのなかった山本が、ポツリポツリといった。

あまりに率直な話し方に橋口は心配になって、病室内を見渡した。

周囲に人のいないのを確かめ、

「拙者は共産主義といふのがどうもすかんです。しかし、その良い日本へいつ帰れるか、生きて帰れるかどうかもわからんじやないですか」

つい、詰問するような口調になった。

「生きていれば、かならず帰れる日がありますよ」

山本が橋口に向けて、静かな微笑を浮かべた。年寄りじみて見えたが、

目は意外に若々しい。かさかさの乾いた肌で、手足は今にも折れてしまいそうなほど痩せ細っている。こんな身体でよく死なずにいるものだと橋口は変なところに関心した』

山本幡男は明治四十一年、島根県隠岐郡西ノ島に六人兄妹の長男として生まれた。東京外国語学校露西亜語学科に大正十五年に入学したが、昭和三年に起きた三・一五事件に巻き込まれて退学処分、学校を去った。

三・一五事件というのは、当時から青年たちの間で関心が持たれていた「マルキシズム」に感化したシンパの者たちの運動の一環と関係があり、この時、山本も街頭活動をしていたことで、一斉検挙者の中の一員に含まれた。赤化教育を受ける前に、聞きかじりの主義主張だけは、山本も知っていたことになる。

その山本が、ソ連国のラーゲリー内で共産主義批判をしているのだから、主義主張とはおよそかけ離れた、いわゆる教条主義に、盲目的なるがゆえの「押し付け」「蛮行」なるものが罷り通っていたということなのだろう。渡満して大連の満鉄調査部に所属したのち、ロシア語の解せる者として北方調査部に配された。「ソ連抗戦能力」なども調査の範囲に入ることなどから、ソ連内務省側は山本の出自と合わせ、関心を寄せていたのやも知れない。山本の「ソ連経済の地理的配置」のレポートなどは、満鉄内では高い評価を得ていたという。

昭和十九年七月八日に、召集令状の赤紙が山本の手元に届いた。

三十六歳で初年兵、陸軍一等兵、教練を受けた半年後に一等兵になるが、そんな或る日、特務機関長から呼び出されて、率直な戦局についての意見を求められた。ソ連通であった山本は、この時、「敗戦はもう時間の問題だ」と思います。ただ、ひとつだけ打つ手があります。それは、ソ連を仲介にしてアメリカと和平交渉を図ることです。しかし、もうすでに、手遅れかも知れません」と、進言したという。

この時期、一時帰宅を許された限られた日の中で、彼は妻のモミジに、「もう戦争の負けははっきりしている。いまのうちなら日本へ帰ることができるから、なんとかしてお袋や子供たちを連れて日本へ帰ってくれ」と、真剣な表情で告げた。

これが、夫婦が交わした最後の「心からの会話」の最後となった。

結局、子供や姑を連れての帰国は諸条件から適わず、敗戦の混乱に一家も巻き込まれることとなった。敗戦の日、一家は新京で迎えた。

『白菊町の山本の満鉄社宅の玄関には板が打ちつけられ、吉林から避難してきていた満鉄機関区の二家族が階下に、二階には新婚の義妹夫婦とモミジ一家六人が同居した。九月に入ると、その社宅の脇の道を異様な人びとの群れが絶え間なく通り過ぎていくようになった。ボロきれやムシロや麻袋を身にまとい、なかには半裸の者もまじっていた。

満州の奥地から逃れてきた開拓団の人びとだった。女はソ連兵に強姦されないように坊主頭になって、顔には墨を塗っていた。

敗戦と同時に開拓村を満人に追い立てられた人びとが、一ヶ月歩きつづけてようやく新京に辿り着いたのだ。逃げる途中でソ連兵や満人たちに襲われ、身ぐるみ剥がされた人たちもいた。

モミジはそうした人びとの姿を見るにつけ、姑と幼い子供たちを抱えたこれからの新京での生活が不安でならなかった。九月も半ばを過ぎた頃、思いがけず幡男から安否を知らせる便りが届いた。

『「今、捕虜になって牡丹江収容所で通訳をしているから心配するな。

三ヶ月後に、ナホトカから日本に帰れることとなるだろう。君達は大连から帰国できるだろうと思っている。

どちらが先になるか分からないが、日本で再会しよう。くれぐれも体を大切に、家族全員が元気であるやうに祈っている」

その走り書きは、敗戦と同時にソ連軍に捕まった勤労奉仕隊の中学生が、山本通訳のおかげで収容所から解放されたといつて、新京のモミジの許へ

届けてくれたものだった。文面は俘虜になった身を恥じるという様子もま  
ったくない。楽天家丸出しで、いかにも夫の便りらしかった。

第二十一分所で山本幡男は仲間たちと再会を果たしていた。一人、二人  
と誘い、「アムール会」を作り、句会も開くようになっていた。連絡を取り  
合い、風呂場の脱衣所や洗濯場にひそかに集まっては句会を続ける。

句会そのものを開く時間もないので、あらかじめ作っておいた句をみん  
なは披露し合った。「これはね、ぼくたちの夜学ですよ……夜学なんです」  
と彼は口ずさみ、みんなを励ました。北溟子の俳号であった山本の句。

湯上りの匂ひも混じる夜学かな

昭和二十七年の初冬のころ、アムール会の仲間の一人が急激な寒さもあ  
り脑梗塞で倒れた。そして、あとを追うように二人が収容所で亡くなった。  
みんな絶望感に打ちひしがれた。そんな中、みんなは追悼の句を詠んだ。

千人に綿衣わたしして逝かれけり

里羊忌は冬曇る日と定まりし

寒月は 満つれど風の哭く夜かな

(※作者注―亡くなった市瀬里羊は真冬に備えるため  
の防寒具を被服係として配り終えた後の死であった。  
この一句は、元将校だった仲間へ捧げられたもの)

この時の句会で山本は「アムール会も追悼句会が続くようになったよ」  
としみじみと述懐した。

その年の十一月中旬のころのことであった。

ハバロフスクの第二十一分所に少しばかり明るさが戻った。

日本国内での同胞たち、帰還促進運動者の尽力もあり、日本からの手紙がようやく届くようになった。ソ連軍に不法連行されてから七年の歳月がすでに経過していた。なお、みんな未だに俘虜の身であった。

結婚直後に応召で仲を引き裂かれた男のところへ届いた葉書にみんなは気色だった。新婚間もなく別離を余儀なくされた新妻から葉書が届いたというので、所内で評判になった。みんなそういうニュースに飢えていた。

『いいなあ……千秋の思いか……』

素っ頓狂な声を上げた。

「そんな……そんなこと書いてないすよ」

葉書を背中に隠して男は顔を真っ赤にした。

「新妻ですぞ、なんと新妻からの手紙です」

のぞき込んだ男が声を高くしてまわりの者に伝えた。

「新妻だ」の言葉は、ひとしきり同じバラックの仲間たちの口にのぼるようになった。その男はもちろん他人の人びとにとっても、七年の歳月を隔ていても、なお新妻は「新妻」のままなのだ。その手紙を書いた新妻は、またたく間に同じ部屋の人びとの共通の「新妻」になった」

もつとも、内地からの便りも悲喜こもごもで、中には、故郷の老いた母からの手紙で、妻が再婚してしまったなんぞという話までも届くので、老いたる両親からなどの手紙を受け取る者などは覚悟して文面に目を通した。

母逝（ゆ）くと 吾子のつたなき返しぶみ

読みて握りて耐へてまた詠む

妻の死を知らせる報せであった。

差出人が妻ではなく中学生のわが子の名だったので嫌な予感を持った。

引揚げの途中に妻は平壤で、発疹チフスで死んだことが書いてあった。

その手紙を受け取ったアムール会の者の句。  
母親を失い、なお、父親は監獄につながれる身、哀れな子供たちを偲んで詠った者への仲間の句も紹介しておく。

不幸なる児となり果てぬもがり笛

#### 北暝子の春

昭和二十八年十一月、国連総会で「捕虜問題」が議題として上った時、国際加盟を許されていなかった日本だが発言の機会を得た。

第二次大戦の捕虜三十万人以上で、日本、ドイツ、イタリアの三国がソ連圏に取り残された未帰還捕虜への返還決議を行った。

敗戦国の汚名を着せられた国々であった。

悪名高いスターリンがこの年の三月に死んでいた。その訃報のあと、捕虜問題の論議の機会が持たれるようになった経緯もあった。

少しずつだが、国際世論による非難決議に応じるかたちではあったが、中国の残留者の引揚げ、フィリピンのモンテンルパ監獄からの戦犯者の引揚げなどもあり、日本への帰還に浴する者も、この時期、出始めていた。

「芋逸の俳号」のある一人が帰還組みに入り、句友を送るために詠まれた北暝子の句。

#### 蠅叩き一つ残して芋逸去る

年が明けて昭和二十九年の冬がまたやって来た。この頃、山本は著しく体調を崩し、寝たつきり同然の身となっていた。かなりの量の排膿が耳からあったが、收容所の医者は中耳炎としか診断せず、治療もしなかった。病状を見かねて句会仲間の一人が言った。

『山本さん、奥さんや子供さんたちのためにも養生をして早くよくならなきゃ。だいたい、北溟子といふ名前がよくないんだ。サンズイを目に変へたら瞑目するの瞑じやないですか。北で瞑目するなんて縁起が悪いよ。もつと、明るい号にしたらどうです。第一、北もよくないですよ』』

こんなやりとりがあつて、山本の俳号は「凶南子(となんし)」となつた。南は日本の方角への帰還を指す。凶るはそう願うの意だろう。

そんな仲間の心遣いにもかかわらず、山本の病状は日に日に悪くなつて行つた。見舞う仲間たちに折々に触れて山本は遺言のような呟きを洩らすようになつた。枕元には日本から送られてきた家族の写真が飾つてあつた。学生服を着た三人の息子たち、オカッパ頭の小さな少女、そして、祖母と妻、愛しい家族のみんなが病床にある山本を見守つていた。

そして、仲間の者たちは栄養のつくものを調達しては枕元にと運んだ。それでも一向によくならない。

いや、病状は悪化の一途だつた。

温厚な山本が何の対応もしない医師について露わな苦言も呈した。

藁包紙に鉛筆で書かれた「病床有感」には日々のつれづれの思いが綴られていた。

『日本に帰ったら、ぼくたちのシベリア句集を作らう。紙に書いて残して置けないから、それぞれが自分の句を記憶しておくようにみんなにいつてくれよ』』

と、或る日、山本は告げた。そして、ノートを開いて次ぎの句を示した。

韃靼(だったん)の野には咲かざる言の葉

花咲けりアムール会

空前のシベリア句集を編むべきは春の大和に編むべかりけり

句会の仲間たちの間で、さらなる結束が生まれ、大和国日本で句集を出

そうという思いをみんなが共有するとともに、山本の命の長くないことを慮った一人が、勇を決して、遺書形式の一文を遺すよう伝えた。

やつと、筆談でやりとりが出来た。その苦しい息の中、山本は頷いた。

昭和二十九年七月一日のことだった。

遺書はソ連製の粗末なノートに十五ページ分、四通あった。

全文千五百字もあり、寝返りも打てぬ激痛に悩まされていた身で一心に書き遺したものであった。

一通は「本文」とあり、それぞれに他の三通は、「お母さま!」「妻よ!」「子供等へ」と個別の呼び掛け形式がとられていた。

遺書を記した数日後には激しく嘔吐した。咽頭ガンの症状らしく、声は出ず、末端の血管や神経も相当に痛みつけられていた。

必死の想いで遺書を記した十日後、「昭和二十九年八月二十五日午後一時三十分」、ハバロフスクの收容所の病室で、山本幡男は四十五歳でわが命を閉じた。「非業の死」であった。丁度、他の者は作業中の時間だったので、誰にも看取られず、山本幡男は一人逝った。

この日の晩は天候が荒れに荒れた。

黒い雲が千切れ飛び、外では不吉なカラスのだみ声がけたたましく響いていた。收容所の果ての果ての闇雲までもが、渦巻くように舞い果てた。

バラックの一室で通夜が執り行われた。

白樺の木で位牌を作り、すでに亡くなった同志たちと同じ様にタバコの「マルホカ」をほぐして香とした。

やはりソ連将校がやって来て位牌をつかみ取り、何やら早口でまくし立てた後、即座に、この通夜の「心からの拵（こしら）え」は破壊され尽くした。仲間のみんなは怒りに体が震えたが、どうにもならず、彼我の国と国、死者を弔う想いの違いを、改めて知らされることとなった。

この後、山本幡男の遺体は処方通りに解剖に付され、衛門脇の屍室に戻された。遺体の首はボールのように腫れていた。

囚人番号と名前の記された板片が右手に括りつけられていた。

日本人墓地は第二十一分所から一キロあまり離れた場所にあった。

ロシア人墓地の一隅であった。

雑木や雑草が生（お）い繁った荒涼たる地、すでに、埋められた死者たち用の墓所には、二つの土があり、それぞれに山盛りの様相を呈していた。

「お前たちは生きては帰さない。白樺の肥やしになるんだ」

ソ連側の人間が日頃から口にしていた通りの状況がそこにあった。

粗末な白樺の木の墓標が立てられたが、本人の名前や死亡年月日はなく、囚人番号だけがその墓標には印された。

これが冬なら、凍土のこと、墓堀りもままならぬが、季節にだけは恵まれていて、この時、仲間たちははいねいに深く堀り、せめてものこと、安らかな死を願った。

荒海を 越えて届くや 遺書便り

自らが用意した戒名を記す。 久遠院智光日慈信士

男たちの旅路・その果ての始末記

これからが、男たちの“友情物語”となる。

七人の男たちが、それぞれに、「山本幡男の遺した遺書」を日本に持ち帰ることにしたのだが、ソ連軍からの厳しい検閲があるので、到底、遺書を日本に持ち帰ることなど適わなかった。

文書を残すことはスパイ行為と看做された。それで、みんなは一言一句のすべてを「暗記」することにした。それしかない。

「必ず遺書ヲ日本ニ届ケテ欲シイ」の山本からの願いを、仲間たちは託さ

れていた。

また、句作集も日本で刊行することも望んでいたもので、その想いも実現に移したいとみんなは心に期してもいた。アムール会は詩歌のみならず、「日本文化研究会」という有志による会も開かれたことがあった。

山本が主催した「アムール会の存在」たるものは、絶望の日々にも関わらず、多くの収容者たちの心の支えとなっていたのだ。

七人の男たちは、それぞれに知恵を絞った。

「遺書ノート」の一言一句、行変え、句読点までも正確に写すことを本旨とした。作業に出ている間の持物点検で摘発されることのないように、別の一通も予め用意し、作業中でも胴巻きの内に忍ばせたりした。

実際に、摘発に遭い没収された例もあったが、これらの用心で、「遺書ノート」は無事に保管された。

居住バラックの蚕棚では危険なので、ラーゲリーの図書室で本を借りて読むふりをしながら、懸命に筆写し暗記に努めた。

みんないつ帰れるか分からない日々だったが、夜々に蚕棚で暗誦するのが、彼等の日課となった。

〈山本幡男の遺家族のもの達よ！〉の遺書の本文の呼び掛けには、痛切の思いが託されていた。 (※作者注 旧仮名使い、一部改変)

『到頭ハバロフスクの病院の一隅で遺書を書かねばならなくなった。鉛筆をとるのも涙、どうしてまともはこの書が綴れやう！病床生活永くして一年三ヶ月にわたり、衰弱甚だしきを以って、意の如く運ばず、思ったことの何分の一も書き表せないのが何より残念。』

皆さんに対する私のこの限りの無い、無量の愛情とあはれみのこころを一体どうして筆で現すことができやうか。唯、無言の涙、抱擁、握手によって辛うじてその一部を表し得るに過ぎないであらうが、ここは日本を去る数千軒、どうしてそれが出来やうぞ。(中略)

帰国して皆さんを幾分でも幸福にさせたひと、そればかりを念願に十年

の歳月を辛抱して来たが、それが実現できないのは残念、無念。この上は皆さんの健康と幸福をお祈りしながら寂光浄土へ行くより他に仕方が無い。私の希みは唯一つ、子供たちが立派に成長して、社会の進展に役立ち、そして一家の生活を少しづつでも幸福にしてゆくといふこと、どうか皆さん幸福に暮らして下さい。これこそが、私の重要な遺言の一つです』

彼等が持ち帰った「遺書ノート」のうちの冒頭の一文である。

切々の情に打たれて、仲間たちは、脳の片隅に文字を刻印したのだ。

昭和三十一年十二月二日、ソ連地区から最後の長期抑留者一千二十五名は、第二ハバロフスク駅からナホトカへとシベリア鉄道に向った。列車はすべて寝台車で、これまでの貨車が檻つきの列車とは待遇が違っていた。

ナホトカ港には引揚船興安丸が停泊していた。

タラップを登り甲板に足をつけた時、遺書の「お母さま！」の暗記役を受け持った山岸研は、一瞬、暗記文が飛んだ。頭が真っ白になっていた。新見此助は「お母さまへ！」「子供等」の遺書を肌着に縫い付けていた。

他に、藁半紙や薬包紙に記されたメモやスケッチ画、家族からの手紙までズボンに縫い込んでいた。

本文と「子供等」を担当した後藤孝敏はすべてを脳裏に記憶させていた。

瀬崎清は遺書の全文を写したノートを袴下に入れ、足にくくりつけた。

日下齡夫はフハイカ（綿入り外衣）の綿なかに入れて隠し持っていた。「妻よ！」の紙片を綿入り外衣を細工し、縫った糸で芯を何重にもしたあと、紙片の上からさらに糸を巻いて紙片を保護した。

興安丸は岸壁を離れると、砕氷船が切り開いた氷海の先に舳先を進め、一路、日本を目指した。シホテ・アリニ連山はまだ雪に覆われていた。蹴立てる波が高くなるほどに、呪いの凍土地の景色は遠くに遠くにと去った。やっと、その夜、山本幡男が「アムール会」と名づけてから二百八十九回目の句会が、船上で催された。十八名が出席した。

その一部のみの句を捧げておく。

最終の船で帰るや皆無言

一雨

母の如き冬の巨船に駆け上がる

緑城

冬、晴れを日の丸かざし生ける甲斐

空々子

冬海や軸の雲にある母国

緑庭

祖国近し掌に受く雪のすぐ溶けて

文哉

昭和三十二年一月半ばの季節のことであった。

山本幡男の遺族宅を一人の男が訪ねた。

「私が記憶していました山本幡男さんの遺書を届けに参りました」

一通の封書を留守宅の未亡人モミジに差し出したのは山村昌雄であった。受け取った封書、コクヨの細い罫のある便箋に二枚、律儀に整えられた万年筆文字の文が記されていた。

予期せぬ客の来訪に、亡き夫からの遺書を受け取る側の手は震えた。

夫の癖の強そうな奔放な字とは違い、あくまでも、几帳面に書かれた遺書の一文、最初、モミジはこの遺書の意味を図りかね、怪訝に思った。

やっと、山村からの説明で事の次第が知れた。

この心ある「遺書の伝達」の文を追い始めた途端に、もう、胸が詰まってそれ以上は、彼女は読めなくなった。

『到頭ハバロフスクの病院の一室で遺書を書かねばならなくなった。鉛筆をとるのも涙、どうしてまともにこの書が綴れやう！……』から始まる「本文」、つまり、遺書の序文部分の遺書を書く決意を自らに強いた文節であった。一番目の使者が帰った後、モミジは泣きに泣いた。「

夫の遺書を記憶して持ち帰ってくれた人々がいる。しかも、あらゆる困難を排して……」もう、言葉に詰まった。

夫と暮らしてから今日まで四十七年もの歳月が過ぎ去っていた。

その間も一度も泣いたことなどないモミジだったが、今度の今度だけは

涙に暮れた。男たちの友情：そんなものだけではない。

あの人が遺したものの、伝えたこと、そして、共に辛苦に耐えながら同じ涙を流した仲間たちの顔：いくつもの想いのほどが交錯した。

ほどなく、十日目のこと、二番目の使者の便が封書で届いた。

野本貞夫からのもので、こちらも便箋二十五枚に細かな文字でびっしり書かれた「遺書を伝える」手紙だった。手紙だけではなく収容所での日々の事どもも、克明に記されてあった。メモのようなものはなく、あくまでも、便箋文字は頭の中に記憶させた一文を再現して表したものだだった。

それでも強記(ごうき)をもつて、「海鳴り」「裸木」「指」などの山本の詩や俳句も記憶されていた。野本の頭に刻まれていた詩の一つ、「海鳴り」の詩、一節、三節をここに披露しておく。

澄まして聴くと海鳴りの音がする

ろんろんと高鳴る風の響き

亦波の音

赤ん坊のときからその声で目を覚まし

物心つひてからもその音に脅へた

闇を叫ぶ声だ！

日本海から千籽も離れた

シベリアの曠野の真只中で

深夜！

私は遠ひ遠ひ海鳴りの音を聴く

窓打つ木枯らしよりも淋しく

亦懐かしいその響き！

母の乳房を思ふ存分吸って見度ひ

友の手を力一ぱい握って見度ひ 海鳴りの音

恋人の胸をかつしりと抱いて見度ひ 海鳴りの音

胸に溢れる慷慨（こうがい）をありつたけ吐いて見度ひ海鳴りの音

嗚呼 寒夜の病床に独り目を覚まして

私は ろんろんたる海鳴りの音を聴ひてゐる

遠く追憶を噛みしめてゐる…

（※作者注慷慨は憤怒、怒りの意）

『…山本さんは終始、必ず帰るの信念を持ったダモイ説（帰還）支持者でした。我々は生涯帰ることなくここで白樺の肥やしになるのだろうといふ悲観説（白樺派と呼ばれていました）に傾きがちな時期にも自説を曲げることなく…』野本の手紙より。

三番目、四番目も封書で間もなく届いた。

愛知県在住の後藤孝敏が「子供等へ」、そして、兵庫県から森田市雄が「妻よ！」を、それぞれに「刻印に値いする書」のままに送り届けた。

五番目は、福岡から上京した瀬崎清が、わざわざに、埼玉県大宮市のモミジの自宅までも訪ねてくれた。

ソ連製の粗末なノートに、山本の書体まで真似て全文が書き写してあった。埋葬した墓地のある場所の地図や、「45」の墓番号までもが記載されていた。

六番目の使者となったのは新見此助であった。山本とは同郷の島根県出身者で個人的にも、山本の存在を崇めていた一人である。

収容所のみんなを励まし、「詩句の心の自由さを教えてくれた山本」はわが師でもあった。「死ノウト思ッテモ死ネナイ…」などと山本が痛苦の思いを綴った、葉包紙に赤鉛筆で書かれた最後の走り書きも見付かった。

そして、最後になった七番目の男は日下齡夫であった。実に、山本が「凍土の墓」に葬られて三十二年目に一通の封書が届いた。

みんなの意向を無視していたのではなく、山本幡男の命日に「アムール会」の者たちが集った際に、他の者から遺族宛てに遺書の全ては送り届けられた旨の事実を聞き及んでおり、自分は控えていたのだった。

この最後の文は、過酷な抑留生活を物語る貴重な資料の一つとしての価値も改めて見出し得る暗記物で、赤線や○印などが、その暗記文には事細かく書き込まれていた。

遺書には「本文」「お母さま」「妻よ!」「子等へ」が遺されているが、これからの日本国を担って立つて欲しいの思いを込めて山本幡男は「子等へ」の遺書を認めていると思うので、さらに、これからの世、今の若者たちへの期待も込めて、日本の夢ある将来に思いを馳せながら、ここに、四人の子供たちに送られた山本幡男の遺書の大部を公開しておく。

「子等への遺書」は何度も読み返すだけの意味合いが今でもあると思う。その意味で、ここに掲げることにした。

なお、敗戦数年後のこの年、長男顕一は大学合格を果たしていたが、受験の経緯は手紙で知らせたので父親は知っていたが、せめてもの慰めごとの吉報の報せを受ける前に、山本幡男はこの世の人ではなくなっている。

『子供等へ。山本顕一 厚生 誠之 はるか

君たちに会わずに死ぬことが一番悲しい。成長した姿が、写真ではなく、実際に一目みたかった。お母さんよりも、モミジよりも、私の夢には君たちの姿が多く現れた。それも幼かった日の姿で…あゝ何といふ可愛い子供の時代!

君たちを幸福にするために、一日も早く帰国したひと思つてゐたが、到頭永久に別れねばならなくなつたことは、何といつても残念だ。第一、君たちに対してまことに濟まないと思ふ。

さて、君たちは、之から人生の荒波と闘つて生きてゆくのだが、君たちはどんな辛い日があらうとも光輝ある日本民族の一人として生まれたことを感謝することを忘れてはならぬ。日本民族こそは将来、東洋、西洋の文

化を融合する唯一の媒介者、東洋のすぐれたる道義の文化―人道主義を以つて世界文化再建に寄与し得る唯一の民族である。

この歴史的使命を片時も忘れてはならぬ。

また君たちはどんな辛ひ日があろうとも、人類の文化創造に参加し、人類の幸福を増進するといふ進歩的な思想を忘れてはならぬ。扁頗（へんぱ）で嬌激（きょうげき）な思想に迷ってはならぬ。どこまでも真面目な、人道に基く自由、博愛、幸福、正義の道を進んで呉れ。

最後に勝つものは道義であり、誠であり、まごころである。

友だちと交際する場合にも、社会的に活動する場合にも、生活のあらゆる部面におひて、この言葉を忘れてはならぬぞ。

人の世話にはつとめてならず、人に対する世話は進んでせよ。但し、無意味な虚栄はよせ。人間は結局自分一人の他に頼るべきものが無い！といふ覚悟で強い能力のある人間になれ。自分を鍛へて行け！精神も肉体も鍛へて、健康にすることだ。強くなれ、自覚ある立派な人間になれ。

四人の子供たちよ。

お互いに団結し、協力せよ！（中略）

自分の才能に自惚（うぬぼ）れてはいけない。学と心理の道におひては、徹頭徹尾、敬虔（けいけん）でなくてはならぬ。立身出世など、どうでもいい。自分で自分を偉くすれば、君等が博士や大臣を求めなくても、博士や大臣の方が君等の方へやつてくることは必定だ。要は自己完成！しかし、浮世の生活のためには、致方なしで或る程度打算や功利もやむを得ない。度を越してはいかぬぞ。最後に勝つものは道義だぞ。

君等が立派に成長してゆくであらうことを思ひつつ、私は満足して死んでゆく。どうか健康に幸福に生きてくれ、長生きしておくれ。

一九四五年七月二日

『山本幡男』

アムール会の仲間たちが、一句一句に託した想いを借りながら、最後の最後にもう一つ、山本幡男が亡くなった日に詠まれた仲間の句を、哀悼の意を込めてここに止めおく。

(※作者注―卯はうさぎの月)

虫の夜を卯指し泣かれけり

とうきびのさやげば柩白かりき

眼鏡拭く師の倂や秋桜

ひとつ灯の遙かに遠し虫の声

眼鏡一つ残して逝くや秋曇り

この一連の「男たちの友情物語」だが、そもそもは、『昭和の遺書』なる一般応募が、昭和六十一年にさる書店主催で行われた際に、夫からの遺書を届けてくれた夫の仲間たちへの感謝も込めて、世にも問うて欲しいと願った山本モミジが応募に応じたもので、初めに、目を通した関係者たちが、「涙なしには読めぬ物語」として採り上げたのがきっかけとなった。

何よりも今の世にも、そして、これからの世にも、山本幡男の遺した「昭和の遺書」は、後々の世までも見据えて書かれていることに注目したい。

彼らの世代が考えていたこと―日本民族とは何か？日本民族の価値とは？これからの時代、日本民族はどう位置づけられるのか？その問い掛けが為されており、その答えを出すのは誰かをも問うてもいる。

自ずからに、それはあなた自身なのだと言うことが、子等を通して我々に伝えられているように思う。私は日本国を思う憂国の士の“真意”なるものを、そのように感受した一人だ。

【完】

★後記資料Ⅰ

(※註 作者による各書・資料の簡略解説)

①「ある戦後史の序幕―MRC引揚者の記録」西日本図書コンサルタント―協会刊。かつて日本人も難民であった。略奪・暴行・不法妊娠・孤児・栄誉失調・餓死など、敗戦引揚者の実態を記録。医師側からの協力(京城帝大医学部メンバーを中心に)に医療機関関係者の視線で描かれた貴重な資料書。昭和五十五年刊。

②北斗星―「戦後の第三国人の暴虐行為」を追及したwebサイトでは絶対支持者のいる先達のメッセージ。逃げ腰マスコミの問題をこれ迄鋭く指摘して来た。

③「東京闇市興亡史 東京闇市を記録する会―猪野健治編」草風社、昭和五十三年刊。メンバーは猪野健治、斉藤雅子、茶木繁正、原正壽、山岡明、佐藤文明、阿佐田哲也、真壁 昊、高橋和夫、山下諭一。実地に証言者などを得ての取材と、闇市事情についての細目で資料収集に労が割かれているので資料本としても貴重な書。闇市解放区ことはじめ。闇市ファッション、闇市の中の生活、上野・アメ横、「証言の宝庫」カストリ雑誌、焼跡で声を枯らした“民主選挙”、闇市に「リンゴの歌」流れて、焼跡ギャンブル時代、生贖にされた七万人の娘たち、闇の女たち、この露骨な文化変容、露店市の終わりに、東京闇市興亡史・年表項目もあり。

④「大阪〇焼跡闇市―かつて若かった父や母たちの青春」副題にもあるように戦後生まれ世代による編著。夏の書房刊、当時健在であった体験者からの綿密な取材が生きている作。編者責任者は、事務局長光瀬日出夫。立ち上げの弁「僕たちは“端境期”の世代やで。僕らの一つ前の世代、焼跡闇市派。あれにはどうにも負けそうや。あのしごとや、ねばつこさはなんやろうな」の言が、この書の生まれる機縁となった。

⑤「日本の貞操―外国兵に犯された女性たちの手記 水野浩編。昭和二十五年蒼樹社刊。朝鮮事変前に編者はこの書を書く決意を得たとある。二年後に刊行。連合軍将兵たちの蛮行の数々を、被害に遭った女性たちの手記を通して語り掛けている。GHQに発禁書とされてもおかしくなかった内容の貴重な告発書である」

⑥「我ら降伏せず 田中徳祐」復刊ドットコム刊。サイパン島玉砕の跡も奮戦した生き

残り部隊の実記。サイパン戦記&玉砕後の生々しい目撃の数々を記録。GHQから発禁書とされ廃棄された問題の書の復刊本」

⑦「第2次世界大戦日記 上、下巻。チャールズ・リンドバーグ。連合軍の蛮行を告発した書としては世界的によく知られている鋭意の書で、評価が高い」

⑧「アーロン収容所 会田雄次 中公文庫刊。ビルマ参戦後に捕虜になり収容所に二年間抑留される。その間の冷徹な人間観察と知性ある文化比較論・分析など、幅広く筆が及ぶので読物としても評価の高い抑留記」

⑨「戦争裁判の実相 巢鴨法務委員会編」不二出版刊。戦犯に問われた将兵たちの告発罪状の内容。取調官らの横暴、捕虜虐待、その結果の罪状・判決に至るまでの過程を明細に追及。また、戦犯に問われた将兵の手記も収録。膨大な分量の資料を元にまとめられた関係者の労力・熱意に支えられた書。価値ある史書である」

⑩「台湾人と日本人精神 日本人よ胸を張りなさい 蔡焜燦。日本教文社刊。副題にある通り台湾人と日本人との心の触れあいを大事に扱った心ある書」

⑪「シヤブ 知られざる犯罪地下帝国の生態 趙甲濟黄民基訳。JICC出版局刊。この書は「月間朝鮮」誌に一九八三年十二月号〜一九八四年二月号で連載されたシリーズ物に加え、更に取材行などを重ねて出版となった。韓国実力記者の力作で玄界灘を越えての韓日のシヤブ生態は公正な作品としての評価が高い」

⑫「戦後引揚者の記録 岩槻泰雄」時事通信出版社刊。実記としての迫真性があり、この書の代表作としての評価が高く、これ迄にも多くの他書に採録、紹介されている書で、引き揚げ者の血涙が伝わって来る史書」

⑬「検証一九四五年夏―満州開拓団の終焉 合田一道」扶桑社刊。開拓団誕生の事由から、敗戦による終焉までの悲壮な史実を、現場に居合わせた者だけが知り得る綿密さで追っている。資料史書の評価も高い」

⑭「シベリア抑留記 ウィリアム・F・ニンモ。時事通信社刊。シベリア抑留とは何だったのか。ソ連参戦、連行、強制労働、思想教育、そして日本への帰還―。「シベリア抑留」の全容を戦史研究家が解明する。

⑮「雪原にひとり囚われて 坂間文子 講談社刊。シベリア抑留十年の記録の副題。な

にゆえに女性が…この謎に真正面から立ち向かわねばならなかった一女性の、悲しくも逞しい、その生き方が人の心を搏つ」

⑩「収容所から来た遺書 辺見じゅん 文芸春秋刊。シベリア抑留所での血「むと涙、そして多くの命が無為にふされた。それらの無念の想いがそのままに伝わって来る書。著者は、当書の“あとがき”欄に次の言葉を残している。“本書の最終稿を執筆中に昭和から平成へと元号が変わった。私たちの「昭和」とは何であったのかはこれからの検証に待つものが多いのかもしれない”とも述べている。その意味もある書である」<sup>19</sup>「沖繩 だれも書かれなかった戦後史 上巻下巻 集英社文庫」<sup>20</sup>「沖繩から「日本の主権」を問う 協力沖繩タイムス社編集沖繩問題編集委員会 リム出版新社」<sup>20</sup>「裁かれた憲兵―中国国民政府の戦犯裁判を中心に 和田英穂 岩波書店刊」

#### ★資料Ⅱ

「同日同時刻」 「戦中派闇市日記」 「戦中派焼け跡日記」 山田風太郎 小学館文庫

「敗戦日記」 高見順 文春文庫

「秘伝少林寺拳法」 宋道臣 光文社

「田口組三代目」 田岡一雄伝

迅雷編 電撃編 徳間文庫

「韓国・朝鮮と日本人」 岩槻泰雄 原書房

「原色の戦後史」 大島幸夫 講談社文庫

「白の墓名碑」 従軍看護婦の記録 医療文芸集団

「シベリア抑留」 未完の悲劇 栗原俊雄 岩波新書

「竹林はるか遠く」 ヨーコ・カワシマ ハート出版

「忘却のための記録」 清水徹

「ベルリン終戦日記―ある女性の記録」 白水社

「パンパンとは誰なのか」 茶園敏美 インパクト出版

「BC級戦犯」 林博史 岩波新書

「芙蓉の花」 天内みどり 近代文芸社

「誰も戦後を覚えていない」 鴨下信一 文芸春秋

「コリアン世界の旅」 野村進 講談社

「闇市の帝王」―王長徳と封印された「戦後」―七尾和晃 草思社文庫

「第三国人の商法」 林奎浩 KKベストセラーズ

「在日朝鮮人に問う」 佐藤勝巳 亜紀書房

\* 「余命三年時事日記」 1 2 青林堂

\* 「余命三年時事日記ハンドブック」 青林堂

\* 「共謀罪と日韓断交」 青林堂

\* 「外患誘致罪」 青林堂

\* 各本は余命プロジェクトチーム編

### 資料Ⅲ webサイト

・「黒い春（パンパン）・女たちの戦後」五島勉 倒語社。・「密造拠点韓国への覚醒剤半世紀」薬物問題ルート 小林榮。・「青葉慈蔵尊由来記」従軍看護婦の悲劇物語。当時の婦長が痛哭の想いを込めて出版した。現在、原本は絶版状態 経緯は不明。webサイト提供者は現在も「青葉慈蔵尊」にて慰霊者の毎年供養を行っている。・「兵庫風雪二〇〇年 岩佐純」兵庫新聞社刊。・「されどわが満州」平本直行 文芸春秋。・「1945満州進軍の露戦と毛沢東の戦略」徐焯。・「私のシベリア抑留記」河村廣康他。・「朝鮮進駐軍を名乗った戦後の在日の悪行」北斗星。・「二日市保養所」・「闇に葬られた終戦後の日本女性の悲劇」・「戦後・博多の港引揚者らの記録」。「明日を夢見て」。「余命三年時事日記ブログ」。